
野に咲く花のように

璃亜那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

野に咲く花のように

【Nコード】

N8806T

【作者名】

璃亜那

【あらすじ】

とある王国の後宮の片隅でひっそりと生きる側室、セシル。このまま、何事もなくひっそりと生きて行くのだと思っていた彼女の日常は思いがけず国王 エドアルドの寵愛を受けることになり大きく変わっていく。

第44話の最後の部分を改稿致しました。お手数ですがもう一度目を通してくだされば幸いです。よろしく願います。

第1話

「今日も平和だわ」

セシルは窓の外を見つめながら穏やかに呟いた。セシルはアルコーン国の国王の側室の一人。

側室になってもうすぐ一年が経とうとしているが、セシルの生活は平穩そのものであった。

セシルが国王である『エドアルド・クリスティアン・アルコーン』のお通りを受けたのは後宮に上がった、その日のただ一度だけ。

その一度のお通りは慣例のようなものであり、唯一他の側室たちから黙認される国王との逢瀬でもあった。

これが二度、三度と続けばセシルも他の側室たちに厭われ、何かしらの嫌がらせを受けるところであつたであろうが、幸か不幸かセシルはその後、エドアルドの訪問を受けることがなかった。

元々控え目な性格も合わさって、セシルの存在は後宮の中でもほとんど目立たない存在となり、後宮にありながら、命を狙われることも、嫌がらせを受けることもなく、平穩な日々を送ることができるようになった。

「平和すぎますわ・・・」

実家からセシルに付いて後宮に一緒に来た侍女のニコラは不満そうに呟えた。そんな彼女にセシルは苦笑いを浮かべる。

「セシル様はもう少し陛下の目に留まる努力をなさるべきですわ。夜会にもお出にならないし、陛下が後宮においでの際もわざと部屋に籠られて、そんなことでは本当に陛下に忘れられてしまいますわ」

もうすでに忘れられていそうだとセシルは思った。セシルが後宮に上がったのを最後に新しい側室は召しあげられていない。王妃の選定に入っただけではないかともつばらの噂だ。

その噂が本当だとしたらセシルは自分がその候補の一人に数えられることはないと思っていた。たった一度しかまともに逢ったことがないのだ。そう考えるのが自然だ。

エドアルドの心の中には幾人かの側室が居て、その中から王妃を選ぶつもりなのだろう。自分のことなど記憶の片隅にも置いてはいまい。セシルはそう考えて溜息をついた。

王妃に選ばれなくても後宮を出ることは叶わないからだ。一度ここに入ってしまった国

王の寵愛を得ようが得られまいが出ることはできない。一生ここで生きていかなくてはならないのだ。国王の側室というのはそういうものなのだとここに来た日に女官長から教えられた。

降嫁という手があるにはあるのだがそれには国王の、エドアルドの許可がいる。

エドアルドに忘れられた側室にはその望みも無いだろう。

誰かがセシルを望み、エドアルドに頼みでもすればすんなりと許可が降りそうなものだがセシルにはその誰かも居ない。

実家にいる頃、父に伴われ、何度か夜会に足を運んだことはあるが、セシルは華やかな

席がどうも苦手で挨拶まわりを済ませるとすぐにテラスか会場の隅に身を寄せていた。

そんなセシルに声を掛けてくる男性は皆無だったし、セシル自身の人見知りで引っ込み

思案な性格もあって、セシルを見初める男性もセシルが惹かれる男性も現れはしなかった。

そのことがなんだか今は悔やまれる。

もう少しだけ社交的な性格だったなら、今のこの生活はなかったかも知れないとセシルは思う。後宮に上がる前にどこかに嫁ぐことも出来たかもしれないし、後宮に上がった

後でも夜会に参加して誰かに見初めてもらうことが出来たかもしれない。

そこまで考えてセシルは再び溜息をついた。

貴族間の夜会ですら気が重く、出来れば行きたくなかったのが本音だ。王宮の夜会など

セシルにとっては規模が大きすぎてとても足を運ぶ気になれなかった。

エドアルドが気まぐれに後宮を訪れ、庭園を散策することがあるが、セシルはわざと

その際に庭園に行くことを避けた。一度遭遇した時の他の側室たちの様子に恐怖を覚えたからだ。

エドアルドに取り入ろうと甘い声で甘える者、いかに自分の家柄が素晴らしいか饒舌に

語る者、魅惑的な仕草でエドアルドを誘惑しようとする者……。

そこにはたくさんの

感情が溢れていた。驕り、妬み、欲望、野心、数え上げたらきりがないほどの負の感情

の坩堝は遠くで見つめていたセシルに眩暈を覚えさせるほどだった。

巻き込まれ前にここを去らねばならない。セシルは本能的にそれを察し、踏み入れかけた

庭園から足早に去った。

それがセシルがエドアルドを見た最後。その日以来、エドアルドには逢っていない。

逢ったと言ってもセシルが一方的に遠目で見ただけだが……。

「セシル様！」

深く考え込んでいたセシルは大きな声でニコラに呼ばれてハッと我に返る。

考えてもどうにもならないことを考えていたような気がしてセシルは思わず

自分を笑った。

「セシル様？」

そんな様子を訝しんでニコラが名を呼ぶ。セシルは気を取り直してニコラに声をかけた。

「何でもないわ。ニコラこそどうしたの？大きな声を出して」

ニコラは気合いを入れるように短く息を吐くとセシルにこう言った。

「セシル様、今宵の夜会に参加申請を出します」

言われてセシルは仰天した。今まで夜会で出るように言っでは来ても参加申請するとまでは言われなかったからだ。そこまで言うということは今日のニコラは本気なのだということだ。

「ちょっと待ってニコラ！・・・私にはあんな大きな夜会は無理よ・・・分かってるでしょ」

セシルは思わず反論するが、ニコラは表情一つ変えずに続けた。

「いいえ。出ていただきます。セシル様、夜会の際に陛下の許可があれば家族と

面会できることを覚えてらっしゃいますか？」

「それは・・・」

覚えているも何もそのことはセシルをずっと悩ませていることの一つだった。

家族に逢いたい夜会に出ることが条件になっていてはそれは叶わないとセシルは諦めていたのだから・・・。

「参加申請と同時に面会許可の申請も致します。ここへ来てもうすぐ一年になるので
す。ご両親からも心配する手紙が頻繁に届いていることですし、一度お逢いになった
ほうがよろしいかと思えます」

セシルはニコラの顔をじっと見つめた。小さな頃からずっと自分の侍女をやってくれて
いるがどうにもつかみどころない人物で、何を考えているのかよく分からないことがあ
るとセシルは思っていた。

「・・・お前は、陛下の目に留まるためではなく、お父様に逢うために夜会に行けと
言っているの？」

「・・・はい」

セシルの問いをニコラは肯定したがセシルはどうにも腑に落ちなかった。

ついさつき『もつと陛下の目に留まる努力を』と進言されたばかりだったような

気がするのだが？それはもういいのだろうか？それともとりあえず夜会に出してしま

えとも思っているのだろうか？セシルはよくわからなくなってきたが、誰かに背中

を押して貰わなければ自分が夜会に出る決断をできないことだけはよくわかった。

・・・これは好機なのかもしれないとセシルは思った。

「・・・それだけでいいのなら。私はお父様に逢ったらずぐに夜会から引き上げる

わよ？・・・それでいいのね？」

セシルは念を押すように問いかける。ニコラはそれを悠然と受け止めて口角を上げて応えた。

「もちろん。それで構いません。では、私は女官長の元に申請に行つて参ります。」

ニコラはセシルに一礼して、部屋を出て行つた。

ニコラが出て行つたドアを見つめながらセシルは一人呟いた。

「お父様に逢うために行くだけなら、大丈夫よね・・・」

今まで一度も夜会に出たことのないセシルがその場に行くことは他の側室に何と

思われるかわからない。一抹の不安を胸にセシルは久しぶりに逢える父に想いを

馳せた。

一方、廊下を歩くニコラの顔にはうつすらと笑みが浮かんでいた。

夜会に出る気になったくれただけでも一歩前進したと言っていいだろう。あとは

何かと理由をつけて何度も夜会に参加させるだけだ。

ニコラをそう考えながら女官長の部屋を目指した。

第2話

「失礼いたします」

来訪者を招き入れてから女官長はその表情にこそ出さなかったが、意外な人物が来たと思った。仕事柄、側室とその筆頭侍女の顔は全員把握している。この侍女はセシルの筆頭侍女だったはずだと女官長は記憶を辿って思い至る。セシルがここへきて一年。一度も訪ねてくることのなかった人物が目の前に現れ、女官長はその真意を測りかねていた。

「・・・セシル様の侍女殿ですね。いかがいたしました？」

「久しぶりにお会い致しましたのに、私がセシル様の侍女だとお分かりになるとは、流石は女官長様ですね」

嫌みともとれるその発言に女官長内心ムツとしながら先を促した。

「・・・用件は？」

女官長のそんな態度にニコラはわざとらしく肩を竦めてみせた。

「セシル様の今宵の夜会の参加申請に参りました。同時にセシル様のお父上、アロイス・ブルックナー伯 爵との面会を希望致します。陛下に御取次願います。」

言いながらニコラは流れるようにお辞儀をした。ニコラの用件に女官長は一瞬、目を見開いた。

あの、セシル様が夜会に出る・・・？

今まで、何度遠まわしに水をさし向けても頑なに夜会に出ることを拒んでいたセシルが夜会に出るといふ。一体、どういう心境の変化があったというのか・・・。

女官長は微かな疑惑を胸にニコラを訝しんで見た。その視線をニコラは気付いてないのか、気付いていないふりなのか眉一つ動かさずに受け止めた。

「セシル様ご自身が夜会への参加をお決めになったのですね？・・・貴方の独断ではなく」

「当然でございます。私が持ちかけたことではございますが、最終的に夜会に出るとお決めになったのはセシル様でございます。」

ニコラはさも心外であるという口調で女官長に応える。女官長は俄かには信じがたかったがそれ以上何も言わないことにした。

「分かりました。セシル様の希望は宰相を通して陛下に伝えられます。昼過ぎには返事が来るでしょうから、部屋で待機なさってください。」

「よろしくお願い致します」

女官長の言葉を受けて、ニコラは深々と頭を下げ、部屋を出て行くとした。

「・・・一体、どうしたというのかしら？」

女官長の小さな呟きがニコラの耳に届く。ニコラは扉に掛けていた手を一旦離し、女官長を振りかえりこう言った。

「セシル様はお父上にお会いしたい一心で勇気をだされたのですよ」
女官長が勢いよくニコラのほうを振りかえる。ニコラはにつこりと笑って、もう一度お辞儀をすると今度こそ部屋を出て行った。

ニコラが去った後、女官長は必要な書類にセシルの希望を記し、急ぎだと前置きを加えた上で宰相への使いに持たせた。朝のうちに陛下の目に入らなければ面会希望の部分が叶わない可能性があるからだ。

夜会の招待客は既に決まっている。側室の誰かが家族との面会を希望した場合、その家族が初めから招待されていれば何の問題もないが、招待されていないとなると少々厄介だ。

セシルの父はそれなりに高い位の貴族ではあるが、王宮の夜会に招待されるかは微妙な位置にいる。日中の内に招待状が届かなければ夜会に来ることは叶わないだろう。ことは急を要するのだ。

女官長はニコラの言葉を全面的に信じたわけではないが、セシルが父に逢いたいから夜会に出る決心をしたという部分だけは納得がいった。あの大人しいセシルがそこまでして逢いたいなら叶えてやりたいと思った。

セシルが後宮に来た時、女官長はこう思ったのだ。

この娘は後宮には向かない。

伯爵令嬢として、蝶よ花よと育てられたはずなのに、大人しく控え目で野心のかけらも見えはしなかった。容姿も美しいというより愛らしい顔立ちに痩せすぎでも太りすぎでもない普通の体系。煌びやかに着飾るよりも自分の好きな物、似合う物を好んで身につけるらしく、見かける際のドレスはいつも質素な装いだった。それでは何人もいる側室の中に埋もれてしまう。

案の定、セシルはエドアルドからも他の側室からもまるで居ないかのように扱われている。

本人がそれを気に病んだ素振りを見せないことが女官長にとって唯一の救いであった。そのセシルが初めて己の願いを曝け出したのだ。出来れば叶えてやりたかった。

第3話

「またか」

急ぎだと渡された書簡は側室の夜会参加申請だった。この程度を急ぎだと言われて宰相エルンストは些か憤慨したが申請理由に目を通し、溜飲を下げた。家族との面会を希望しているのならしょうがないと思い直したからだ。

「陛下」

エルンストは席を立ち、目の前の机で政務に励んでいるエドアルドに声をかけた。

「何だ？」

書類から目を離さずにエドアルドが応える。その声は少々不機嫌な物であった。

「側室殿の夜会出席希望届にサインをお願いします。それと夜会の招待客の追加の許可を」

「招待客の追加？」

「この側室殿は家族との面会を希望されておりますので」

エドアルドはまたかと思いながら、エルンストから書類を受け取る。

もう、これで何件目の出席申請だろうか？どうせなら一度に全部持つてくればいいのにとエドアルドは内心溜息をついた。だが、次の瞬間、書類に書かれた名前に目を見開く。

『セシル・ブルックナー』

セシルが此処へ来て1年。初めてその名を申請書の中に見た気がする。エドアルドは書類を見つめ思った。

漸く、時が来たというのか？

「陛下？」

申請書を見つめ、何やら考え込んだエドアルドをエルンストが不思議そうに呼ぶ。

「何でもない」

エドアルドは静かにそう応えると、書類にサインをし、エルンストに差し出した。

エルンストは書類に目を通し、軽く頷いた。

「確かに、では、これを後宮へ返します。ブルックナー伯爵にも使いを出します。」

「それでは」

「……エルンスト」

一礼して踵を返し退室しようとしたエルンストをエドアルドが呼びとめた。

「・・・何でございましょうか？」

何か用があるから呼びとめたはずなのに、エドアルドはなかなか口を開かない。

「陛下？」

エドアルドらしからぬ行動にエルンストは眉を顰める。いつもの彼は決断力に優れ、何事も即断、即決でその判断も的確だった。そんな彼がこんなに言い淀むことは一体何なのだろうか？不審がりながらエルンストはエドアルドの言葉を待った。

「・・・随分前に作らせたドレスと装飾品はどこにある？」

「は？」

漸く告げられた言葉にエルンストは思わず間抜けな声を上げた。そんなエルンストをエドアルドが睨む。

「あ、・・・ああ、あの送る宛ての無かったドレスのことでございますか？あれな

らきちんと保管してあるにはありますが・・・」

睨まれながらエルンストは記憶を辿ってそう答えた。一年程前、急に仕立て屋を呼んでエドアルドがドレスと装飾品を作らせたことがあった。えらく拘って細部に亘り注文をつけて仕立てさせたというのに出来上がった其れをエドアルドは誰にも送ろうとはしなかった。気が変わったのか何なのか分からないが、捨てるわけにもいかず、一応保管してあった。

「アレは送る宛てが無かったのではない。贈る時期を待っていたのだ」

言いながらエドアルドは溜息をついた。まさか、一年かかるとは思っていなかったのが本音だが……。そんなエドアルドを納得がいかないような目でエルンストが見つめていた。

「何だ？その目は、まあいい。あれをセシルの元へ届けさせよ。今宵の夜会には

それを身につけて出席せよと申し付けよ」

「・・・畏まりました。そのように手配いたします」

一礼し、退室しようとする扉まで向かったところでエルンストはもう一度、エドアルドを振りかえる。既に政務に戻っているエドアルドはその視線に気づかない。

エドアルド・クリスティアン・アルコーン。

先王の早すぎる崩御により齡18で一国の主となった。

年若き王を侮り、征服しようとする近隣諸国を見事にうち破り、その戦に長ける様を見せつけ、古参の大臣連中や自分の子を王に据えようとする先王の側室たちを黙らせた。

その手腕は内政にもいかになく発揮され、アルコーン国は先王の代より、格段に豊かにそして、安全になった。

目の覚めるような銀髪に戦場を駆け回ったとは思えぬほど透き通った白い肌。

浅黄色の瞳にすつと通った鼻立ちに形の良い唇。

人々は憧れをこめて彼をこう呼ぶ。

『銀月の王』

王になって10年。28歳になったエドアルドに王妃を望む声は多い。

だが、当の本人にまったくその気がないように見えることがエルンストは

気がかりだった。

そのエドアルドが女性にドレスを贈るという。

エルンストはそれはよい兆候だと思った。だが・・・

疑問を口にしたところで答えは期待できまい。

エルンストは喉元まで出かかった質問を飲む込むと執務室を後にした。

何故、彼女なのだ？

記憶と記録を照らし合わせてもエドアルドがセシルの元を訪れたのは最初の一夜限りであることは明白だった。その一夜で一体何があったのだろうか？

『時期を待つて居た』とエドアルドは言っていたが、其れはどういう意味なのだ？

湧きあがり続ける疑問を胸に抱えたまま、エルンストは準備に取り掛かった。

第4話

コンコン

部屋に響くノックの音に女官長は宰相の使いが来たのだと思った。セシル他数名の夜会出席許可が出たのだろう。そう思いながら扉を開けた彼女の目の前に思いがけない光景が広がっていた。

扉の向こうに居た人物は一人ではなかった。いつもは使いが一人だけやってくるだけなのに、今回は使いは数人でやってきた。その何人かは小ささまざまな箱を手にしている。

「・・・何事です？」

「ご側室様方の夜会への出席許可を知らせに参りました。それから・・・」

先頭に立ってたいた使者が言いながら後ろを振り返る。

「こちらの品々はエドアルド国王陛下からセシル様への贈り物でございます。」

その言葉を受けて女官長は内心大変驚いた。

陛下からセシル様へ贈り物？一体なぜ？

だが、流石は女官長。それを一切表情には出さずに歩きだした。

「そうですか。では、ご案内致します」

使者たちをセシルの部屋へ案内しながら女官長は密かに溜息をついた。

きっと、セシル様はお困りになるのでしょうね・・・。

他の側室ならエドアルドから贈り物を贈られれば大喜びしそうなものだが、

セシルの場合は大いに困惑しそうだ。

欲など無いお方ですし、それに贈られる心当たりもないでしょうしね・・・。

女官長は重くなりがちな自分の足を心の内で叱責しながらセシルの部屋を
目指した。

コンコン

ノックの音にニコラは扉の前に勢いよく駆け寄った。待ち焦がれた返事が

漸く来たのだ。ニコラは気を落ち着かせ、扉を開いた。

「いらつしゃいませ、女官長様。・・・後ろの方々は？」

てつきり女官長一人が居るものと思っていたニコラはその後ろにいる騎士と数名の従者に驚いた。一体何事だろうか？

「こちらは陛下からの使者の方々です」

紹介されると同時に使者たちは「失礼します」と言いながら次々と荷物を運び入れた。

「・・・これは？」

目の前に詰められた幾つもの箱に戸惑いながらセシルが使者に問いかける。

「陛下から、セシル様に贈り物でございます。今宵の夜会はこちらを身に

つけて参加せよとの陛下のお言葉でございます」

使者はそれだけ告げると一礼して部屋を出ていってしまった。

後には困惑顔のセシルと訝しげな顔のニコラ、そして無表情の女官長が

残された。そして、三人の目の前に贈り物だという箱の山・・・。

「・・・何かの間違えではなくて？私には陛下から贈り物を戴く理

由が

ないわ・・・」

初めに口を開いたのはセシルだ。女官長の予想通り、随分と困惑している。
「いい
るようだ。」

「使者は『セシル様へ』とはつきり申しましたので、間違えではない
と思いますか・・・」

女官長が応えるがセシルは納得がいかない様子だった。

「陛下が名前を間違えたのではなくて？私と似たような名前の別の方に贈るつもりでらっしゃったのかもしれないわ」

セシルはそう考えて、無理やり自分を納得させようとしたのだが、そんな思いは女官長の言葉によって挫かれる。

「畏れながら、後宮には『セシル』という名前のご側室はセシル様以外いらっしやいません。似たようなお名前の方がいらっしやいませんか？」

その言葉にセシルは顔を顰めた。

「・・・でも、陛下に贈り物を賜るなんて、全く心当たりがないわ」
自分のことなど、忘れていたのだろうと思ったばかりだったのだ。
いきなり贈り物など贈られてセシルは本気で訳が分からなかった。

「とにかく。これはセシル様への贈り物で間違いはないはずです。」

陛下のお言葉もございましたので、其れを身につけて今宵の夜会にご参加くださいませ」

困惑しきりのセシルのことを女官長は不憫に思っては居たのだが、はつきりとそう告げた。女官長にもエドアルドの真意が分からないのだ。そう告げるしかなかった。

「畏まりました。女官長様」

「ニコラ?!」

何も言えずに居たセシルの変わりにニコラが返事をした。セシルは思わず、その肩を掴んだ。

「セシル様。セシル様にお心当たりが御有りにならなくても、陛下にはセシル様に贈り物をする理由が御有りになるのかもしれない」

ニコラはセシルの手を自分の肩からゆっくりと外させると諭すような口調で言った。

「それに、戴いた物を身につけずに夜会に出るのは不敬と見なされます」

ニコラの言葉にセシルはハッと息を呑んだ。

不敬にあたる・・・。

確かにそうだろうとセシルは思った。

「・・・分かったわ」

セシル自身の口から受け入れる意思の言葉が出たことで、女官長はその場を去ることにした。

「それでは、私も戻ることに致します。」

女官長が部屋から出て行った後、セシルはやはり、考え込んでいた。

何がどうなってるの？

答える者など居ない問いが頭の中を回っている。

「セシル様。とりあえず、この箱を開けてみましょうか？」

ニコラは大きな目の箱に手を掛けながら問いかける。

「・・・そうね」

セシルは箱に中身に興味が全然なかったが、開けないことには始まらない。

箱の開封に取り掛かったニコラを横目に見ながら、今朝、奮い立た小さな

勇気が急速に凋んでしまいそうで、セシルは軽く首を振った。

第5話

「・・・まあ」

ニコラは箱から取り出したドレスに感嘆の声を上げた。そんなニコラの声にセシルもドレスに目を向ける。

普段、セシルが身につけているドレスよりも幾分豪華な、それでも他の側室が身につけているドレスよりも幾分質素な其れがニコラの手を抱えらていた。

「こちらは靴、これは首飾り、こっちは耳飾り、これは扇で、こっちは髪飾り・・・」

中身を確認しながらニコラは次々に箱を開封していく。目の前に広げられていく豪華な装飾品にセシルはなんだか恐ろしくなった。

「・・・本当に戴いてもいいのかしら？」

茫然とつぶやくセシルにニコラは片眉を上げた。

「まだそんなことをおっしゃって・・・」

「でも・・・」

「セシル様」

咎めるように名を呼ばれてセシルは口を嚙む。俯き、下唇を噛むセシルにニコラは溜息混じりに話しかけた。

「物は考えようですね。夜会に着て行くドレスが手に入ったのですから、良かったで
ではないですか？」

ニコラの言葉にセシルは頭を上げ、小さく首を傾げる。

「セシル様、奥様が無理やり持たせたあの豪華絢爛な派手なドレスに袖を通す気が
御有りでした？」

ハツとして、セシルは部屋の片隅の衣装箱に目をやる。それは此処に来てから一度も開けたことない衣装箱。セシルの母が夜会用にと無理やり持たせた物だった。

夜会用に、と前置きされるだけあってそのドレスはどれも派手な物だった。
質素な装いを好むセシルの好みなど全く無視した母好みのドレスはセシルに似合うかどうかすら考慮されずに仕立てられた言わば母の自己満足の賜物だった。

「・・・あれを着た自分なんて想像すら出来ないわ」
セシルはうんざりしたように呟いた。

「そうでございましょうね。では、セシル様。一体何を着て夜会に御出になるつもり

でらっしゃいました？」

言われてセシルは考え込む。普段着ているものは地味すぎて夜会には不向きだ。自分
持っている一番派手な服ですら夜会となれば地味な気もする。

・・・そうか、そういえば・・・

「着て行くものが無かったわ・・・」

今、気付いたのかとニコラは内心呆れた。しかし、そんなところがセシルらしいとも
思った。ドレスの件は手持ちの一番派手な物を着せ髪型や化粧で誤
魔化すつもりであ
ったのだがその必要はなくなった。

この幼い主は貴族という暮らしの中にあっても汚れず、無垢なまま
成長を
続けている。

着飾ることに興味が無く、宝石にも興味が無く、人を疑うことを知
らず・・・。

人を疑うことを知らぬはこの後宮では危険であることをニコラは気
付いている。
だからこそ、ニコラは誓ったのだ。

セシル様をこの後宮から救い出す。

「そうです。着て行くものがなかったのですから、丁度良かったとお思いになれば
よろしいのです」

語気を強めてそう言われてセシルは思った。

本当にそれでいいのだろうか？

思案顔で黙り込むセシルにニコラは再び溜息をつく。頭の中は別のことを考えながら、広げられたドレスや装飾品を片づけ始めた。

どうせなら、王妃として此处から出ていただきたい。

そのためにセシルにはエドアルドの目に留まって欲しいと願った。ニコラの胸にはそんな野心があった。主人が一欠けらの野心も持っていないのだ。
自分が動くしかないではないか。ニコラはそう思っていた。

「ニコラ？」

怒ったような顔で片づけをしているニコラにセシルは戸惑い混じり

に声をかけた。

聞こえなかったのか返事は返ってこない。

「ニコラ？」

もう一度、今度は少し大きな声で呼ぶ。すると、片づけの終わったニコラが漸く

顔を上げた。その表情は相も変わらず、どこか怒っているようでセシル少しだけ口を開くのを躊躇った。

「・・・お前のいうように、丁度良かったとは思えないのだけど・・・」

ニコラの表情は変わらない。いや、少々眉間の皺が深くなった気がする。

「戴いた物を返す訳にもいかないし、袖を通さない訳にもいかないことは

分かっているつもりよ？」

そこまで聞いて、ニコラの表情が幾分和らいだ。

「それならば結構でございます。セシル様、私は昼食を取りに行つて参ります。」

エドアルドからの贈り物を全面的では無いにしろ、セシルが受け入れる気になって

くれただけでニコラは満足だった。一礼し、退室していくニコラの背中を見つめて

セシルは苦笑いを浮かべていた。

親と変わらない年齢のニコラ。彼女は侍女というより、乳母のような役割を担って

いたように思う。セシルの乳母は本当に形ばかりの乳母でセシルが成長すると養育

を半ば放棄していた。セシルに礼儀作法を教えたのも、勉強を教えたのも、全て

乳母ではなく、ニコラだった。

だからだろうか？どうもセシルはニコラには頭が上がりなかった。

「まるで、ニコラが私の母のようだわ」

呟いてくすつと笑ったセシルだが自身の母を思い出し、すぐその瞳が暗く曇った。

第6話

「セシル様。これからどうなさいますか？」

遅めの昼食を済ませたあと、ニコラが問いかける。

「そうねえ・・・」

ドレスを着替えるにはまだ少し早い時間だった。セシルはどうしようかと窓の外を見つめた。

「庭園に散策にでも行かれますか？」

ニコラは取り敢えず思いついたことを提案した。

「それもいいかもしれないわね」

セシルは花が好きだった。薔薇や百合など豪華な花もちろん好きだが、それよりも野に咲く草花を好んだ。

此処の庭園は手入れがしっかり行き届いているのだが、庭師の好みだろうか？

小さな、ともすれば雑草だと抜かれてしまいそうな草花もひっそりと咲いていた。

セシルはそんな花をそつと愛でるのが好きだった。

「では、参りましょうか」

ニコラはにっこりとほほ笑んでセシルを庭園へと誘った。その道中、刺すような視線を感じ、セシルは小首を傾げる。今までそんな視線を受けたことなどなかったからだ。

不審に思い、周りを見渡すが誰も居なかった。セシルは気のせいかと思い直し、庭園へと歩を進めた。

来なければよかった……

庭園に一歩足を踏み入れた時からセシルは此処へ来たことを後悔していた。

普段はセシルのことなど気にも留めていなかった他の側室たちがソコソコと何やら話しながらセシルのことをちらちらと見ている。

急にどうしたというのかしら？

訳が分からないとばかりに首を振るセシルに一人の側室が近づいてきた。

「ごきげんよう。セシルさん」

「う、ごきげんよう」

まさか声を掛けてくると思っていたセシルはどもりながら挨拶を

返す。その様が側室たちの失笑を買った。くすくすと笑われ、セシルは

顔が熱くなっていくのを感じた。

「・・・先程、随分とたくさんの箱が運びこまれたようですが」

「・・・はあ」

「まさか、陛下から贈り物だなんてことございませんでしょうか？」

扇で口元を隠しながら、そう聞いてくる側室にセシルは何も言えずにいた。

その態度に側室が声を荒げる。

「どうなんですの?!」

その剣幕に押されて、セシルがビクリと肩を震わす。何か言わなければと

思えば思っほど、口は動いてはくれなかった。

「その、まさかですか？」

何言えないセシルの変わりにニコラが答える。その途端、側室の顔が醜く歪む。

「！・・・へえ。で？何を戴いたの？」

「ドレスと装飾品を」

それを聞いて、側室は合点がいったように大げさに扇を振りながら笑いだした。

「ああ。やつぱりねえ。あはははは」

その様子にセシルの目は驚きに見開かれ、ニコラの眉間に深い皺が刻まれた。

「セシルさん、今宵の夜会に出られるんでしょう？」

「・・・はい」

なんとか返事をしたセシルをまるで汚いものでも見るかのような視線で上から下まで見つめると側室はこう告げた。

「あなたがあまりに地味でらっしゃるから、陛下は着て行くドレスがない

んじゃないかと心配してくださったんだわ」

セシルはその言葉をドレスの裾を力いっぱい握りしめることで耐えていた。

そんなセシルに彼女は尚も言葉を紡ぐ。

「それに、みすばらしい格好で来られては迷惑だとお思いになったのでは

ないかしら？」

彼女に言葉に周りに居た、他の側室たちから一斉に笑いが漏れる。

「陛下はお優しくてらっしゃるから。あなたにもお慈悲をくださっただけよ？」

勘違いな事らないことね！」

それだけ言つと彼女は庭園を後にした。それを合図にしたかのように他の

側室も次々と庭園を後にする。

「申し訳ございません。セシル様」

他に誰も居なくなつた庭園でニコラが深々と頭を下げる。

「どうして謝るの？」

セシルは不思議そうに問いかける。

「私が庭園を御勧めしなければ、あのような・・・」

「いいのよ。遅かれ早かれ、こういうことは覚悟してたわ」

エドアルドからの贈り物を受け取った時点でセシルはある程度こういう

事態を覚悟していた。だが、しかし・・・

「好きでしている格好だけど、面と向かってああいう視線で見られるのは久しぶりだとしんどいものね・・・」

好きでしている地味な格好。それは他の人からどう見えるか。

セシルは分かっているつもりだし、それを気にしたことなどない。

否、気にしないようにしていた。

此処へ来てからあの視線を受けることが無くなったから耐性が薄れていたようだ。そのことがセシルはなんだか悔しかった。

「セシル様・・・」

心配そうに名を呼ぶニコラにセシルはそつとほほ笑んでみせた。

「大丈夫よ。慣れてるから。私たちも戻りましょ？そろそろ準備しなきゃ」

今だに心配そうなニコラに手を引き、セシルは歩きだした。そんなセシルに

手を引かれながらニコラは片手で目元を覆った。

どうしてこうなのだ？どうして泣くことをしないのだ？

いつもこうだ。セシルはこういう時泣かないのだ。辛いはずなのに微笑んでみせるのだ。

いつそ泣いてくれればいいものを・・・

泣いてくれれば慰めることができる。抱きしめてやることもできる。

そんな風に微笑まれたら何も出来ない。

「どうしたの？ニコラ」

「なんでもありません」

ニコラは流れかけた涙を誤魔化しながらセシルの後をついて歩いた。

第7話

「まあ！セシル様！よくお似合いですわ！」

エドアルドから贈られたドレスと装飾品を身に付けたセシルにニコラは

感嘆の声を上げた。

「え？そうかしら？」

いつも身につけることない色と見ためのドレスにセシルは落ち着かなかった。

姿見に映る自分の姿はどう見ても『服に着られている』ように見えるのだが

「ええ、ええ。よくお似合いですとも」

セシルはニコラの言葉など聞いていないかのように姿見の自分の姿を角度を変えながらまじまじと見ていた。そんなセシルを見つめ、ニコラは
確信していた。

これは間違いなくセシルに贈られたものである、と。

薄桃色を基調としたドレスは肌の白いセシルにはよく似合っていた。真珠をあしらった髪飾りはセシルの漆黒の髪によく映えた。

それに胸元に輝くルビーと真珠の首飾り……。

大きな石ではないがその紅い輝きはセシルの碧い瞳と双極を成し、セシルの美しさをさらに引き立てている。

一度しか逢っていないのに陛下はよくこれだけセシル様に似合うものを

揃えられたものだ……。

ニコラは感心していた。

「ねえ？本当に可笑しくない？似合ってる？」

不安げなセシルの頭をニコラはそつと撫でた。侍女が主人の頭を撫でる

など普通では考えられないが、親子ほど歳が離れ、親子のように接して

きた二人にはそれは自然な触れ合いであった。

「私はセシル様には嘘は申しません。本当によくお似合いですよ」

「……うん。ありがとう」

セシルはまだ自信が持てなかったがこれ以上言うのをやめた。

ニコラはセシルの表情からそれを感じ取ったが何も言わなかった。

本当に、どうしてこうも謙虚なのだろう？

セシルはもっと自分に自信を持つべきだとニコラは常々思っている。華美な服装は自分には似合わないと言われないが、実際にはよく似合うのだ。

確かに、セシルの母親が好む派手すぎる物は似合わないが、今回のよう

な明るめの配色の可愛らしい感じの服はよく似合う。

これからはこういう感じのドレスを着せよう。

ニコラは密かに決意していた。

「さてと、セシル様。少々お待ちいただけますか？私も着替えて参りますので」

ニコラの言葉にセシルの顔はパツと明るくなる。

「ニコラ、付いてきてくれるの？」

「当たり前です。侍女は一人だけ同席出来るのですよ？それに、セシル様をお一人にはできません」

先程の庭園での一件もあるのだ。一人になどできるものか。ニコラはセシルに気づかれぬようそつと溜息をついた。

本当にこの主人はこういうことに疎い……。

だからこそ、ニコラは誓う。

守る……と。

第8話

「・・・すごいわね・・・」

夜会の会場に足を踏み入れた瞬間、あまりの人の多さにセシルは思わず息を呑んだ。そんなセシルにニコラは苦笑いを浮かべながら問いかける。

「セシル様、大丈夫でございますか？」

「・・・大丈夫。でもニコラ、こんなに人が居てはお父様を見つけられ
るかしら？」

「御心配には及びません」

「え？」

思いがけない方向から聞いたことのない声が聞こえてセシルは振り返る。

そこには見たことのない栗色の髪に鳶色の瞳の男性が立っていた。

「初めまして、セシル様。私、宰相エルンストと申します」

名乗りながらエルンストは一礼した。

「え？あ、初めまして」

遅れてセシルも頭を下げる。その様子にエルンストは驚いた。

私に頭を下げるとは・・・

本来ならエルンストはエドアルドの後ろで壇上に控えていなければならぬ。でも、どうしてもエドアルドがドレスを贈った女性への興味を押さえられず、エドアルドの許可を得てこうして足を運んだ。

エルンストはセシルの顔は知らなかったがエドアルドが贈ったドレスは目にしていた。其れを目印にセシルを探し、見つけた。

本当は声をかけるつもりはなかった。もう少しだけ側でその姿を見たら壇上に引き返すつもりだった。

そんな彼の耳に届いた可愛らしい疑問。

思わず声を掛けていた。不安げなその声を聞いて放っておけない衝動に駆られた。

そして、自分に向け下げられた頭に驚愕した。

側室であるセシルは自分よりも身分が上なのだ。そんな彼女が自分に向けて頭を下げている。

「セシル様、私に頭を下げる必要はありません」

エルンストは慌ててそう声をかけた。そんなエルンストをセシルが不思議そうに見つめている。

「何故ですか？礼を礼で返すのは当然でございましょう？」

当然と言つてのけるのか、この状況で

エルンストはますますこの少女に興味を持った。

「エルンスト様。先程のお言葉ですが」

ことの成り行きを見守っていたニコラがエルンストに声をかける。
その声にエルンストは気を取り直して口を開いた。

「え？・・・ああ、面会は別室で行っていただくのです。お父上がいらっしゃたらそちらにご案内することになっています」

「まあ、そうでしたの？」

「はい。お父上が到着なさったら使いの者がセシル様を迎えに参ります。暫し、お待ちください」

「はい。有難うございます」

につこりとほほ笑むセシルにエルンストは思わず見とれた。

その時・・・

「セシル！」

自分と呼ぶ声にセシルが振り返るとそこにはあり得ない光景が見えた。

笑顔で足早にこちらに向かっているのは国王 エドアルドではないか？

まさか、あり得ないとセシルが驚いている間にエドアルドはセシルの目の前まで迫っていた。ニコラも表情にこそ出さなかったが大変驚いていた。もちろん、エルンストも・・・。

「ああ、余が贈ったドレスはよく似合っているな。なるべく華美にならぬよう、気をつけて仕立てさせたのだが・・・。どうだ？ 気に入ったか？」

驚きのあまり息をするのも忘れそうなセシルにお構いなしにエドアルドが問いかける。

「セシル？」

返答がないことにエドアルドが不思議そうな顔をした。

一番最初に気を取り直したにはニコラだ。ニコラはセシルの背中をポンと叩いた。

それを合図に呼吸を取り戻したセシルが慌ててエドアルドに頭を下げた。

「は、はい。有難うございました」

「そうか、気に入ったのならよかった」

エドアルドが満足そうに頷いた。

「陛下・・・」

「何だ？エルンスト」

やっと落ち着いたエルンストが咎めるようにエドアルドに問いかける。

「壇上を降りるとはどういう見ですか？」

「黙れ。余は余の贈ったドレスを着たセシルを近くで見たかっただけだ」

悪びれもせずそういうエドアルドにエルンストは頭が痛くなった。

これがどういう事態を引き起こすか全く考えていないのか？この方は！

国王がわざわざ壇上を降りて、側室に声をかけるなどそれはこの側室が

自分の寵室であると公言しているようなものではないか。

わずか数分に交わりでもエルンストには理解出来た。

セシルは後宮で生きて行くには純粹すぎる、と。

巻き込むつもりなのか？あのだす黒い女たちの争いの中に・・・。

ふと、エドアルドに視線を戻せばセシルを愛おしげに見つめる姿があった。

守り切る覚悟が御有りなのか？

エルンストが溜息をついた時だった。

「・・・セシル?!」

驚愕に彩られた声音に一同が振り返るとそこには戸惑った表情のセシルの父、アロイスがいた。

会場の入口付近で話していたせいだろう。別室に案内される前に彼はセシルを

見つけたようだった。そして、側にいる人物に大いに驚愕したのだ。

陛下と宰相?! 何故、セシルがお二人に囲まれているのだ?!

考えるより先に声が出た。声をかけてからしまったと思った。

自分の掛けた声に時が止まったかのように全員が自分を凝視したのだから・・・。

「お父様・・・」

セシルの声にエドアルドが素早く反応する。

「ああ、ブルックナー伯爵。息災であつたか？」

「へ？ああ、はい。陛下、ご機嫌麗しゅうございます」

アロイスは何が何だが分からなかったが取り敢えず頭を下げた。

「あの、陛下」

「何だ？」

「この状況は一体？」

アロイスは居てもたつても居られず、質問を投げた。本来なら質問などできる立場では無いがアロイスは頭が混乱してそのことを忘れていた。

「ああ。このドレスは余が贈ったのだ。どうだ？似合っているだろう？」

「え？はい。大変よく似合っております」

質問の答えにはなっていない気がするがアロイスは同意した。

「近くで見たくて声をかけたのだ」

「はあ。そうでございましたか」

質問の答えはもらえた。だが、別の疑問がさらに生まれた。

今、陛下は『余がドレスを贈った』と言わなかったか？

セシルの手紙とニコラの定期報告から察するにセシルはエドアルドに寵愛を受けている風には決して見えなかったのだが……。

アロイスはセシルに視線を走らせる。その視線を受けてセシルがしたことは曖昧に微笑むことだけだった。

「そういえばセシルは伯爵との面会を希望していたな？」

思い出したようにエドアルドがセシルに問う。

「は、はい！」

いきなり声を掛けられてセシルは思わず大きな声で返事をした。そんなセシルを愛おしそうに見つめるとエドアルドがそっとセシルの髪を撫でた。

その場に居た全員に戦慄が走る……。

そんなことはお構いなしにエドアルドは言葉をつづけた。

「逢うのは久しぶりであろう？ ゆっくり過ごせ」

「……はい」

セシルは何とか返事をしてさこちなく微笑んで見せた。その微笑みをどう受け止めたのか分からないがエドアルドは満足そうに頷いた。

「ではな、セシル。また後でな」

そう言い残して去っていく背中に頭を下げながらセシルは何だか引つかかるものを感じた。

また、後で？

困惑顔のセシルを横目にエルンストが口を開く。

「セシル様、ブルックナー伯爵」

二人は同時に振り返る。よく似た顔が同じように困惑している様は何だか面白かったがエルンストは笑う気も起らなかった。

「面会のために別室を用意してございます。そちらにご案内いたします」

エルンストは自分で二人を案内する気など始めはなかったのだがこのまま此処に二人を置いておく訳に行かない、と案内することを決めた。

このまま此処に居ては危険だ。

先程のやり取りは招待客に丸見えだったはずだ。此処には他の側室やその家族、他国の姫も大勢いる。

思慮深いはずの国王のまさかの暴走にエルンストは先程感じた

頭痛がひどくなっていくのを感じた。そして・・・

浮かれていたな・・・あの方は・・・

そう思って大きな溜息をついたのだ。

第9話

「一体どういうことだ？」

別室に案内されてからアロイスは開口一番そう呟いた。

そんな父の呟きを耳にしてセシルは申し訳なさそうに答える。

「ごめんなさい、お父様。私にもよくわからないの」

「分からない？」

アロイスは椅子に腰かけながら問いかける。セシルはアロイスの向かいに腰かけながら話し始めた。

「陛下が私の元を訪ねて来たのは最初の一度だけなのは間違いないの」

其れではなぜ？喉元まで出かかった言葉を呑みこみ、アロイスは娘の言葉を待った。

「今になって、急に陛下から贈り物を賜ったの。それだけでも驚いていた

のに・・・まさか、声をかけていらっしやるなんて・・・」

セシルの顔に浮かぶ困惑がその言葉を真実であると裏付けている。これ以上、セシルの口から引き出せることはないだろう。アロイスは何度めか分からない溜息をついた。

「・・・まあ、いい。何か進展があつたらまた連絡しなさい」

「・・・はい」

俯き、肩を落として返事をするセシルにアロイスは無理やり笑みを向けた。

「セシル。元気だったか？」

セシルもぎこちない笑顔を返す。

「ええ。お父様は？元気でらした？」

「ああ。もちろんだ」

「・・・お父様、お母様は？」

「・・・知らせが来た時、アレは丁度茶会に出かけて留守だった。そのまま、知らせずに私だけで来た」

セシルに妻を逢わせたくない一心でアロイスは夫婦同伴が常の夜会に単身で訪れた。周りから奇異の視線を受けようとアロイスは構わなかった。

アロイスの言葉に今頃、母は怒り狂っているだろうとセシルは思った。

同時にアロイスが自分のために母を置いてきたのだ悟り、居た堪れなかった。

二人はそれから近況やらなにやらぼつぼつと話し始めた。最初は何

だか
久しぶりすぎて途切れがちな会話だったが、だんだんと話が弾み始めた。

「・・・セシル」

一頻り話した後、アロイスはセシルの名を呼ぶ。その響きはどこかいつも
と違うような気がして、セシルは小首を傾げた。

「・・・お父様？」

呼びかけたというのにアロイスは中々口を開こうとしない。

何か言いにくいことなのかしら？

セシルはそう考えながらアロイスの言葉を待った。

「・・・すまなかったな」

漸く紡がれた言葉は謝罪だった。セシルは何に対する謝罪なのか分からず
ただ、アロイスを見つめた。

「一年前、あの二人を止めることが出来なかったのは私の罪だ」

一年前、王宮からセシルに側室として後宮に上がることの打診があった時。

アロイスはその申し出を断るつもりでいた。数合わせのようなもので家柄が申し分ないセシルが候補の一人に上がっただけで、決定ではなく、拒否権はあると説明されていたからだ。

だが、セシルの母と兄は違った。

アロイスの妻でセシルの母親でもあるエディタは典型的な貴族だった。

アロイスとエディタは政略結婚だったが、エディタは二人の間に子供が

男と女とうまい具合に二人生まれると役目は終わったとばかりにアロイス

と寢所を別にしてしまった。

着飾ることが趣味で金銀宝石に目が無く、夜会、舞踏会、昼間の茶会と

忙しく出向いて噂話や人の悪口に華を咲かせ、一夜の恋まで楽しむような

そんな女性だった。

セシルの兄、ディルクもそうした母の性格を色濃く受け継いだ人物だった。

父であるアロイスが受け継いだ爵位とわずかな領地を守ることに重きを置き、

これ以上の繁栄を望んでいないことを馬鹿にして、自分が後を継いだらこの

家をもっと大きくして見せると息巻いた。

そんな二人にとって、セシルの後宮入りは願ってもないことだった。

エディタはセシルを地味でつまらないと毛嫌いし、派手で野心家のディルクを

溺愛していた。ディルクの方も野心を持たない父を嫌い、大人しいセシルを馬

鹿にして、エディタだけを尊敬し、愛していた。

そう、二人にとってセシルは邪魔でしかなかったのだ・・・。

セシルが後宮に入るということは厄介払いが出来るという想いが強かったのは

もちろんだが、別の思惑もあった。

万が一、セシルが国王に寵愛を受け、王妃にでもなれば王妃の実家として、

今よりもっと豊かな暮らしが手に入るかもしれない。

寵愛を受けないとしても、側室が身内にいるだけで箔が付くのだ。二人が

これを見逃すわけはなかった。

「地味なお前が漸く役に立つのよ！さっさと行きなさい！」

「この俺の言うことが聞けないか？！とつと役に立て！この愚図が！」

後宮行きを渋るセシルに対し容赦ない言葉を浴びせ、結局押し切ってしまった。

一年前のことを思い出すと、セシルの瞳に涙が浮かんた。

「セシル・・・」

娘の涙にアロイスは想いを吐露したことを後悔した。

思い出させてしまった。あの辛い日々のことを・・・

自分が楽になりたくて、セシルに許してもらいたくて、アロイスは謝罪の言葉

を口にしてしまった。それがセシルにとってつらい思い出を思い出すきっかけ

になるなんて考えられずに、ただ、自分のために告げてしまった。

「・・・謝る必要なんてないわ。お父様」

セシルが涙を拭きながら告げる。アロイスはじつとセシルを見つめた。

「確かに、私は後宮に来たくて来たわけじゃないけど・・・」
セシルはグッとドレスを握りしめる。

「・・・お母様とお兄様から離れられたのはよかったと思ってるの」

アロイスは目を見開き、その後、目元を両手で覆って俯いた。

ああ！なんてことだ！

この優しく、人を敬い、誰にでも分け隔てない態度で接することが出来る

この子がこんなことを言うなんて！

アロイスはセシルの心の傷の深さに今更気づき、あふれ出る涙を誤魔化そうと

娘の前で俯き続けた。

第10話

「何を考えておいでなのですか？」

壇上に戻ったエドアルドに遅れて壇上に戻ったエルンストが問いかける。エドアルドは不機嫌そうに玉座に座ったまま、何も応えない。

「浮かれるのは構いせんが、場所を弁えて戴きたいものですな」

尚もエルンストは小言を続けるがエドアルドは何も言わない。

「陛下！」

「黙れ」

やっと返答が返ってきたと思えばそれが

エルンストはもう何も言わないことにした。

エドアルドが不機嫌なのは訳がある。そう、彼自身が自分の行動が如何に軽率であったか十分理解しているのだ。

エルンストとセシルが話しているのが壇上から見えた。

たった一度の逢瀬で自分を虜にした彼女にエルンストが興味を持つのではないかとエドアルドは危惧した。

現に、エルンストはセシルの笑顔に見とれているように見えた。

気が付いたらエドアルドは壇上を降りていた。

足早に近づき、セシルに声をかけた。

最初はエルンストを牽制するための行動。だが、セシルを目の前にしたとき、エドアルドの理性が揺らいだ・・・。

エドアルドが贈ったドレスに身を包んだセシルはエドアルドの想像より

遥かに愛らしかった。

エドアルドを見つめる戸惑いを帯びた視線も、緊張に震える声もすべてが

エドアルドは愛おしかった。

そして、その場がどういう場所であるかをエドアルドは失念した。

いや、夜会の会場であることを忘れた訳ではない。

そこに巢食ったたくさんの思惑と野心をエドアルドは忘れたのだ。

セシルと別れ、壇上に戻ったエドアルドは夜会の雰囲気ガラっと変わった

ことを不審に思った。

自分をちらちらと見ながらひそひそと話す招待客。信じられないものを見たかのうような側室の顔。

それらを目の当たりにし、エドアルドは先程自分がどれだけ愚かな行為に及んだのか気付いた。

これだけ招待客が居て、何人もの側室が参加しているのにも関わらず、セシル以外には目をくれず、セシルと話ただけで壇上に戻ってしまった。

しかも、すっかり髪まで撫でたんだ。俺は・・・

あれではセシルが自分の寵室だと公言したようなものだ。いや、寵室であることは間違いではないのだが、今はまだ公言出来る段階ではなかった。

このままではセシルに危険が及ぶ可能性を否定出来なかった。エドアルドは自分の愚かさに齒軋りしたい気分だった。

だが、落ち込んでいても仕方ない。エドアルドは迅速に頭を働かせた。

「エルンスト」

「・・・なんでございましょう?」

先程のやりとり^に些か不機嫌なのかその声には少し、棘があるように感じた。

エドアルドはそんなエルンストの態度を気にも留めずにこう告げた。

「後宮の警備を改めよ。警備隊長には、セシル・ブルックナーの安全を最優先

せよと申し付けよ」

「そうきましたか」

エルンストは少々呆れたように呟いた。

「それから、セシルに毒見を付けよ」

「え?」

「アレの性格から言^つて毒見をつけておらぬだろうし、侍女にも毒見をさせて

はいまい……。今まではそれで良かったかもしれぬが、これからはそうは

いかぬだろう……」

「そこまでなさいますか?」

エドアルドの言葉にエルンストは驚いた。だが、同時に言うことは尤もだとも

思った。セシルの性格からしてみれば、毒見を置いていないことは容易に想像できた。

確かにあの方は自分のために誰かが死ぬなど考えれそうもない。

「・・・分かりました。手配致します」

エルンストの返答にエドアルドは視線を前に向けたまま、微かに頷いた。

「それから、今宵はセシルの元へ行く」

エドアルドの言葉にエルンストは仰天した。

「この状況で?!」

そんなエルンストに対し、エドアルドは冷静そのものであった。

「ああ」

短く返事をするともうこれ以上話すことはないと言わんばかりに瞳を閉じた。

第11話

「また、呼んでくれ」

アロイスはそう言い残し、力なく微笑んで部屋を後にした。一人残された

部屋の中でセシルは自己嫌悪に陥っていた。

父を泣かせる気などなかった。ただ、謝られたからその必要は無いと告げ
たかったただけだ。

やっぱり、口にすべきでは無かったんだわ……。

セシルは己の身の内にある想いを誰にも話したことは無かった。それを
聞いた者が自分を憐れんで泣き、母や兄を悪く思うのは自分の本意では
ないからだ。

それでも、身の内にも食うそれはセシルを苛む。

時折、誰かに聞いてもらいたい衝動に駆られることがある。その衝動を

セシルはいつも無理やり封じ込めていた。

久しぶりにアロイスに逢い、懐かしさからその封印が緩んだ。

セシルの言葉にアロイスは大きく目を見開き、そして、泣いた。
涙を見せぬよう必死に俯いて誤魔化していたが、震える肩がセシルに
それを気付かせた。

其れを見たセシルは激しく後悔したのだ。

元々、セシルを母と兄から守ってやれない、守り切れていないと気に
病んでいた父。とうとう二人に押し切られ、自分を手放すことにまで
なってしまった父。

誰かに聞いてもらいたい衝動に駆られた。

だが、その誰かは父であってはならなかったのだ……。

普通のセシルならそんな間違いは犯さないだろう。というより、本音
を表に出すということをまずしない。今日は朝から思いがけない出
来事

が立て続けに起き、精神的に疲れていた。

疲れが判断力を鈍らせた。

よりによって一番聞かせてはならない人物に己の想いを曝け出して
しまった。

「……ごめんなさい、お父様」

セシルはあの場で言えなかった言葉を呟いた。

コンコン

扉をたたく音に深く、沈んでいたセシルの意識が現実に戻る。

「・・・はい」

返事を返すと、扉の向こうからニコラの声が聞こえた。

「セシル様、そろそろ御戻りになりませんと・・・」

どのくらいこうしていたのだろうか？ふと、時計に目をやれば側室が部屋に戻らなければならない刻限へと近づきつつあった。

「分かったわ。戻ります」

そう言つて、扉を開けたセシルはそこに居た人物に固まる。

そこにはニコラとその後ろに騎士が二人いた。

何故？騎士がいるの？

セシルの顔に浮かんだ疑問にニコラが応える。

「この方たちはセシル様を後宮まで警護してくださるそうです」

ニコラの言葉を受けて騎士の一人がセシルに声をかける。

「はい。責任を持って、セシル様を後宮にお送り致します」

「え？あ、ありがとうございます」

セシルはそう言って騎士に頭を下げた。その姿に騎士は大いに慌てた。

「セ、セシル様！どうか、頭をお上げください！」

慌てる騎士をセシルは不思議そうな顔をして見つめた。
そんなセシルの視線を受けながら騎士は思った。

不思議なのは貴女の方です……。

騎士である自分に頭を下げる側室など見たことがなかった。
側室たちはいつも、自分たちを見下したような態度ばかり
取っていた。

こんな方もいらっしゃるのか……

騎士は目の前のいるセシルが他の側室と明らかに違うと
感じた。

セシルの護衛はエルンストが取り急ぎ取った配慮だった。
先程の一件でセシルの危険は格段に増した。すぐに何か
起こるわけではないだろうが、用心するに越したことはない。

「それでは参りましょうか？」

ニコラが口を開く。セシルの態度に驚き、放心したようにセシルを
見つめていた騎士がその言葉に気を取り直し、背筋を伸ばした。

「では、セシル様。こちらへ」

セシルは騎士に両脇を挟まれ、ひどく恐縮しながら後宮へと戻った。

第12話

「・・・疲れたわ」

後宮の自室に戻ったセシルは誰に言うでもなく呟いた。

「今日は色々ありましたからね」

ニコラはセシルの湯浴みの準備をしながらそう言った。

「色々ありすぎたわよ」

セシルは言いながら溜息をついた。

ニコラに夜会に出るように言われた。

それが最初。

その後、いきなり陛下から贈り物を賜った。

それが元で他の側室に嫌みを言われた。

夜会に参加した後だってそうだ。

宰相から声を掛けられた。

陛下までも声を掛けてきた。

父に久しぶりに逢えたのは嬉しかった。

だが、泣かせてしまったのは悲しかった。

そして、自分に突然つけられた護衛。

思い出してみるとよく一日でこれだけのことがあったものだと思シ
ルは

驚いた。此処一年、何の変化もない暮らしをしてきたセシルにとって
今日という日はまさに『激動の一日』であったと言っていていいだろう。
だからこそ彼女は思わず漏らしたのだ。たった一言

疲れた、と

「セシル様、湯浴みの準備が出来ましたよ」

「ありがとう、ニコラ」

湯浴みでもしてさっぱりしようと思ったセシルはその言葉に素直に
従い、備え付けの簡素な浴室に足を運んだ。

浴槽に浸かりながらセシルはふと思う。

謎も多いのよね・・・

陛下に贈り物を賜る理由も分からない。

宰相が声を掛けてきた理由もわからない。

護衛が付けられた理由も分からない。

陛下は声を掛けた理由をドレスを着た自分を近くで見たかったと言っていたけど、それだけじゃないような気がする。

「・・・はあ」

セシルは本日何度目になるか分からない溜息をつき、考えるのをやめた。

考えたところで答えは見つからないし、これ以上考えていたらんだか熱が出そうだ。

コンコン

湯浴みを終え、夜着に着替えたセシルの元に扉を叩く音が届く。

「こんな時間にどなたでしょうか？」

不審がるニコラの横でセシルは思い出していた。

また後でな

あの時、エドアルドに告げられた言葉を・・・

それを思い出した時、扉の向こうに誰がいるのかセシルは確信したのだ。

「ニコラ、早く応対して」

セシルに急かされ、扉を開けたニコラの目前に国王 エドアルドの姿があった。

「こ、これは陛下。よ、ようこそお越しくださいました」

流石のニコラも国王の突然の訪問には驚いたようだ。ものの見事にどもっている。

「ああ。邪魔するぞ」

エドアルドはそう言うと、ほぼ一年ぶりにセシルの自室に足を踏み入れた。

第13話

「下がってよい」

エドアルドは部屋に入るとニコラにそう告げた。ニコラはちらりとセシルに視線を走らせたが、セシルが小さく頷いてみせたのでその言葉に従い、一礼して隣の侍女室へ戻った。

「さあ、セシル。今日は疲れたであろう？こちらへ来い」

エドアルドはセシルの肩をそつと抱いて、ベットへと誘う。セシルは緊張で胸が張り裂けそうだった。

ま、まさか・・・

期待と不安でカチンと固まったセシルにエドアルドはそつと囁いた。

「初めて逢った夜もお前はそんな感じだったな」

セシルは弾かれた様にエドアルドの顔を見上げる。

「・・・覚えておいでなのですか？」

その瞳をしっかりと見据え、エドアルドは応える。

「ああ、もちろんだ。忘れたことなどない」

一年前。

セシルは緊張のあまり、倒れそうな精神状態でエドアルドの訪問を待っていた。

男性と二人きりで過ごしたことなど今まで無いのだ。それがいきなり夜の寝所が舞台なのだから当然と言えば当然だった。

一方のエドアルドはセシルの部屋に向かいながら面倒だと思っていた。

また、あの面白くもない夜が始まるのだと憂鬱にすら感じていた。どの側室も皆同じだったからだ。エドアルドが来ると甘い声で甘えてエドアルドに抱かれることだけを考えているのが見え見えだった。会話を楽しむとか、ただ、同じ時を過ごすなどとは頭の片隅にもない。

エドアルドを自らの体の虜にしようとか、エドアルドの子を孕もうとか

そんな思惑しか見えない夜の後宮にエドアルドは嫌気がさしていた。

今回の女も同じだろう・・・

エドアルドはそう考えてさっさと済ませてしまおうと思っていた。

セシルの部屋にエドアルドが着くと今日と同じようにニコラが迎え入れた。そのニコラを下がらせ、エドアルドはベットに座り、セシルに手を差し出した。

「来い」

短く告げられた言葉にセシルの肩がビクツと震えた。その反応に微かな

違和感を感じたがエドアルドは気にしなかった。

一歩、一歩ゆつくりとベットに近づいてくるセシルにエドアルドは内心

苛立った。

さっさと来ればいいものを

セシルの方は羞恥心と不安と期待が入り混じった大変混乱した状態で本心を言えばベットに、いや、エドアルドに近づくのが怖かった。

だからこそ足が重くなりがちだったのだが、エドアルドはそんなセシル

の態度を演技だと思っていた。

貞淑な女を演じているのだと決めつけて、苛立っていたのだ。

ベットまであと一歩というところまでセシルが来た時、突然、手を引かれた。

焦れたエドアルドが強引にセシルの手を引き、引き寄せる。そしてそのままベットに押し倒して組み敷いた。

怖い！

突然の出来事にセシルの胸に浮かんだのは恐怖だけだった。声も出せずにただ、目の前のエドアルドの顔を見つめた。

その瞳に宿る怯えにエドアルドの動きが止まる。

生娘のまま後宮に上がってくる女はたまにいる。だが、そんな女は大抵、生娘であることを隠そうとせず『陛下が初めての相手だなんて光栄です』と心にもないことを言ってきた。

ここまで明白に怯えを隠そうとしなかった女は初めてだ……。

二人はそのまま暫し、見つめあった。

エドアルドがそっとセシルを解放する。セシルは体を起こし、自分に背を向けるようにベットに座っているエドアルドの背中を見つめた。

「……セシルと言ったか？そなた、男に抱かれるのは初めてか？」

聞かなくても先程の態度でそれは分かり切っていたがエドアルドは問いかけた。セシルがどう応えるか興味が湧いたのだ。

「……はい」

セシルは消え入りそうな声でそう答えただけだった。それ以外は何も言わないセシルにエドアルドはこう切り出した。

「……正直に申せ。……怖いかな？」

「・・・あの」

「構わぬ。申せ」

言い淀むセシルにエドアルドは返事を促す。セシルは小さく深呼吸すると口を開いた。

「・・・はい。・・・怖い・・・です」

「そうか」

エドアルドはそう返すともう何も言わなかった。そんなエドアルドの態度にセシルは大いに狼狽した。

恐怖に負け、失礼な態度を取ってしまっただろうか？御気を悪くしてしまったのだとしたらどうしたらいいのだろうか？

ぐるぐるといろんなことが頭を回ったがどうすればいいのか分からない。

セシルは泣きそうになったがグツと堪えた。

ここで泣いたら更なる不興を買う・・・。

それだけは避けたかった。自分が不興を買えば実家どうなるかわからない。

愛する家族が自分のせいで大変な目に合うのはいやだった。どんな仕打ち

を受けても結局セシルは家族を愛していたのだ。

「・・・セシル」

エドアルドが振り向き、セシルの名を呼ぶ。セシルは何を言われるのだろうかと思構えた。

「少し、話をせぬか？」

告げられた言葉は意外な言葉だった。セシルが小首を傾げるとエドアルドはセシルの髪をそつと撫でた。

「怖いと言うなら、無理強いはせぬ。だが、あまり早く此处を出る訳に

もいかぬのでな」

無理やり自分の物にしてしまうことは容易い。だが、エドアルドはそれを

しなかった。いや、出来なかったという方が正しいかもしれない。

セシルのような女性にエドアルドは初めて出会った。

自分に甘い声で甘えてくることもしない。自分に抱かれることを望まない。

怖いかと聞けば正直に怖いと言い、無理強いしなないと言えば明らかに安堵した。

真っ白なのだな・・・この娘は・・・

汚したくないと思った。汚してはいけないと思った。だが、もう少しだけ側に居たいと思った。

だから言った、「話をせぬか？」と、話してみたいと思った。もつと彼女を知りたかった。

「・・・あの」

「何だ？」

「・・・怒ってらっしゃらないのですか？」

怖ず怖ずと聞いてくるセシルの態度にエドアルドは胸の中に温かい何かが生まれるのを感じていた。

「怒ってなど居らぬ。そなたが良いと言えば今からでも抱くが？」

その気が無いわけではなく、セシルの意向を重視するとも取れる発言にセシルは真っ赤になって慌てた。

「え?! あ、えっと・・・その・・・」

そんなセシルの態度にエドアルドは嘖き出した。

「ふふふ、セシル、そんなに慌てるな。冗談だ」

「！・・・陛下は人が悪いです・・・」

笑われてセシルは少々むくれて俯いた。宥めるためにセシルの髪を撫でて

いたエドアルドは胸の内の温かい物の正体に気づき始めた。

ああ、自分はこの少女が愛おしいのだ・・・

それから二人はベットに横になり、他愛ない会話して過ごした。セシルが

話し疲れて眠ってしまうとエドアルドはその頬にそっと口づけて、

セシル

の部屋を後にした。

そう、二人は体を交えてはいないのだ。

「さて、セシル」

ベットに腰を下ろし、セシルを自分の膝の上に座らせるとエドアルドはセシル

の体をそっと抱きしめた。戸惑いからかなんの抵抗も示さないセシルがなんだが

面白いと思いながらエドアルドはこう言った。

「あの夜は話をしただけで終わったが今宵はどうする?」

「え?!・・・どうすると申されましても・・・」

あの日と同じように真っ赤になって慌てるセシルにエドアルドはクスツと笑った。

その声を耳にし、からかわれたと理解したセシルは不満げに唇を尖らせて俯いた。

第14話

「セシル、そう拗ねるな」

エドアルドはセシルの頬を人差し指でつつんと突きながらそう言った。

「・・・知りません」

セシルはそっぽを向いたまま、そう答える。まだ拗ねているらしい。エドアルドはセシルを抱きしめる腕に力を少しだけ力を込め、その頬に

自分の頬を擦り寄せた。

「無理強いはせぬと申したであろう？セシルの覚悟が出来るまで、ことを進めることはせぬ」

エドアルドは諭すような口調でそう告げた。その言葉受け、セシルは無理やり身をよじり、エドアルドから少しだけ距離を置いてその顔を見つめた。

「それは、何事においてもですか？」

セシルが言わんとしていることを何となく察したエドアルドはすうつと

セシルから視線を逸らす。

「あー・・・そのつもり・・・だが」

ちらりとセシルに視線を戻し、エドアルドは続けた。

「お前とこうして過ごす時間は・・・多く取りたいと・・・思う」

まるで悪戯がバレた子供のような表情でそういうエドアルドにセシルは思わず、笑みをこぼした。

「セシル？」

笑われるとは思っていなかったのだろう。エドアルドが不思議そうな顔をしている。

「分かりました。私も陛下のことがもつと知りたいですから」

「そうか！」

セシルの答えにエドアルドは破顔し、力いっぱいセシルを抱きしめた。

抱きしめられながらセシルはふと考える。父以外の男性に抱きしめられるなど初めての体験だった。比べる相手もないのだがちょっと妙だ。

ああ・・・そうか・・・

「・・・嫌じゃないんだわ・・・」

「ん？何か言ったか？」

「い、いえ、何も」

思わず漏れた小さな呟きはエドアルドの耳には届かなかった。エドアルドは

然して気にした様子もなく、セシルの髪を梳いている。エドアルドの胸に顔を埋めながらセシルは先程思い至ったことをもう一度考える。

どうして、嫌じゃないのかしら？

さらに考えを巡らそうとしていた時、そっとエドアルドから抱擁を解かれる。

「セシル」

エドアルドが真剣な眼差しでセシルを見つめている。

セシルの心臓がトクンと跳ねた。

「少しずついい。俺を知ってくれ。そして、すぐでなくていい。俺を愛してくれ」

エドアルドが『余』ではなく『俺』という言葉を使った。それは彼が国王

としての仮面を取り去ったことの意味表示に他ならない。

それに気付いたセシルは思う。

ああ、この方は一人の男として自分に愛されたいのだ、と

セシルは胸に何か込み上げてくる物を感じた。それが何かはまだ本人も

気付いていないのだけれど・・・。

「・・・はい」

セシルはそう返事をして、今度は自分からエドアルドの胸にそっと頬を

寄せたのだ。

真夜中。

セシルが目を覚ますとそこには端正な顔立ちがあった。

あのまま話しながら眠ってしまったんだわ・・・

セシルは目の前のエドアルドの顔を思わずまじまじと見つめた。

銀色の髪は月明かりに照らされ、錦糸のように美しかった。すうっと通った鼻立ちに形のよい唇。

まるで彫刻か何かのようだわ・・・

セシルは無意識にその顔へと手を伸ばした。もう少しで触れる・・・。

その瞬間、急に手首を掴まれた。

「きゃっ
」

何事かと思えばエドアルドがニヤリと笑ってセシルの手首を掴んでいる。

「お、起きてらして?!」

「お前があんまりじろじろ見るから目が覚めたんだ」

言っなりエドアルドはセシルを引き寄せ、腕の中に閉じ込めた。

「・・・陛下!」

セシルは身をよじって抵抗するがエドアルドは腕の力を緩めない。

「何もしないとは言ったがな、これくらいは許せよ。それから、二人きり

の時はエドアルドと呼んでくれ」

「そうは言われましても・・・」

「呼べよ。いいだろ？」

「陛下！！！」

エドアルドは口付けでセシルの口を塞いでしまった。

エドアルドからすれば控え目な口付け。けれども経験のないセシルにとってはそれは刺激的すぎる物であった。

「エドアルドだ。呼んでみる」

ぽーとなった頭のままセシルがエドアルドを見つめる。その瞳を見据え、そっとエドアルドが促す。その瞳に宿る熱にセシルは自分の体が熱くなっていくのを感じた。

「・・・エドアルド」

熱に浮かされるまま、セシルがその名を呼ぶ。エドアルドは嬉しそうに微笑むと

「良い子だ」

そう言って、もう一度セシルの唇にそっと口付けを落とした。

第15話

「陛下、御帰りですか？」

セシルが目を覚ますとエドアルドが服装を整えているところだった。セシルの声が聞こえたはずなのに、エドアルドは返事もせず、ブーツの紐を結ぶ作業に没頭している。返事が無いことにセシルは小首を傾げたがすぐに理由に思い至った。

・・・ひよつとして？

「・・・エ、エドアルド？」

「なんだ？」

やはり、『エドアルド』と呼ばないと返事をしない気だったようだ。セシルは自分よりも10歳年上のエドアルドの子供っぽい一面に触れて

ふふつと小さく笑った。

「・・・笑うなよ」

「ふふふ、申し訳ございません」

拗ねたようにそう言うエドアルドにセシルは微笑んだまま謝った。

「まあいい」

ブーツの紐を結び終えたエドアルドがベットから腰を上げる。セシルも
ベットから降り、エドアルドの傍らに立った。

「セシル」

エドアルドがセシルの方を見た。その瞳には何か決意のような物が宿って

いるように感じた。セシルはすつと表情を引き締めた。

「これからお前の周りは騒がしくなると思う」

エドアルドはそう切り出した。それは様々な点においてだろうとセシルは
思った。現に昨日、他の側室から早速、嫌みを言われたばかりだった。

「だが、お前のことは俺が必ず守る。信じてくれ」

真っ直ぐにセシルの瞳を見つめてエドアルドは誓いを立てた。

これから先、何があるか分からない。全て『未知の領域』であると言つてもいい。分からないこと自体がセシルにとって恐怖であった。それでも、自分を見つめる真摯な眼差しを信じたいと思った。

「・・・はい」

セシルはそう返事をする。と真っ赤になって俯いた。見つめられる経験など

ないのでどうしても照れてしまうのだ。そんなセシルの顎に手を掛け、

エドアルドがそつと上を向かせる。

「セシル、もう一度、俺の名を呼べ」

「・・・エ、エドアルド？」

「そうだ。そう呼べよ？忘れるなよ？」

エドアルドはセシルの頬にチュッと素早く口付けると

「また今夜な」

そう言つて踵を返した。扉に向かうエドアルドの背にセシルは慌てて声を掛ける。

「いつてらっしゃいませ！エ、エドアルド」

セシルの言葉にエドアルドが振り返る。その顔には驚きに色が見えてセシルは狼狽した。

変なこと言つたかしら？！

「いいな・・・それ・・・」

「え？」

エドアルドが何を言いたいのか分からずセシルは首を傾げる。

「明日の朝もそう言っ て送り出してくれ」

セシルの言葉がエドアルドは気に入ったらしい。セシルはほっと胸を撫でおろすと同時に何だか可笑しくなった。

「はい。分かりました」

セシルから了承を得て、エドアルドは満足そうに頷いて扉へと再び歩き

始めた。だか、扉を出る直前、思い出したように立ち止った。

どうしたのだろうかとセシルが思っているとエドアルドが振り返り、ニヤリと笑ってこう告げた。

「お前、どもらずに呼べるように練習しとけよ？」

先程から『エドアルド』とすんなり言えないセシルのことが気になつていた

らしい。セシルは苦笑いを浮かべながら頷いた。

その頷きを受けてエドアルドはセシルの部屋を後にした。

第16話

「さてと・・・」

エルンストは昨夜、エドアルドから申し付けられた事の手配を始めた。後宮の警備を改めるより、セシル付きの護衛騎士を新たに配属した方が早そうだ。セシルには侍女がニコラー人しかないようだったので新たに侍女をこちらで二人ほど用意しようと考えた。

「しかし、あの陛下がねえ・・・」

エルンストは昨夜のエドアルドの態度を思い出すとしみじみと呟いた。

幼き頃より王となるべく育てられ、その胸の内をエルンスト以外誰にも

悟らせることなく、完璧なまでに王の仮面を被って生きてきたエドアルド。

そんな彼の仮面が公衆の面前で剥がれた。しかも、一人の少女がその理由であることがエルンストはいまだに信じられない想いだった。

エルンストは元はエドアルドの教育係の一人だった。貴族に生まれながら

華やかな世界で生きることより、学者として、文官として生きるところを望

み、20歳の頃、王宮に仕官した。

年若くても、学ぶこと、努力することを惜しまぬその姿勢は他の文官の中で

も評判になった。その仕事ぶりも優秀で上官や同僚から一目置かれていた。

エルンストにエドアルドの教育係として白羽の矢が立ったのはその才を認められたからだった。

エルンストがエドアルドの教育係になったのはエドアルドが10歳の時であった。

その時エルンストは25歳。15歳しか歳が離れていない教育係は若すぎるとの批判もあったが、エルンストは己に与えられた仕事をきちんとすればそんな声はすぐにやむと気にしなかった。

初めてエドアルドに逢った時、エルンストはなんて冷めた瞳をした子供だと思った。王子として厳しく育てられたとしてもこの瞳は異常だと思った。

この瞳はだれも信用していない証ではないか？

エルンストの予感は的中した。エドアルドは自身の乳母もそば近くで仕える自分たち教育係のことも一切信用してはいなかった。

「殿下、何故そのように頑なに人を信用為さらないのですか？」

エルンストは堪らず、問いかける。すると、エドアルドはふっと笑

った。その仕草が
子供とは思えぬほど大人びていてエドアルドは眉を顰める。

「では聞くが。エルンスト、お前は俺に忠誠を誓っているか？」

「当たり前でございます」

「ふつ、口では何とでも言える」

「・・・殿下」

一体何がそこまでこの幼い主をそうさせるのか。エルンストは考えを巡らせた

が分からなかった。思い当たるが多すぎて一つに絞れないのだ。

王太子はエドアルド一人だが、王の子供はエドアルドだけではない。

子を持つ側室やその家族、支援者たちはエドアルドの存在が邪魔だった。

隙あらば彼の命を奪おうとする動きはエドアルドが生まれたころからあった。

特にエドアルドの兄であるゲオルクとその母ヘルガはエドアルドを憎んでさえ

いた。

エドアルドが生まれるまで、王の子供の中で男児はゲオルク一人だった。

このまま王妃に男児が生まれなければ後継ぎは彼であるはずだった。本人も周りもその気になっていた矢先、エドアルドが生まれたのだ。

エドアルドが生まれたことでゲオルクとヘルガは手のひらを返されたような扱いを受けるようになった。ゲオルクの王位継承権は1位から2位に格下げされ、後継ぎを産んだと持て囃されていたヘルガは後宮の隅に追いやられた。

エドアルドの命を狙うものは多い。だが、その中心人物はヘルガ親子である。

聡い子供だったエドアルドは自身を取り巻く状況に物心ついた頃から気付いていた。

自分の命を狙う者がいること。自分の周りにもその者の手の者が潜んでいること。そして、自分の命を狙っているのが他ならぬ自分の兄弟、姉妹であること……。

その状況で人を信用しろというのが無理な話だ。しかし、エドアルドは先程のエルンストの態度が少々気になった。

面と向かって自分に意見してくるものなど初めてだった。自分を心配しているようにも見えた。

妙な奴だ……

エドアルドはそう思って、机の上の紅茶に手を伸ばした。

「殿下！其れを呑んではいけません！」

言うなりエルンストはエドアルドからティーカップを取りあげると中に満たされ
ていた紅茶を一気に呑みほした。

「グツ・・・」

エルンストが胸を押さえて倒れ込む。襲い来る苦痛に耐えながらエルンストは
思った。

やはりな・・・、と

先程から部屋の隅に控えている女官の様子が気になっていた。前を見据えて、腹の
前で手を組み、本人は平然としているつもりだろうが、その視線がちらちらとエド
アルドを窺っていた。エドアルドが紅茶に手を伸ばした瞬間、その手にグツと力が
込められたのをエルンストは見逃さなかった。

確証はなかった。だが、迷っている暇はなかった。エルンストはエドアルドに駆け寄
り、その紅茶を奪って呑みほしたのだ。

「エルンスト！どうした？！」

エドアルドが膝を折り、倒れ込むエルンストに声を掛ける。

エルンストの視線が扉の方に向けられる、其れを追ってエドアルドが視線

を走らせると女官が大慌てで出て行く姿が見えた。

「あいつか？」

エルンストが微かに頷くのを見て、エドアルドが叫ぶ。

「あの女官を捕らえよ！それから医者だ！医者を呼べ！」

対処が早かったこととエルンスト自身が毒に対して耐性を身に着けていた

ことによりエルンストは一命を取り留めた。しばらく養生が必要だが後遺症
も残らないだろうと医者と言った。

エルンストが休んでいるとエドアルドが見舞に訪れた。

「これは殿下、わざわざこのような場所に足を運んでくださり有難うござ

います。・・・このような姿で申し訳ございません」

まだ、ベットから起き上がることが出来ないエルンストは寝そべったまま

頭だけを下げてそう言ってエドアルドを迎えた。

「・・・構わぬ」

エドアルドはそう答えるとベットの傍らの椅子に腰かけた。

「まさか、お前が命がけで俺を守るとは思わなかったぞ」

「はぁ・・・」

「というより、他人が俺のためにそこまでするとは思えたことがなかった」

その言葉にエルンストはやはりこの方は孤独であるのだと思った。

「それにしても、アレを手駒に使うとはな。これだから人は信用で
きん」

あの女官は毒見の一人でもあったのだ。毒を防ぐはずの当の本人が
毒を盛った

のだ。あの紅茶がエドアルドの手に渡ったのも頷ける。

「・・・殿下」

やはり、駄目なのだろうか？この幼く、孤独な主の信頼を勝ち取る
など出来ない

のだろうか？エルンストは落胆した。

「エルンスト、お前復帰した後は教育係ではなく、俺の側近をしろ」

「え？」

「従者の選定はお前に任す。お前が信頼できる者を揃えよ」

「殿下、それは・・・」

エルンストの言葉を遮ってエドアルドが問う。

「俺に忠誠を誓うのだろうか？」

エドアルドがニヤリと笑う。その顔は子供が何か思いついた時に浮かべる笑み

にも見えてエルンストは目を見開いた。

「も、もちろんでございます」

エルンストの返答にエドアルドは満足気に頷くと席を立った。

「ゆっくり休め。復帰後は忙しくなるぞ」

そう言い残し、エドアルドは去って行った。

エルンストがエドアルドの信頼を勝ち取った瞬間であった。

エルンストに心を許したエドアルドはエルンストにだけは子供らしく拗ねたり、不機嫌な態度を取ったりするようになった。それに伴い、エルンストはエドアルドを叱りつけるようになった。本来ならばそんなことは許されないであろうが、そうされるエドアルドはどこか嬉しそうでもあった。

言葉にも態度にも出さないが、エドアルドはエルンストを兄のように慕っていた。それを敏感に感じ取ってエルンストは周りから咎められない程度に兄のように接した。叱りつけるのもその一環である。

若くして王になったエドアルドには苦勞が多かった。それは33歳の若さで宰相になったエルンストも同じだった。

二人は支え合いながらこの10年。ひたすら走りぬけてきた。

その間も相変わらず、エドアルドは命を狙われていたし、そんな状況のなかでエドアルドが心からの信頼を寄せる人物がエルンストのほかに現れるはずもなく、結局、エドアルドの支えはエルンストしかないのが現状だった。

誰か、この方を支えてくれる者は現れないだろうか？

エルンストは常々そう思っていた。後宮には複数の側室がいるが、誰一人としてエドアルドの寵愛を受けることはなかった。それどころか、エドアルドは後宮に通うことをただの義務だと一線を引き、側室たちを遠ざけているようにも見えた。

幼いころから女たちの争いを目にしてきたエドアルドは女性に対し、夢や希望を抱くことが出来なかった。それはエルンストも気付いていた。

女などどれも同じだと思っていたのだろう。

そう、セシルが現れるまでは・・・

セシルが他の側室たちとは明らかに違うということは話してみてもエルンストにはすぐに分かった。

あの方ならもしかして陛下の支えになってくれるやもしれない。

エルンストは微かにそれを期待していた。

第17話

コンコン

エドアルドを送り出し、朝食を済ませ、今日は何をして過ごそうかとセシルが考えていた時、扉を叩く音が部屋に響いた。

「ニコラ、応対を」

促されたニコラが扉を開けるとそこには女官長が三人の騎士と二人の侍女を伴って立っていた。

「・・・どうぞ。お入りくださいませ」

一瞬、何事かと目を見開いたニコラは気を取り直して一行を迎え入れた。

「おはようございます。セシル様」

部屋に入った女官長はまず、セシルに挨拶をして一礼した。

「おはよう、女官長。・・・後ろの方々はどうしてこちらに？」

セシルは戸惑った表情で挨拶を返して問いかける。女官長はすうつと息を

吐くと、姿勢を正して口元に笑みを浮かべ答えた。

「こちらの騎士の方々は本日よりセシル様の護衛についてくださいます。

そして、こちらの侍女たちは本日よりニコラ殿と共にセシル様の身の回り

の御世話をさせていただきます」

セシルはいきなり宛がわれた騎士と侍女に困惑した。今までセシルの侍女は

ニコラ一人だけだった。もちろん、専属の護衛などついた経験も無い。

なんの変化もなく、ただ過ぎ去っていくばかりだったセシルの日常がゆっくり

と確実に変わろうとしている。セシルはそれを感じ、ただただ戸惑うばかりだ。

「護衛兵務めることになりました。コンラートと申します」

栗色の巻き毛の短髪の男性がまず名乗った。

「同じく、アルトゥルと申します」

次に金髪の長めの髪の男性が名乗り

「同じく、エアハルトと申します」

赤毛の短髪の男性が続いた。

騎士たちは次々に名を名乗るとセシルに向かい頭を下げた。皆、歳はエドアルドと同じか、少し若いように見えた。慌ててセシルも頭を下げ

ようとしたがコンラートの制される。

「セシル様、私共に頭を下げる必要はございません」

苦笑いを浮かべる栗色の巻き毛に垂れ目がちな翡翠色の瞳をした騎士にセシ

ルは見覚えがあった。

「貴方、昨夜の・・・」

「覚えておいででしたか」

コンラートは少しだけ顔を綻ばせた。コンラートは昨夜、セシルを警護して

くれた騎士の一人だった。

「これより先、我ら一命をとってセシル様を誠心誠意御守り申し上げます」

コンラートはそう宣言してセシルにもう一度深々と頭を下げた。アルトゥルと

エアハルトもそれに続いて頭を下げた。

「よ、よろしく願います」

セシルは礼を言うと同時に頭を下げた。

まったく、この方は・・・

先程、頭を下げる必要はないと進言したばかりなのに、早速自分達

に向けて

頭を下げているセシルにコンラートに再び浮かびそうになる苦笑いを噛み殺し、

他の二人は驚いたような顔をしてセシルを見ていた。

「セシル様」

女官長の後ろに控えていた侍女がセシルに声を掛ける。セシルがそちらに向き

直ると彼女たちはそれぞれ口を開いた。

「本日より、セシル様の御世話をさせていただくことになりました。イーナと

申します」

彼女は胡桃色の髪を一つに纏め上げ、歳はニコラより若いように見えた。

「同じく、モニカと申します」

モニカは鈍色の髪を肩くらいで揃えた髪型で歳はセシルより少し、年上に

見えた。

彼女たちも名乗ると同時にセシルに頭を下げた。

「よ、よろしく」

またしてもセシルは彼女たちに頭を下げた。イーナとモニカはそんなセシルを

やはり驚いたような顔で見るのだ。

何故、皆、驚くのかしら？

いつも皆同じ反応をするがセシルにはそれがどうしてなのか分からなかった。

皆、頭を下げる必要はないと口々にいうがセシルはそうは思わない。自分より身分が上だろうが下だろうが頭を下げられれば下げ返すのが当然だと

セシルは思っていた。

「それでは私は失礼致します」

皆が一通り挨拶を済ましたのを見届けると女官長は部屋を出ることにした。

去り際、セシルに目をやると不思議そうな顔で一同を見るセシルの姿があった。

それを横目に見ながら女官長は思った。

どういう育て方をすればここまで真つ直ぐに育つのだろう、と

地位を持った者はその地位に固執するものだ。そして、その地位を誇示する。

力なき者を虐げ、見下し、優越に浸る。すべての者がそうであるとは言わない。

だが、大抵がそうだ。

セシルは伯爵令嬢として生まれ、国王の側室なり、今や恐らく国王の寵室と

なった。セシルの地位は絶大な物になったと言っていていいだろう。だが、セシル

はその地位に驕ることなく、戸惑っているようにも見える。

このままでいてくださればいいけれど・・・

女官長は密かにそう願いながら、セシルの部屋を後にした。

女官長が去ったのを合図に皆が動き出す。

「それではセシル様、私は扉の前に控えております。」

最初に動いたのはコンラートだ。セシルは扉の外に向かう彼に問かける。

「コンラート、他の二人はどうするの？」

「ああ、セシル様の部屋の隣は空室でございましたでしょう？」

そういえばそうだとセシルは思い出した。セシルが後宮に来てから新たに

側室が迎えられていないこともあって、後宮には少々空室が存在していた。

セシルが住んでいる棟にもそれはあった。

「そこを詰め所として使用して構わないと許可を得ておりますので、そちらに控えていることになると思います。我々は交代で扉の前の警備に付きますので」

そういうとコンラートはアルトゥルとエアハルトを引き連れて部屋を出て行った。

「さてと、貴女方には何をしてもらいましょうか」

ニコラがイーナとモニカに声を掛ける。すると、モニカがそっとニコラに近寄って来た。

「ニコラさん、これからセシル様の食事は全て私が取りに参ります」
モニカのその言葉にニコラは彼女の真の役目を悟り、表情を引き締めた。

「・・・そうですか？では、お願い致します。・・・本当にお任せして

よろしいですね？」

ニコラの言葉の裏にある問いに気付いたモニカがしっかりと頷いて見せた。

「もちろんでございます。・・・私はそのための教育を受けております」

ニコラはモニカを見据え、小さく頷いて見せた。年若い彼女に課せられた役目にニコラの胸は微かに痛んだ。だが、それを表に出しはしなかった。

恐らく、モニカは自分の役目に誇りをもっているだろう。彼女を憐れむことは失礼だとニコラは思った。

モニカの真の役目とは『毒見』である。しかし、その役目をセシルに悟られるなど厳命を受けていた。だから、先程名乗った際にその役目を口にはしなかった。出会って数分だが、モニカは何故そんな厳命が出たのか何となくだが気付いた。

この方は誰かを犠牲にするなどできそうにない……

自分の役目が『毒見』だと知れば、励めと言わずにその任を降りろと言い出しそうだとモニカは思った。新たに自分の主となった少女は恐らくはそういう女性であろうと容易に想像できた。

だが、だからこそ自分の役目は絶対に必要だとも思った。

セシルのそういう優しい性格は彼女を狙う者からすれば隙以外にみえないだろう。

モニカはセシルに気付かれないように慎重に、それでいて精確に己の役目を全うしようと固く決意をした。

第18話

「ねえ、ニコラ。図書室に行こうと思うんだけど」

何をしようか考えていたセシルはニコラにこう切り出した。側室は基本、

後宮の外へは出られないが、王宮の中にある図書室には出向くことを許

されていた。読書が趣味のセシルはそこに通うのが好きだった。

流石は王宮の図書室だけあって規模は小さくても貴重な蔵書や珍しい本。

国内外の有名作家の著書に精密な図鑑なんかが揃っていてセシルはいつも

わくわくしながら足を運んでいた。

「よろしいんじゃないですか？では、参りましょうか」

ニコラが応えるとイーナとモニカが自分たちも付いていくと申し出た。

セシルはやりわりと断ったのだが聞き入れてはもらえなかった。

「セシル様、どちらかに御出掛けですか？」

扉の前で警護にあたっていたコンラートが声を掛ける。

「ええ。図書室に行こうと思うの」

「そうですか。では御供致します。アルトゥル、エアハルト」

コンラートはそう言って、詰め所の中に声を掛ける。セシルは侍女を三人従えて歩くことにさえなんだか大げさな気がしていたのに騎士まで従えて歩くことになるのは正直避けたかった。

「コンラート、ニコラ達が付いてきてくれるから平気よ」

その言葉にコンラートは困ったような顔をした。

「セシル様、我々から仕事を取りあげないでいただけませんか？」

詰め所から出てきたアルトゥルとエアハルトもコンラートの言葉に軽く頷く。セシルはこれ以上ごねるのは申し訳ないような気がして同行を許すことにした。

セシルの前をコンラートとエアハルトが歩き、セシルの両脇にイーナとモニカが付き、ニコラがセシルの後ろを歩いた。アルトゥルはセシルの部屋の前に残り警護を続けている。

「部屋を完全に無人にするわけには参りませんので」

そう言ってアルトゥルは一同を見送った。

後宮の廊下を歩いていると前から華やかな一団が現れた。中心にいる人物はセシルと同じエドアルドの側室の一人である、ダニエラ。

ダニエラ・ベルンシュタイン

歳は23歳。彼女は長く伸ばした金髪の巻き毛を見せつけるように

下ろして、その豊満な肉体を誇示するように胸のあいたドレスをいつも身につけている。萌黄色のぱっちりとした瞳、ぷつくりとした唇は赤い口紅に彩られ、何ともいえぬ色気を発していた。

彼女の父が王宮で大臣をしていること、彼女が側室達の中で古株であることが理由かは分らないが数人の側室が彼女を取り巻き、いつも誰かが側にいた。本日の面子には昨日、セシルに嫌みを言ったあの側室の顔もあった。

「これは……随分と偉くなつてものですわね。セシルさん」
ダニエラはセシルとの距離が縮まるやいなやそう切り出した。

「……ごきげんよう。ダニエラさん」

セシルはそう返したただけで他には何も言わなかった。その態度にダニエラが片眉を吊り上げる。

「一体どんな手を使って陛下を誑し込んだのかしら？ご教授願いたいわねえ。皆さんもそう思うでしょう？」

ダニエラの言葉に側室たちは大げさに笑って見せた。セシルの周りを固めているコンラート達は皆、一様に顔を顰めた。

「ダニエラ様、セシルさんは清純そうに見えて稀代の床上手でらっしゃるのかもしれませんが？」

昨日、庭園でセシルに嫌みを言ってきた側室がパツと思いついたように言う。その顔にはニヤニヤと厭らしい笑みを浮かべていた。

『床上手』という言葉にセシルは赤面する。そっちの方面には疎いセシルでもその言葉と意味くらいは知っていた。

体を交えたこともないのに……

セシルは声高にその事実を叫びたかったがグツと我慢した。口答えすることは事態を悪化させると考えたからだ。

こういう人を傷つけよう、馬鹿にしようとしている人間は言いたいだけ

言わせれば満足して去っていくことをセシルは身を持って知ってる。

相手が満足するまで耐えればいいと母や兄の仕打ちがセシルに教えた。

俯き、下唇を噛んで必死に侮辱に耐えているセシルの姿がコンラートの視界の端に映り込む。コンラートは胸に怒りが湧きあがるのを感じていた。

「あまり、そういう態度を御取りにならないほうがよろしいかと存じますが？」

コンラートが口を開く。その瞳に込められた気迫にダニエラは一瞬、怯んだがすぐに叫んだ。

「どついう意味よー！」

コンラートはダニエラを睨みつける。騎士であるコンラートはその視線に感情を乗せる術を心得ている。通常、戦地にて敵を威嚇する際に用いる術だが、コンラートはそれをダニエラに向けた。視線に寄せられた感情は怒り……。ダニエラはその視線を真正面から受け、

我知らず慄いた。

「何かあれば、些細なことでも報告するように命を受けております。先程のような振る舞いも例外ではございません」

ダニエラは押し黙ったまま、コンラートの言葉を聞いていた。何か言い返したくても声が出ないのだ。それほどまでにコンラートの怒気のこもった視線には威力があった。

「これ以上、セシル様を侮辱なさるのならば、こちらもそれ相応の手段にですが、よろしいですか？」

コンラートはそう言いながら視線に感情を込めるのをやめた。漸く体の自由を取り戻したダニエラはコンラートに向かい叫んだ。

「この子付きになったからっていい気になるんじゃないわよ！ お前なんて、この子が陛下から飽きられればその任を解かれてただの一騎士に逆戻りよ！ ばーつと廊下の隅に突っ立てるのが落ちだわ！ 行きますわよ！ 皆さん！」

ダニエラは一気に捲くし立てると取り巻きを引き連れ廊下の角に消えた。

「セシル様……」

気遣しげなニコラの声に顔を上げたセシルの視界に飛び込んで来たのは自分を苦しげな表情で見つめる一同の顔だった。

「・・・大丈夫。行きましょ」

セシルは無理やり微笑んで見せた。そう、いつもと同じように・・・

その微笑みにそこにいる者たちは皆、胸を打たれた。

元々、セシルに忠誠を誓い、守ると覚悟を決めているニコラとコンラート

はもちろんだが、セシルのために役に立とうと決めたモニカ、そして、

然してセシルに興味を抱いていなかったイーナとエアハルトですらその笑顔から目が離せなかった。

この状況で微笑む芯の強さに心が打ち震えるのを全員が感じていた。

セシルが一步踏み出す。それを合図に皆、気を引き締めた。

前を見据え、歩を進める彼らは言葉に出さずとも全員が同じ気持ちであることを感じていた。それぞれがちらりとセシルに視線を走らせる。そして、胸の中で静かに誓った。

この方は絶対に守る・・・

第18話（後書き）

アルトウルが置き去りになってしまった・・・

第19話

「・・・エアハルト」

図書室に着くとコンラートが呼びかけた。エアハルトは小さく頷くと先に図書室に足を踏み入れる。イーナとモニカもそれに続いた。中を確認するためだ。

三人は室内を見渡し、異常が無いことを確認すると図書室の扉を少しだけ開き、中の様子を窺っていたコンラートに目で合図する。それを見届けてからコンラートは扉を開け放ち、セシルを室内に誘った。

「セシル様、どうぞ」

セシルは物々しさに若干の息苦しさを感じながら室内に入った。

セシルが本を選ぶ間、コンラートとニコラが付き従い、他の三人は室内に散らばり、周りに気を配っていた。死角を作らないためである。

「ねえ、コンラート」

セシルは堪らず声を掛けた。

「なんでございましょう？」

「・・・そんなに神経質にならないの？」

ここまできちんとした護衛を受けたことのないセシルにはこの状況が

普通であるとは思えなかった。その必要性もまだ理解していなかった。

純粹で真っ直ぐなところはセシルの長所だと思う。だが、それ故に危険も多いだろうとコンラートは思っていた。

セシルはまだ思っても居ないのだ。

自分の命を狙われる可能性があるということ。・・・。

知っておいてもらった方がいいとコンラートは思う。だが、それと同時に

に知らせたくはないとも思う。事実を知ったセシルは恐れを抱くだろう。

そんな姿は本心を言えば見たくない。だが、そうも言っ居られないこと

もコンラートには分かっていた。

「・・・セシル様。図書室は場所柄、背の高い棚が立ち並び、死角も多い。

セシル様に害をなそうとするものにとっては格好の場所です。それに

万が一、そういう輩がセシル様に向かって棚を倒すという暴挙に出れば

セシル様の御命が危ない。室内に神経を尖らせるのは当然です」

セシルはコンラートの言葉に衝撃を受けた。『命が危ない』という言葉は

セシルに自分の立場を自覚させた。

エドアルドはセシルの覚悟が出来るまで待つと言った。それにセシルは
何事においてもかと問い返した。問うた本人が気付いていなかった。
セシルが一番初めにすべき覚悟はエドアルドに抱かれることでも、
王妃
になることでもない。

命を狙われる立場になる覚悟であったということに・・・

後宮には多くの側室がいるがエドアルドの寵愛を受ける者はいなかった。
つた。

何度かエドアルドの訪問を受ける側室もあつたが、その側室も命までは
狙われなかった。横並びの状況下の後宮は表面上穏やかだったので
ある。

さらに言えばセシルはそういう喧騒から離れた場所でひっそり暮ら
して
いた。だから、忘れていた。

後宮が女の戦いの場であるということを・・・

エドアルドがドレスを贈ったこと、昨夜の夜会の出来事。さらにその
後

エドアルドがセシルの元を訪れたことで女たちは確信したはずだ。

横並びの状況下からセシルが一歩先に出た、と

皆が同じであるうちは誰も行動を起こさない。だが、誰かが特別になれば

話は別だ。後宮にいる女たちは皆、エドアルドの寵愛を欲し、王妃の座を

狙っている。エドアルドを愛している者などいない。皆、欲しいのは王妃

の肩書とそれによって得られる富と権力だ。そんな彼女たちにとって特別

な誰かなど邪魔なだけだ。どんな手を使ってでも排除しようとするだろう。

密に行われてきた女たちの戦いは今、新たな局面を迎えている。

そして

そこに今まで蚊帳の外にいた自分がいきなりド真ん中に叩きこまれよう

としていることにセシルは漸く気付いた。

愕然とした表情で立ちすくむセシルにコンラートは切々と訴える。

「セシル様！我々が必ず御守り致します！陛下だって、きっとセシル様を

御守りくださるはずです！」

コンラートの言葉にセシルは今朝のエドアルドとのやり取りを思い出して

いた。エドアルドは必ず守ると言った。セシルはそれを信じると決めた。

コンラート達がセシルの元に配属されたのはエドアルドが守るとい
う言葉

を実行に移したからだろう。

彼はもう動き始めている・・・だとしたら自分に出来ることは・・・

セシルはコンラートに微笑みかけた。そこには先程まであった怯えや戸惑いは消えていた。

「ありがとう、コンラート。貴方達が居てくれて頼もしく思うわ。これから
もよろしくね」

セシルは争いの渦中に飛び込む覚悟を決めた。守ると言ってくれた時のエドアルドの真摯な眼差しと目の前の騎士の熱い想いがセシルに恐怖を忘れさせた。

コンラートはセシルの微笑みを見て思う。

この方は誰にも胸の内の恐怖や不安をみせようとししないのだな

自分よりも周りのことを気遣って、心配を掛けまい、迷惑を掛けまいとして
いるように見える。だから彼女はどんな状況でも笑うのだろう。微笑むこと

で自分を支えているようにも見える。

誰か、この方の抛り所になってくれる人はいないのだろうか

コンラートはそう思い、一人の人物に想いを馳せる。

陛下はそうなったださるのだろうか・・・

コンラートはそれを期待せずには居られなかった。

第20話

「ごめんね。皆、重いでしょ？」

セシルは申し訳なさそうに謝った。

「何をおっしゃいますやら、このくらい平気ですよ」

ニコラが応える、イーナとモニカも頷いた。三人の手にはセシルが図書室より借りてきた本が2、3冊ずつ抱えられていた。

図書室の蔵書は持ち出しが禁止されている物以外は自由に借りることが出来た。

セシルは図書室で本を読むだけではなく、数冊借りて帰ることがたまにあった。いつもはニコラしか居なかったから数冊と言っても3冊くらいが限度だった。

今日借りる本もセシルは始めは3冊くらいにしようと思っていたのだが、イーナとモニカが自分たちもいるのだから遠慮せず好きなだけ借りるといいと進言してくれた。セシルはそれに甘えていつもより多く本を借りてきたのだ。

「セシル様は読書が御好きなのですか？」

エアハルトが問いかけた。セシルのことがもつと知りたいと彼は考えるようになった。

「ええ、好きよ。刺繍をしたりとか、レースを編んだりするのも好きね」

そういうコツコツとした作業はセシルの性に合うのだ。そうした趣味も母は地味だと嫌っていたが・・・

他愛ない話しをしながらセシル一行は王宮の廊下を後宮を目指して歩いていた。

もう少しで後宮に着く、このまま何事もないまま戻れそうだとコンラートが思っていた時だった。

「・・・騎士を従えているってことは、お前がエドアルドのお気に入りか？」

その声に振り返ったコンラートは仰天した。

「ゲオルク殿下?!」

コンラートの放った言葉に全員が慌てて頭を下げた。セシルはその姿を見たことはなくとも名前だけは聞いたことがあった。

ゲオルク・ディートリヒ・アルコーン

王になるはずだった男と人は彼を呼ぶ。先王の長子でありながら側室の産んだ王子

であつたため王位継承権2位とされ、王になることができなかった。先王譲りの銀

髪はエドアルドと同じだがその面差しは母ヘルガに良く似ており、切れ長な釣り目

に碧い瞳を持った彼の顔はどこか冷たい印象を受ける。

「若そうだな、歳は？」

ゲオルクがセシルに近づきながら問いかける。

「・・・18にございます」

セシルの答えにゲオルクはニヤリと笑った。

「随分、若いのに手を出したな。で、名は？」

ゲオルクはもう、セシルの目の前まで迫っていた。

「・・・セシル・ブルックナーと申します」

頭を下げたまま、セシルは質問に答え続ける。

「そうか、セシル、頭を上げよ」

言われるままにセシルが頭を上げる。セシルの顔を見たゲオルクの

顔に
厭らしい笑みが浮かんだ。それを見たセシルは全身に鳥肌が立つの
を感じた。

「顔はなかなかだな。・・・セシル、これから俺とどこかの部屋で
過ご

さないか？・・・俺はエドアルドよりうまいと思うぞ？」

セシルはゲオルクの言っていることが一瞬、理解できなかった。だ
が、
理解出来た時、それは恐怖となり全身を駆け巡った。

「お、お戯れを。どうかお許しくださいませ」

セシルは言いながら一歩下がってゲオルクから距離を取った。

「この俺に逆らうのか？」

言いながらゲオルクはセシルとの距離を詰め、その手を掴んだ。

「どうか！どうか！お許しくださいませ！」

セシルは叫ぶように懇願するがゲオルクは掴んだ手を離さない。

その間、コンラート達は頭を下げたまま、ゲオルクを殴り飛ばしたい
衝動と戦っていた。セシルのことを助けたいが相手が王族では手が
出せ
ない・・・

誰か！誰か来てくれ！誰か！この方を助けてくれ！

全員が心の中で叫んでいた。その時・・・

「セシル！」

自分と呼んだのが誰なのか、セシルにはすぐに分かった。

「エドアルド！」

セシルが振り返るとそこにはこちらに駆けってくるエドアルドの姿があった。

セシルはゲオルクの手を力いっぱい振り払い、エドアルドに向かい駆け寄り

その胸に飛び込んだ。エドアルドはそんなセシルをしっかりと受け止め抱きしめた。

その体が震えていることにエドアルドの怒りが増幅する。

「ゲオルク、貴様ここで何をしている？」

エドアルドが低い声で問いかける。ゲオルクはわざとらしく肩を竦めるてみせた。

「何をしてるとはご挨拶だな。俺は王族だぞ？ここで何をしようが

許可も

理由も必要ないだろ？」

悪怯れる様子もなくそう言うゲオルクをエドアルドが睨みつける。

「ゲオルク、お前、まだ自分の立場が理解できていないようだな」

「立場ってなんだ？俺は王族でお前の兄だ。それ以外何かあるのか？」

二人は睨みあつたまま、動かなかった。

エドアルドは決してゲオルクを兄上とは呼ばない。それはゲオルクを牽制するためだ。

お前は自分より下なのだ、と

ゲオルクは決してエドアルドを陛下とは呼ばない。それはゲオルクの意地だ。

そう呼ばれるのは自分のはずだったのに、と

「まあいい。俺はお前のお気に入りを少しからっただけだ。俺はそんな

小娘には食指は動かないんでな」

先に均衡を破つたのはゲオルクだ。そういうとゲオルクは踵を返し、その場

を去ろうとした。その背にエドアルドが声を掛ける。

「ゲオルク、覚悟しておけよ」

その声にゲオルクが振り返った。

「何の覚悟だ？エドアルド、俺には見当がつかないよ」

そう言い残して、ゲオルクは去った。

「・・・セシル、大丈夫か？」

腕の中でまだ震えているセシルにエドアルドが優しく声を掛ける。
セシルは
それに頷くことで応えた。

「申し訳ありませんでした！陛下！」

コンラートが叫ぶように言いながらエドアルドに頭を下げた。それに他の者
も続いて頭を下げる。

「・・・よい。此度は相手が悪かった」

エドアルドは皆にその声を掛けた。この者たちでは王族に何もできない。
ない。

それが分かっている、わざとゲオルクは近づいたのだ。

エドアルドが通りかかったのはたまたまだ。用事を済ませるために移動して

いるとゲオルクの姿が見えた。

なぜ、あいつがここに？

そう不審に思っ
て近づくとゲオルクの前にセシルが居た。遠目から見ても

ゲオルクがセシルの手を掴んでいるのが分かった。そして、セシルが怯えて

いることも・・・

気が付けば走り出していた、大声で名前を呼んだ。自分を見た時のセシルの

安堵の表情が目には焼き付いて消えない。

エドアルドはセシルを抱きしめる腕に再び力を込めた。

第21話

「・・・嫌な目に合わせたな。すまない」

エドアルドはセシルにそう声を掛けた。セシルはちいさく首を横に振ると

エドアルドの腕の中からそつと離れようとした。

「セシル？」

セシルのそんな様子を感じ取り、エドアルドはそれを制するように少しだ

け腕に力を込める。セシルはエドアルドの顔を見上げた。

「・・・執務中でらっしゃるのでしょうか？もう、大丈夫ですから」

「気にするな」

エドアルドはセシルを離さない。セシルは困ったような顔しながらこう言った。

「本当に大丈夫です。それに、ここは・・・」

王宮の廊下でいつまでもこうしているわけにはいかないとセシルは思った。

セシルが呑みこんだ言葉をエドアルドは察し、辺りを見渡す。幸い人影は無さそうだ。

「・・・そうだな。セシル、こちらへ来い」

エドアルドはセシルを抱きしめていた腕を解き、セシルの肩を抱いて歩き出す。

「え？」

セシルは戸惑いながらもエドアルドに従って歩き出した。

「このまま帰すのは忍びない。どこか休める所へ行こう」

エドアルドの優しさに触れ、セシルは昨夜感じた胸の中に何かが込み上げてくる

感覚を再び感じていた。

「お前たちも休んでいろ、隣の部屋を使って構わん」

王宮の一角、来賓用の寝室の並ぶ場所まで来ると、その中の一室にセシルと足を踏み入れながらエドアルドはそう言った。残されたニコラ達は顔を見合わせた。

「私とエアハルトは扉の前に控えております。ニコラ殿達はどうぞ、中でお休みください」

コンラートに促されて、ニコラ達は部屋に入って行き、コンラート達は扉の前に立った。

「お前、図書室に行ったのか？」

セシルをソファに座らせながらエドアルドが問いかける。

「はい。本を借りに」

セシルの答えを聞きながらエドアルドはセシルの横に座り、そっと抱き寄せる。

「そうか、よく行くのか？」

「ええ。本を読むのが好きなんです」

「そうか」

それきり、エドアルドは何も言わず、セシルを抱きしめながらその髪を梳かして

いた。その様子が何事を考え込んでいるように思えて、セシルは小首を傾げた。

「陛下？」

セシルの呼びかけにエドアルドは考え事をやめて、クスッと笑った。

「さっきはエドアルドと呼んだくせに、もう陛下か？今は二人きりだぞ」

からかうようにそう言われてセシルはあたふたと慌てた。

「さ、さつきは必死でしたから！」

その様子にはエドアルドはクスクス笑っている。

「もう！陛下なんて知りません！」

セシルは両手でエドアルドを押しつけ、そっぽを向く。拗ねたらしい。

「また陛下と呼んだな？」

エドアルドはセシルの顔を両手で包み、グイッと自分の方を向かせる。

拗ねているセシルはエドアルドと目を合わさない。

「何だ？昨夜みたいに口付けしなきゃ呼んでももらえないのか？」

「何をおっしゃっ！」

エドアルドの言葉にセシルが驚いて視線をエドアルドに向けた時には既にエドアルドの顔が目の前にあった。避ける間もなく唇を奪われた。

セシルはエドアルドの胸を両手で軽く叩いて抗議したが、エドアルドはその手を握り締めて引き寄せ、セシルの体を抱きしめた。

ぴったりと抱き合うような形になった時、セシルは何も考えられなくなっていた。

ゆっくりとエドアルドが唇を離す。セシルはそれをぼうつと見つめ

た。

「・・・陛下・・・エドアルドは意地悪ですね」

陛下と呼びかけたセシルをエドアルドは心底可愛いと思った。

「お前の反応が可愛いからついな」

エドアルドはセシルの髪を撫でながらそう言った。

「あんまりすると嫌いになりますよ？」

セシルは上目づかいでわざとそう言った。

「そいつは困るな」

エドアルドが本当に困ったような顔をしたのでセシルはクスッと笑った。

「ふふふ、冗談です」

セシルがそう言つとエドアルドの顔に笑みが浮かんだ。

「ふっ、お前も意地悪だな」

そう言つてエドアルドはセシルを抱きしめる。セシルも素直にそれを受け入れる。

二人はそうしてしばらくの間、その部屋で甘い時間を過ごした。

第22話

「ここまでしか送ってやれなくて、すまない」

後宮の入口まで来た時、エドアルドがそう言った。

「いいえ、ありがとうございました」

セシルはエドアルドに頭を下げた。他の者もそれに続く。

あの部屋でしばらく過ごした後、後宮に戻るといってセシルにエドアルドはもう少しだけ一緒に居たいとの想いから入口まで送ると言った。

執務中であるにも関わらず、自分に時間を割いてくれたエドアルドにこれ以上を望むのは申し訳ない気がして、セシルは最初、その申し出を断った。

141

だが、セシルに断られて寂しげな表情を浮かべるエドアルドを見たとき、

自らの中であつた、もう少しだけ一緒に居たいという想いに、セシルは蓋が出来なくなった。

「・・・もう少しだけ一緒に居てくださいますか？」

セシルの口から自然に言葉が紡がれる。エドアルドは一瞬、目を見開いた
がすぐに破顔した。

「もちろんだ。俺からも頼む。もう少しだけ一緒に居させてくれ」

エドアルドの言葉にセシルはニコッと微笑んだ。それを受けてエドアルドも

微笑む。そうして、どちらからともなく笑い声が漏れる。

二人は笑いあいながら部屋を後にしたのだ。

「ではな、セシル。また今夜な」

エドアルドは名残惜しそうにセシルの髪を一撫でした。

「はい、お待ちしております」

セシルはにつこりと微笑んでさういうとエドアルドにもう一度、頭を下げ

後宮へと歩き出した。

去りゆくセシルの背中をエドアルドは見えなくなるまで見つめたいた。

「こんなところで何してんの？陛下」

後宮の入口にエドアルドが立っていると横から不思議そうな声が聞こえた。

「テオ」

そこにはエドアルドがよく知る人物が立っていた。

「また共も付けずに歩いちゃって、エルンストに怒られるよ?」

テオと呼ばれた青年はエドアルドにそう言いながら近づいた。

「黙れ。お前だって一人じゃないか」

青年は肩を竦めてこう返した。

「僕はいいんだよ。僕を殺したって得する人いないじゃないか。でも、陛下は違うでしょ?」

その態度を見るとエドアルドはいつも思う。

この弟は本当に厄介な奴だと・・・

テオバルト・フロリアン・アルコーン

彼はエドアルドの弟にあたる。歳は22歳。王位継承権は3位。

兄二人と同じように先王譲りの銀髪を持ち、その面差しはエドアルドによく似ていた。

歳は離れているのにその容姿は双子のようだとよく言われるが、二人は

同母ではなく、テオバルトもまた、ゲオルクと同じように側室の産んだ

王子であつた。

彼の母やその支援者はテオバルトを王にしようとして一時は画策していた

のだが、テオバルト本人が王位に興味が無く、勝てるかどうか分らない

争いを続けるより臣下として安定した暮らしを送った方がいいと考える

現実主義だったため、それを諦めた。

今、彼は財務大臣としてエドアルドの内政を助けている。

「真昼間の王宮で仕掛けてくる奴はいないだろ」

エドアルドはうんざりしたようにテオバルトに言う。

「ゲオルク兄さんなら仕掛けられる」

テオバルトは間髪入れずにそう切り返した。エドアルドの顔が微かに歪む。

「さっきゲオルク兄さんが気持ち悪い笑顔で歩いてたけど？陛下、何か

されたんじゃないの？」

エドアルドは舌打ちをし、テオバルトから目を逸らす。

「やっぱりそうなんだ。何されたの？」

テオバルトは興味津津といった様子だ。

「・・・知りたいか？」

エドアルドは仕方なそうに問いかけた。それにテオバルトは力強く頷くことで応えた。

「ここじゃなんだ・・・着いてこい」

歩き出すエドアルドの後ろをテオバルトは嬉々として着いて行った。

第23話

「本当にあの人は救いようが無いね。どこまで馬鹿なんだか」

テオバルトは心底呆れたという様子だ。エドアルドはテオバルトを執務室に連れて行った。そこで先程の一件を話して聞かせた。テオバルトは事の詳細を聞いて、益々ゲオルクが嫌いになった。

「お前、本当にゲオルクが嫌いだな」

エドアルドはしみじみと呟いた。

「僕は愚か者は嫌いだよ」

それを受けてテオバルトが冷たく言い放つ。

「愚か、か」

エドアルドはテオバルトの言葉を尤もだと思った。

「自分が置かれてる立場も、そうなった理由も、何も気付いて無いんだよ？」

きつとこれから先も気付かないよ。気付かないまま、叫び続けるんだ。

『王になるのは自分のはずだったのに』って。愚か以外の何でもないよ」

テオバルトはそう言うつと溜息をついた。あの兄は救いようが無いと常々思ってたがそろそろ存在自体が鬱陶しくなってきた。先に生まれたという以外は一つ自分より優位な部分がないあの男が自分に威張り散らすのもテオバルトは不愉快で堪らなかった。

「そうは言ってもな。テオ、誰もかれもお前みたいに現実主義じゃないんだよ」

エドアルドは諭すように言う。

「そんなの分かってるよ。でも、ゲオルク兄さんは現実を全然見て無い」

テオバルトは苛立った口調でそう言った。

現実を直視することは普通ならば苦痛を伴うことぐらい、テオバルトにも分かってる。

自分はそれを容易に受け入れることが出来る性格だったただで他の人にそれが簡単に出来ないこともテオバルトはちゃんと分かっているのだ。

分かっているからこそ思う。あの兄は愚かだと・・・。

現実から逃げ、真実から目を逸らし、同じことを叫び続け、未だに何も分かっていない、否、分かうとして居ない。知ることと傷つくことを恐れ、苦痛の苛まれることを嫌い。自分にとって都合のいい世界で生きている。

そんな輩に誰が付いていくだろう？

ゲオルクを王にと動いていた支援者はすでに彼を離れている。そのこと
にすら気付いていないだろう。

今のゲオルクは観客の居ない舞台上一人で踊っている道化に過ぎない。

その姿は滑稽で愚かだとテオバルトは思っている。

そろそろ幕を下ろさせてあげようかな・・・

テオバルトはそう決意した。

「・・・兄さん」

その呼びかけにエドアルドは少々身構えた。テオバルトがそう呼ぶ時は何か企んでいる時だからだ。

「・・・何だ？」

エドアルドは警戒しつつ、先を促す。エドアルドのそんな態度をテオバルトはふっと笑って受け流した。

「ゲオルク兄さんにそろそろ教えてあげようよ。・・・現実って奴を」

口調は飄々としていたがその瞳は真剣だった。エドアルドは黙ってそれを見つめた。

「筋書きを考えるのも、舞台を整えるのも僕がやるよ。

主演は僕とゲオルク兄さん。

エドアルド兄さんは最後の最後で華々しく登場して、ゲオルク兄さんに

現実を叩きつけるだけでいい」

テオバルトが言わんとしていることを察し、エドアルドは黙り込む。

主演がテオバルトとゲオルクであるということは、テオバルトは自らを

囿にゲオルクに罫を張るつもりなのだろう。

エドアルドとテオバルト。

二人の容姿はよく似ている。影武者にはテオバルトは打って付けなのだ。

「・・・危険はないのか？」

エドアルドが問う。テオバルトは意外だという顔をした。

「やだなあ、兄さん。危険なんてあるわけじゃないじゃない。だって、僕だよ？」

自身満々に応えるテオバルトを見て、エドアルドは思う。

確かにそうだな・・・

エドアルドは戦に長けていると言われるし、自身もそう思っている。だが、それは力の面においてだ。

謀略や調略、計略といった知の面はテオバルトの方が優れている。今でこそ

テオバルトは財務大臣だが、エドアルドが即位してすぐのころの近隣諸国と

の戦においてはその才を軍師に認められ、12歳にして軍師の補佐として

戦に参加していた。

エドアルドは時々思う。テオバルトが敵でなくてよかった、と

そのテオバルトがついにゲオルクを排除しようと動き出そうとしている。

もう、ゲオルクに逃げ場はないだろうとエドアルドは思った。

「確かに、お前なら危険を冒さずにゲオルクを嵌められるだろうな」

「ふふふ、そうだよ」

エドアルドの言葉にテオバルトは得意げな顔をした。その顔を見つめて

いたエドアルドがニヤリと笑う。

「お前、あいつに現実を教えてやるとか言ってるが、本当はあいつを自分の目の前から消したいだけだろ？」

エドアルドの言葉にテオバルトは得意げな顔をやめ、ニヤリと笑う。

「ばれた？でも、兄さんにとっても悪い話じゃないでしょ？」

テオバルトはどこか楽しげにそう言った。エドアルドがこの話に乗らない訳がないと思っているのだろう。

「・・・確かに。テオ、決行はいつだ？」

エドアルドは話に乗った。

「色々準備があるからすぐって訳にはいかないかな？」

その様子にテオバルトは益々楽しげだ。

エドアルドは呆れたように呟いた。

「本当に楽しそうだな、お前」

テオバルトはくすくす笑っている。

「ゲオルク兄さんどんな顔するんだろうつて考えたら、
楽しくもなるよ」

エドアルドは心底思う。

こいつ、腹の中真っ黒だな・・・

エドアルドがそんなことを思っているとは気付かないまま、
テオバルトは尚も楽しげに話を進めた。

「準備が出来たら言うからさ。それまではセシルさん？だっけ？
その人の所に毎晩でも行けば？」

「ば、馬鹿！こんな時に何言ってるんだ！」

焦るエドアルドにテオバルトは声を上げて笑い出した。

「あははは。それにしても兄さんに本気の相手が出来るとなんてねえ。
ひょっとして、初恋なんじゃない？」

「五月蠅い！黙れ！」

怒るエドアルドにテオバルトはしれつと言い返す。

「すぐに黙れって言う癖、直せてエルンストに言われてなかった

「？」

「だっ！……五月蠅い！」

「あはは。そんじゃね。兄さん」

黙れと言いかけて辞めたエドアルドをくすくす笑いながらテオバルトは

部屋を後にした。

一人残された部屋の中でエドアルドは息を吐き、気を落ち着かせた。

そうして呟く。

「……初恋……か」

そうかもしれないとエドアルドは思った。

第24話

「御帰りなさいませ・・・皆どうしたのだ？」

セシルたちを出迎えたアルトウルはコンラート達の顔を見て思わず問いかけた。

コンラート達は皆、苦虫を噛み潰したような顔をしていたのだ。

「ただいま、アルトウル。ちょっと色々あったの。でも、もう大丈夫よ」

セシルはにっこり笑ってそう答えて部屋の中に入って行った。残されたアルトウルは訳が分からないといった表情だ。

「アルトウル、その件は俺から話そう。エアハルト、戻って早々悪いがアルトウルと交代してやってくれ」

コンラートはそういうと先に詰め所に入って行った。戸惑うアルトウルにエアハルトが声を掛ける。

「俺のことは気にしないでいいから、早く行けよ」

エアハルトに促され、アルトウルは詰め所に入って行った。

「そつようなことが?！」

先程のゲオルクとの一件を聞かされたアルトウルは仰天した。

「ああ。陛下が来てくださらなければどうなっていたか、分からない。

殿下はからかったただけだとおっしゃったが、……あの目は本気だっ

たように思う……」

王宮に居る者であれば、ゲオルクとエドアルドの関係がよくないという

ことは誰でも知っている。アルトウルもそんな話は聞いていた。

だが、まさかエドアルドの寵室であるセシルに手を出してくると思っ

居なかった。

自分とはんでもない方の警護についたのだな……

アルトウルはそう思い、溜息をついた。

急に言われた配置換え、側室の護衛をしと言われてアルトウルは内心

嫌だった。側室となっているのは貴族の娘たちばかりで自分たちは特別

なのだという思いを隠さず、横柄に振る舞っている。

アルトウルはそういう女性が嫌いであれば関わりたくないと思っ

ていた。

セシルに逢ってみて、他の側室とはどこか違う人だと思った。自分は特別なのだとは思っていないようだし、横柄どころかその態度は

慎ましい。そして、自分に頭を下げた姿には大変驚いた。

だが、それだけだ。然してセシルに興味を抱いてはいない。ただ、命令されたから守るだけだ。

最初の頃に比べれば、守ることが苦では無いことくらいしかアルトウルの心境に変化は無い。

「しかし、あれだな。陛下と過ごされた後のセシル様は本当に晴れやかな笑顔をしてらっしゃった。きっと、セシル様にとっても陛下は特別なんだろうな」

コンラートがしみじみと呟く姿を見てアルトウルはそういえばと思います。

「コンラート、お前は俺とエアハルトと違い、自ら進んであの方の護衛になっただけなの？ どうしてだ？」

一度、聞いてみたいと思った。何が彼にそうさせたのかは興味があった。

「あの方は不思議な方だ。貴族の、伯爵の娘でありながら、人との間に身分など関係ないと思ってらっしやるようだ。俺たちにも頭を下げ、感謝の言葉を口になさる。興味があつたんだ。だから、側で見て居たい
と思った。それが最初の理由だな。」

雄弁と語るコンラートをアルトゥルは黙って見つめたいた。コンラートは
尚も語り続ける。

「側に居るようになってわかったことがある。あの方は泣かないんだ。
どんな目に合おうと決して涙を見せようと為さらない。泣くかわりに
微笑むんだ。そうすることで周りに心配や迷惑をかけまいとしてらっ
しやるんだと思う。」

コンラートは一度、言葉を切った。すうっと息を吐いて次の言葉を口にする。

「それに気付いた時、守りたいと思った。この純真で真っ直ぐな少女を
傷つけるものから守りたいと・・・皆も同じ気持ちだと思う」

皆も同じという言葉にアルトゥルは眉を顰める。自分はまだそこまで

セシルのことを想ってはいないからだ。

アルトウルの様子に気付いて、コンラートが言う。

「アルトウル、お前にも分かる時がくる。それまで、義務でいいからセシル様をしっかりと守れ」

「・・・守るのは仕事だ。ちゃんとやるさ」

アルトウルはそう答えながら思う。

・・・そんな時が本当にくるのだろうか？

半信半疑のまま、アルトウルは詰め所の扉を見つめ、その向こうのセシルに思いを馳せた。

第25話

「セシル様、私は厨房へ昼食を受け取りに行って参ります」

後宮の自室に戻ったセシルにモニカがそう声を掛けた。

「モニカが行くの？」

その申し出にセシルは小首を傾げた。今までそれはニコラの役目だった

からだ。

「人数が増えましたからね、今まで私が一人で行ってきた仕事を三人で

分担することになったのですよ。食事の準備はこれからはモニカさん

の仕事になりましたから、セシル様のそのつもりでいてくださいまし」

その疑問にすかさずニコラが応える。イーナは分担することになったとは

聞いていなかったが、空気を読み、口を挟まなかった。

「そうなの？分かったわ、いってらっしゃいモニカ。気をつけてね」

セシルはニコっと笑ってモニカにそう言った。

「・・・はい、行って参ります」

まさか笑顔でいつてらっしゃいと声を掛けてもらえと思っていなかった

モニカは一瞬、反応が遅れた。だが、すぐに気を取り直して、扉に向かい歩き出した。

そうして部屋を出たモニカはふうつと息を吐いた。

主から笑顔で『いつてらっしゃい』なんて初めて言われたわ・・・

モニカはすつと表情を引き締め、厨房へと歩きだした。

「セシル様、私は何を致したらよろしいですか？」

モニカが去った部屋でイーナが問いかける。

「そだね、図書室から借りてきた本を片づけてくれる？」

「畏まりました」

セシルの言葉を受けてイーナが机の上の本に手を伸ばす。

「・・・これは」

一番上に置かれた本にイーナの目が釘付けになった。その様子をセシルが

ニコニコと見つめている。

「イーナ、その本が気になるなら読んでもいいのよ？それはお前のために」

借りて来たのだし」

「えっ？あの、それは・・・」

セシルに言葉にイーナは驚いた。

私のためって今おっしゃった？

その様子にセシルは微笑みながら語りかける。

「図書室でその本のこと見てたじゃない？気になってるんだろうなあと」

思っ借りて来たんだけど、違ったかしら？」

セシルの言葉にイーナは驚いた。

・・・気付いてらっしゃったの？

室内を見て回りながらふと、視界の隅にその本が見えた。その本は10年前、

国が混乱している最中に出版された本で、それ故に発行部数が少なく、幻の

本とまで言われていた。

一度読んでみたいと思っていた本が目の前にあった。

思わず、それを凝視してしまった。だか、すぐに今は仕事だと思
い直し、
そこを離れた。

そう長い時間そうして居た訳ではない。それなのに気付かれてると
は思わ
なかった。

「イーナ？」

イーナを呼ぶセシルの声は先程と打って変わって不安げだ。イーナ
が何も
言わないので自分の勘違いかと不安になったようだ。

「・・・有難うございます、セシル様。私、この本をずっと読んで
みたい
と思っております」

イーナが本を胸に抱き、深々と頭を下げた。その様子にセシルは安
堵の
表情を浮かべる。

「やっぱりそうだったのね！よかった、勘違いじゃなくて。返却期
限って

とくに無いから気にせず、ゆっくり読んで大丈夫よ」

自分のために本を借りて来てくれた上に、ゆっくり読んで大丈夫だ

と氣遣つて

までくれるセシルにイーナは胸が熱くなった。

先程、セシルの芯の強さに触れ、セシルに心酔し始めているイーナは益々その想いを強くした。

「戻りました」

そこにモニカが戻ってきたので各々は昼食を取る準備を始めた。

昼食を終え、セシルとイーナは読書をし、ニコラとモニカは刺繍をして過ごして

居た。コンラートは扉の前に立ち、アルトゥルとエアハルトは詰会所で剣の手入れをしている。その様子は穏やかな昼下がりといった感じで皆、それぞれ安らぎを感じていた。

そんな中、コンラートは人が近づいてくる気配を感じ、廊下の向こうに視線を向けた。

廊下の向こうから、仕立てのいい服を纏った男を先頭に紙やら布やらを持った集団が現れた。

コンラートの前までくると男は一礼してこう言った。

「我らは仕立て屋にございます。国王陛下の命により、セシル様のドレスを仕立てに参りました。」

穏やかな昼下がりの終わりを告げる。突然の訪問だった。

第26話

「陛下の命で来たのか？」

コンラートはそう問いかけた。仕立て屋と名乗った男は慚然とした表情で答えた。

「先程も申しました通り、我らは国王陛下の命にて参上いたしました。

・・・お疑いになられるので？」

コンラートはこの集団を怪しいと思った。後宮に來た商人や仕立て屋は皆、女官長の引率を受けて後宮を歩く。

この集団は女官長抜きで現れた。怪しむなという方が無理だ。

「・・・女官長殿はどうした？一緒では無いようだが？」

コンラートの問いかけに、男はこう切り返す。

「女官長様のお許しは受けております。ご確認くださいませ」

「しかし・・・」

「我らは陛下の命でここにいるのです。その我らをいつまでここに立たせて

置く気でございますか？」

コンラートはこの集団をセシルの部屋に入れる訳には行かない思
った。

だが、王の命を受けていると主張され続け、このままここに置いて
おけない
状況だった。

「・・・分かった」

コンラートは仕方なく、部屋の扉を叩いた。

「ニコラ殿」

中に居るニコラに呼びかけると扉が開かれた。

「・・・どうなさいました？」

ニコラは部屋の前にいる集団が気になり、コンラートに視線を送る。
コンラートは小さく頷いて口を開く。

「陛下の命を受けて参った仕立て屋だそうです。セシル様のドレスを
仕立てるよう命を受けたそうです」

コンラートの言葉を聞いて、ニコラはすっと表情を引き締めた。

「そうですか、では、お入りください」

仕立て屋だと名乗る集団が部屋に入っていく。全員が部屋に入った
後、
扉の近くに立っていたニコラにコンラートが小声で言った。

「・・・ニコラ殿、くれぐれもご注意を。この集団はどうも怪しい」

ニコラは小さく頷くことでそれに答えた。

廊下に残ったコンラートは詰め所の中に声を掛ける。

「アルトゥル、エアハルト」

声を掛けられた二人は詰め所から出て来た。

「どうした？」

エアハルトが問いかける。コンラートは早口で話した。

「陛下の命を受けたという仕立て屋が来たのだが、どうも怪しい。お前たち、部屋の中を見張っててくれ。俺は女官長に確認を取りに行ってくる」

「分かった」

アルトゥルはそう答えると侍女室へ入ろうとした、セシルの部屋の入口より、部屋に併設されている侍女室からの方がセシルから距離が近いからだ。それにエアハルトも続く。

「もしもの時は頼むぞ！」

二人にそう言い残してコンラートは女官長の元へ走り出した。

部屋に通された仕立て屋を名乗る男はセシルの前に来ると恭しく頭をさげた。

「お初にお目にかかります。私、陛下の命にてセシル様のドレスを仕立てるため、採寸と好みの聞き取りに参りました」

「はあ。どうも」

セシルはそう言って頭を下げたが、どうも腑に落ちなかった。

先程逢った時、エドアルドは何も言っていなかった。仕立て屋をよくすなら前以て言ってくれるはずだ。急に来られてはセシルが困ることをエドアルドは分かっているだろう。セシルは自分が困るようなことをエドアルドがするとは思えなかった。

共に過ごすようになってそう長い時間は経っていないが、セシルの中でエドアルドそういった部分での信頼は強くなっていた。

その信頼がこの一団を信用することに警鐘を鳴らす。

普段は人を疑うことなどしないセシルだが此度は少々違う。

自分がどんな状況になっているのかはダニエラ達の態度とコンラートの

言葉、そしてゲオルクが襲来したことにより十分理解した。

・・・守られるだけじゃ駄目・・・

セシルはそう思った。そして目の前の集団を警戒することに神経を注いだ。

「女官長殿！」

扉を叩くこともせずに駆けこんできたコンラートに女官長は驚いた。

「何事です?!」

「先程、陛下の命を受けたという仕立て屋がセシル様のところへ来た。」

何か聞いてらっしゃいますか?」

コンラートの言葉に女官長は狼狽した。

「そ、そのような話は聞いておりません！」

「なんですって?!」

詰め寄るコンラートに女官長はハツとしたように言った。

「・・・まさか、あの者たちが・・・」

「あの者達ってなんですか?!」

「先程、ダニエラ様のところへ来たという仕立て屋が参りました。その者たちをダニエラ様の元に送った後、私は急に呼び出されてその場を離れました。もしかしたらあの者たちが・・・」

そこまで聞いてコンラートは踵返し走り出した。

「女官長！後宮の警護兵たちをセシル様の元へ行くよう手配を！
私は先に戻ります！」

「分かりました！」

走り去るコンラートの背に叫ぶように応えると女官長も警護兵長の元へ走り出す。

どうか、ご無事で！

全力で走る二人の胸には同じ想いがあった。

部屋ではセシルが一定の距離を保って、仕立て屋と対峙していた。
侍女室への扉の近くの椅子に浅く座り、いつでも立ちあがれるよう
にも

してある。

ニコラはセシルは危険に疎いと嘆くが、セシルは危険に対する対処を
知らないわけではない。ただ、使う機会がなかっただけだ。

「・・・セシル様、そうふうに離れた場所にいらっしゃらず、どうか
こちらへ」

仕立て屋が促す。

「いいえ。ここでいいわ」

セシルが其れを受け流す。仕立て屋が部屋に入ってからこの攻防は既に

何度も行っていた。

ニコラを元とする3人の侍女はセシルの横に立ち、やはり集団を警戒していた。そして、3人共いざというときは己が盾になろうと心に決めていた。

アルトウル達は侍女室とセシルの自室を繋ぐ扉を少しだけ開き、中を窺っていた。

「なあ、確かに怪しいが、昼間の後宮で堂々と仕掛けてくるだろうか？」

エアハルトは小声でアルトウルに問う。

「そう思うのも分かるが、そこを逆手に取るってことも考えられるだろう？」

アルトウルの言葉にそうかも知れないと思ったエアハルトは気を引き締めた。

それぞれが相手の出方を窺っていた中、突然扉が開け放たれた。

「セシル様！御逃げください！」

コンラートの叫びを受けてセシルは侍女室へと走り出す。

「何の真似だ?!」

仕立て屋が叫ぶ。

「それはこちらの台詞だ！お前ら、陛下の命など受けていないだろう！！」

コンラートが叫びながら、腰に帯刀している剣に手を掛けた。

「くそ！何が甘ちゃん揃いで簡単に騙せるだ！もうバレたじゃねえか！」

集団は隠し持っていた武器を取りだし、侍女室に走るセシルを追いかけた。

「セシル様！お早く！」

侍女室の扉を開け、エアハルトが叫ぶ。そう遠い距離では無いはずなのに

やけに遠く感じながらセシルは懸命に走った。

後に続いていたニコラ達がセシルを押しこめるようにして部屋へと入る。

入れ替わりでアルトゥルとエアハルトが部屋を飛び出し、扉を閉めた。

「ぐはあっ！」

扉の向こうで聞こえた声にセシルは驚愕する。

「アルトウル?!どうしたの?!」

扉に縋りつき叫ぶ。その声にアルトウルは力強く答えた。

「剣先が掠っただけです!大事ありません!」

その時、廊下側の扉から数人の騎士と共に女官長が駆けこんできた。

「セシル様!大事ありませんか?!」

「女官長・・・大丈夫、怪我はしてないわ」

その言葉に女官長と騎士達に安堵の表情が浮かんだ。

騎士はセシルの部屋にも来たらしく、扉の向こうの喧騒は一層激しくなった。

それを感じながら、セシルはアルトウルの身を案じていた。

第27話

「セシル様、賊はすべて捕らえました。もう大丈夫です」

コンラートの声を聞いてセシルは侍女室を飛び出した。

「アルトウル！」

「・・・セシル様、・・・御怪我はございませんか？」

「怪我をしたのはお前でしょ！」

部屋を飛び出したセシルの目に飛び込んできたのは左腕を負傷し、応急手当を受けるアルトウルの姿だった。

「本当に掠り傷ですので大丈夫です。利き手でもありませんし、すぐに警護に復帰出来ます」

アルトウルがそう言うときセシルの瞳から涙がこぼれた。

「その程度で本当に良かったわ・・・大怪我をしたんじゃないかって私、心配してたのよ・・・」

「セシル様・・・」

アルトウルはその涙を茫然と見つめた。

俺のために泣いてくださるのか・・・

アルトゥルはその涙を見つめ、コンラートの言葉を思い出す。

お前にも分かる時がくる

ああ、そうか、そういうことなのかとアルトゥルは思った。

怪我をした自分を非難することも役立たずと罵ることもせず、
怪我の心配をし、大怪我でなくてよかったと泣く。

それができる彼女は確かに守るべき人、守る価値のある人だ。

アルトゥルの心にセシルに対する忠誠が芽生え始めたいた。

「貴様ら、誰に雇われてこんな真似をした!」

コンラートの声が部屋に響きわたる。賊たちは俯いたまま、
何も応えない。

「ダニエラ様だろ?」

コンラートが問う。それでも賊は何も言わない。

「答えない気か? 貴様らはダニエラ様に呼ばれたと言って、

後宮に入り込んだんだろ？それが何よりの証拠になるのだ。
庇いたてせず、答えたらどうだ？」

コンラートは頭からダニエラが犯人だと決めているようだった。
その様子を見ていたニコラが徐に口を開く。

「お待ちください。ダニエラ様の単独というのは考えにくいかと」

ニコラの言葉にコンラートは一旦、口を噤んだ。

「こやつらの雇い主がダニエラ様だったなら、自らこやつらを手引き
するとは思えません。自分が呼んだ仕立て屋が事件を起こせば、
自分が疑われるのは当たり前ですからね」

ニコラの話に少し冷静になったコンラートも確かにそうだと思いつ
る。

「仮に、ダニエラ様が雇い主で自ら手引きしたとしても、それを隠
そう

するはずですよ。ですが、こやつらは隠そうとはしなかった。寧ろ、
晒しているようにも見えますね」

「それはつまり？」

エアハルトが問いかける。ニコラはちらりとエアハルトを見ると再び
話し始めた。

「ダニエラ様は事の詳細を知らなかったのではないですかね？
誰かに仕立て屋を寄こすから逢ってやれとでも言われて、
仕立て屋に扮したこやつらを迎え入れた。ダニエラ様の前では

こやつらはきちんと仕立て屋のふりをしたんでしょう。
そして、ダニエラ様は疑うことなく、こやつらを自室から送りだした」

誰も口を挟む者はいなかった。ニコラの言っていることは推測に過ぎない。

それは分かっているのに、その語り口には自信が溢れ、説得力があった。

「ダニエラ様の部屋を出たこやつらはセシル様の御命を狙って此処へ来た。

すぐにバレるのも計算の内、セシル様の御命を本気で奪う気はなかった

やもしれませんね。こやつらがセシル様を狙ったという事実とダニエラ

様の元へ来た仕立て屋だという情報を流すのが目的。それでダニエラ様

が失脚すれば大成功。・・・そんなところでしょね」

ニコラは語り終わると溜息をついた。この推測が正しいならセシルは巻き込まれただけの可能性があった。ダニエラの失脚を狙う何者かに手駒の一つに使われた可能性が・・・。

セシルは命を狙われてもおかしくない立場。それを利用されたのだ。

「一体、誰がそんなこと・・・」

セシルが呟いた時だった。

「この件はこちらが引き取る」

エルンストがそう言いながら扉の向こうから現れた。彼はセシルの前にくると深々と頭を下げた。

「申し訳ございません、セシル様。後宮の警備を改め、後宮に出入りする商人達には厳しく制限を設け、以後このようなことが無いように努めて参りますので、どうか、お許しください」

そう言いながら、エルンストは今朝の自分の判断の甘さを痛感していた。

後宮の警備を改めるより、セシルの自身の警護を固める方が早いと判断

した自分。速さを優先し、するべき対処を後回しにした結果がコレだ。

エルンストは今朝の自分を殴り飛ばしたい気分だった。

「いいのよ。誰も、こんなに早く私が狙われるなんて思わないわ」

セシルの言葉にエルンストは弾かれた様に頭を上げた。

「それに、あなたと陛下が私に付けてくれたこの者たちは私をきちんと

守ってくれたわ。急だったのにこれだけの人材を与えてくれて有難う」

セシルはそう言ってエルンストに頭を下げた。その姿にエルンストは思う。

ああ、この方は本当に素晴らしい方だ・・・

今なら、エルンストはエドアルドがセシルに惹かれる理由が分かるような

気がした。そして、今朝、セシルに抱いた期待が確信に変わる。

この方なら陛下の支えになってくださる・・・

「セシル様、どんな手を使ってもこやつらの口を割り、裏に居る人物を

つきとめて見せます」

エルンストは決意も新たにそういうと賊を連れて部屋を後にした。

第28話

「ふざけた真似を!!」

エルンストからセシルが襲われたとの報告を受け、エドアルドが叫ぶ。

「陛下! 落ち着いてください!」

エルンストが必死に宥める。エドアルドは荒い呼吸のまま、執務机の椅子に座った。

「・・・事の詳細は? 掴んだんだろうな?」

未だ興奮しているエドアルドを気遣いながらエルンストが口を開く。

「はい。あいつらは命の保証と引き換えにすぐに口を割りましたので」

エルンストはどんな手を使っても、それこそ拷問も視野に入れて情報を

聞き出そうとしていた。だが、蓋を開けてみると賊は己の持っている情報と引き換えに命だけは助けてくれと自ら懇願してきた。

寄せ集めのあの集団には雇い主への忠義などなかったのだ。

「で?・・・誰の仕業だ?」

エドアルドは何となく察していながらも先を促した。

「・・・ゲオルク殿下が仕組み、ダニエラ様が手引きをしたようですね。

あの二人はまだ続いていたようですね。尤も今回の件、ダニエラ様は

詳細をご存じなかったようです。・・・あの方は捨て駒にされたよう

ですね」

エルンストの言葉にエドアルドはやはりそうかと思った。

ゲオルクとダニエラは恋仲である。少なくともダニエラの方はそう思っている。

そのことをエドアルドは知っていた。知っていながらダニエラを後宮においていたのだ。

それはゲオルクの動きを探るため、ダニエラを自分の近くにおいて泳がせる

ことが目的だった。

危険が伴うことも分かっていたが、寝首を搔かれるほど馬鹿ではない。

ダニエラもまた、エドアルドの動きを探るため、後宮にいた。それを悟られぬ

ようにうまく側室として振る舞っていた。

今日、セシルに嫌みを言ったのも側室としての芝居の一環だった。

今までずっと騙し合いを続けていたがどうやらそれは終わったようだ。

「自分に惚れている女ですらそういう風に使うのか、本当に救いようがないな」

エドアルドは吐き捨てるようにそう言った。

「今回の件は用済みのダニエラ様を消すことが主な目的だったようです。」

あいつらはセシル様の部屋で騒ぎを起こせ、無理に殺さなくていいと

言われていたと、それが証拠にそれが出来る距離に居たにも関わらず、

セシル様に傷一つ付けておりません」

それを聞いてエドアルドの表情が変わる。

「まさか・・・」

エルンストが小さく頷く。

「ゲオルク殿下はセシル様を殺すつもりはなかった。騒ぎを起こし、恐怖を植え付け、陛下から引き離そうとした」

「・・・俺への嫌がらせか？」

エドアルドは頭を抱えて頂垂れた。

馬鹿だ馬鹿だと常々思っていたがここまでとはエドアルドも思っていなかった。

愛する者を見つけた者に打撃を与える方法はその愛する者から去られる

ことだとゲオルクは考えたのだろう。

だから、王宮でセシルに接触したのだ。エドアルドは来なければ自らセシルを汚し、セシルにエドアルドの側には居られないと思わせるつもりだったのだろう。

それが失敗したから次の手を打った。自分を想っているダニエラを利用し、セシルを手の者に襲わせ、恐怖よってエドアルドから引き離そうとした。

どこの誰が嫌がらせのためにそこまでするというのか……。

ゲオルクは思っている以上に短絡的で浅はかだとエドアルドは痛感した。

「自分で俺を殺しにくる度胸もないくせに、よくもやってくれたもんだな」

エドアルドは顔を上げ、そう呟いた。その瞳に宿る憎しみの炎にエルススト

は目を逸らす。だが、小さくため息をつく、すぐにエドアルドに向き直った。

もう一つ、告げねばならぬ事実がある。

「陛下、あいつらの雇い主ですが、ゲオルク殿下ではありません」

エドアルドは視線だけをエルンストに向ける。その瞳には黒い憎しみの炎がまだ満ちている。

「あいつらはヘルガ様に集められたと言っております」

「何？」

「ヘルガ様から殿下の役に立ってくれと大金を掴まされたと」

「親子そろって忌々しい！」

ゴッー！

そこまで聞いて、エドアルドが机を殴りつける。

「陛下！お止めください！」

机を何度も殴るエドアルドをエルンストが必死に止める。我に返ったエドアルド

は荒い呼吸を繰り返しつつ、頭を働かせていた。

「・・・エルンスト、この件はテオの耳にも入っているか？」

「テオ？ああ、テオバルト殿下もご存じです」

エルンストの返答にエドアルドはニヤッと笑った。

「そうか、では、テオに伝言を頼めるか？」

その笑みがあまりに冷酷なものであったので、エルンストは身構えた。

「……どのような伝言でございましょう？」

そんなエルンストの態度にエドアルドはフツと笑った。

「舞台の開演を早めると、それから出演者の追加を申し付けると」

「は？それはどういう……」

「伝えれば、テオには分かる」

エルンストに暗号めいた言葉を託すとエドアルドはもう、何も言わなかった。

第29話

「開演を早めて、出演者を追加しろ？」

突然、自分の執務室を訪れたエルンストに告げられた言葉をテオバルトは聞き返した。

「はい、そう伝えれば、殿下にはお分かりになると陛下はおっしゃいました」

戸惑いを隠しきれずにそう言うエルンストがテオバルトはなんだか可笑しかった。

「確かに、僕はそれだけで分かるけどねえ・・・君は訳分かんないでしょ？」

クスツと笑ってそう言われてエルンストは少し、顔を顰める。

「準備が整ったら君にもちゃんと教えてあげるよ。多分、君にも手伝って

もらうことになるだろうし」

「はあ」

エルンストはエドアルドとテオバルトが何か計画していることは察していた。

一体、何をなさるつもりなのだ？

エルンストは思案顔で黙り込んだ。その様子を気にするでもなくテオバルト

は独り言のように呟いた。

「本当にゲオルク兄さんは・・・もう、形容する言葉も思いつかないよ」

あきれ果ててもものも言えないっていうのはこういうことかとテオバルトは思った。

「・・・殿下」

心配そうに呼ぶエルンストにテオバルトは苦笑いを浮かべた。

「気にしないでよ、だたの独り言だから」

エルンストは何も言えず、部屋を出ることにした。

「それでは、私は失礼致します」

一礼し、部屋を出て行くこととするエルンストにテオバルトが声を掛ける。

「エルンスト、ちょっとだけ教えてあげようか？」

その言葉にエルンストは足を止め振り返った。

「僕が準備を進めてる舞台の主役はゲオルク兄さんだよ」

エルンストはその言葉に息を呑んだ。

「出演者の追加ってのはその舞台にヘルガさんも出させてこと」

そこまで言うってオバルトはクスツと笑った。

「あの親子、とうとう本気で兄さんを怒らせちゃったみたいだね」

エルンストは聞かなければよかったと思った。何か計画しているのだろうとは思っていたがどうやらそれは大事らしい。

ゲオルク殿下とヘルガ様をどうなさるおつもりなのだ？

告げられた言葉の衝撃に立ちすくむエルンストにオバルトは言う。

「これ以上はまだ内緒。ほら、もう行きなよ」

オバルトの声に衝撃から立ち直ったエルンストはもう一度、オバルト

に頭を下げた。

「失礼いたします」

そう言って足早にオバルトの執務室から出て行った。

「エルンストでもあんなに吃驚することあるんだ」

テオバルトは意外なものが見れたと小さく笑った。

「さて、出演者が追加ってことはちょっとだけ修正が必要かな？」

テオバルトは面倒そうに呟いた。

面倒だが仕方が無い。大好きなエドアルドのためならそれも苦にならない。

テオバルトは周りに悟らせないように巧妙にそれを隠しているがエドアルドが子供のころから大好きなのだ。

エドアルド本人もそれを気付いていないだろう、わざと気付かれないうようにしている。

王になるべく育てられ、お前たちは自分より下だという態度で兄弟、姉妹に接していたエドアルド。

他の兄弟、妹は彼のその態度を不服に思っていたが、姉たちとテオバルトは違った。

姉たちはエドアルドの態度を人の上に立つものとして当然と受け止め、

テオバルトは幼くして、王になるものとして威厳を湛えるエドアルドの姿に尊敬の念を抱いていた。

テオバルトは現実主義だと言われるが本当はそうでもない。

彼は周りにそう思わせることによって、自分を後継者争いから自ら外した。

エドアルドに心酔しきっているテオバルトは彼以外に王に相応しいものは居ないと思ったからだ。

でも、それを誰にも悟らせはしない。もちろん、エドアルドにも・

テオバルトが自分のためにわざとこんな真似をしていると知ったら、エドアルドは怒るだろう。そして、悲しむのだ。すまないと泣くだろう。

テオバルトはエドアルドが冷酷な振りをしているても本当は誰よりも優しい心を持っていることを知っている。

幼いころ、エドアルドは兄弟たちに自分の方が上だと示した後、顔を曇らせることがあった。その顔を見つけた時、テオバルトは思った。

兄さんはホントは皆と仲良くしたいんだ……

それからテオバルトは変わった。

後継者争いから自分が外れるようにわざと王位に興味が無い、臣下として生きる方が
いいと周りに吹聴して回った。

エドアルドに対しても軽口を叩き、飄々とした態度で接し、エドアルドの態度を
気にしていないように振る舞った。実際、その裏にある後悔を見抜いてからは
エドアルドの態度は気にならなかった。

そうしてテオバルトは兄弟たちの中で唯一、エドアルドの傍らにいられる存在になった。

臣下としてエドアルドを助けている兄弟は他にもいるが、皆、王と臣下という
関係以上の繋がりが無くなってしまっている。

テオバルトのようにエドアルドから愛称で呼ばれるものは誰も居ない。

「兄さんのためなら喜んで悪者にも変わり者にもなるよ」

テオバルトは目を閉じ、呟いた。

・・・命だって惜しくないよ

心の中でそう呟いて、テオバルトはゲオルク主演舞台の構想を練り始めた。

第30話

「ねえ、私も何か・・・」

「セシル様は座っていてください」

言葉を言い終わる前にニコラから遮られ、セシルは仕方なく側に合った椅子に座った。

セシル達は今、引越しに追われている。騒ぎのあった部屋で暮らして頂く訳には
いかないと、空いていた別の部屋に移ることになったのだ。

今度の部屋は後宮の入口から近く、女官長の部屋からも近く、警護団詰め所からも
近い。以前の部屋より警護のしやすいという理由で選ばれた部屋だ。

「まあ大変、もう、こんな時間だわ！モニカさん、厨房へ」

ニコラが時計を見て、叫ぶ。それを受けてモニカが時計に目をやると既に夕食の
時間が迫っていた。

「はい！行って参ります」

モニカが早口で答え、部屋を出ようとする。その背にニコラが声を掛けた。

「モニカさん、焦らず、ゆっくり頼みますよ」

その裏に隠された意味を察し、モニカは立ち止り、深呼吸した。

「そうですね。焦って御食事に何かあつてはいけませんから、ゆっくり持つて

まいります。セシル様、少々お待ちくださいませし」

モニカがセシルに向かって一礼する。

「いつてらっしゃい。ニコラの言うとおり、焦らなくていいわよ？
部屋の片づけもまだ途中だし、あんまりお腹もすいてないし」

セシルが微笑んでそう言った。モニカも微笑みを返す。

「はい・・・行つて参ります」

部屋を出たモニカはニコラに感謝していた。少々気が急いていた自分を落ち着かせてくれたのは有難かった。

立て続けに事件が起きたのだ。自分が役目を疎かにしていいわけがない。

モニカはグツと胸の前で組んだ手に力を込めた。

「ダニエラ様は後宮を出されるそうですよ」

厨房から戻ってきたモニカが食事の準備をしながらそう言った。その言葉に
セシルは驚いた。

「モニカ、何でそれを知ってるの？」

セシルの問いにモニカは嫌なものでも見たかのように溜息を付きながら答えた。

「厨房で他の侍女たちが話しておりました。皆、耳が早いようで何処から聞いたか
知りませんが、ダニエラ様の今後まで話して居りました」

「今後？」

小首を傾げるセシルにモニカは聞こえてきた話で真実が分からないと前置きした
上で話し始めた。

「今回の件、ダニエラ様は知らずに片棒を担がされた点を考慮され、罪人として

捕らえられはしないそうです。ただ、後宮に置いておく訳にはいかないの

で 実家に帰されることになったらいいのですが、ご実家が受け入れを拒否された

と、行き場のないダニエラ様は修道院へ送られるそうですよ」

モニカの聞いてきた話しは概ね真実だろうとセシルは思った。

ダニエラが罪人として捕らえられないのは良かったとは思うが、実家から受け入れを拒否されたというのは可哀想な気がした。

貴族である彼女の家族は彼女より家の体面を重視したのだろう。ダニエラは家の恥とされ、その存在を抹消されるのだろう。

修道院へ送られるということはダニエラは華やかな世界に別れを告げ、自給自足

の慎ましく、厳しい世界へ行くことになる。今まで働いたこともない彼女がいきなりそんな生活に叩きこまれることは投獄に等しい気がした。

「さあ、御食事の準備が出来ましたよ」

モニカの話しにセシルが何も言わず考え込んでいることを察して、ニコラが少し大きな声で声を掛けた。

「・・・分かったわ」

セシルはまだ暗い気持ちから抜け出せず、食欲もなかったが、皆に心配を掛けまいと無理やり食事を口に運んだ。だが、どの料理も砂でも食べているかのように味がしなかった。

夕食を終え、セシルたちが寛いでいると廊下からエアハルトの声が聞こえた。

「セシル様、陛下の御越しです」

その声にセシルの表情が少し緩む。

「ニコラ」

セシルに促されて、ニコラがエドアルドを迎え入れる。

「陛下、ようこそお越しくださいました」

「・・・ああ」

短く答えて、エドアルドが室内に足を踏み入れる。

エドアルドは俯いてセシルを見ようとしていないように感じた。そのことに

気づき、セシルは少し、胸が痛んだが気にしないようにしてエドアルドに

笑顔で言った。

「お待ちしております」

「・・・ああ」

エドアルドは俯いたまま顔を上げようとしなかった。

第31話

「・・・下がれ」

エドアルドはニコラ達を下がらせた。

だが、二人きりになってもエドアルドは相変わらず俯いたままで、その場から動こうともしない。

「・・・エドアルド？」

セシルが呼びかけながら、エドアルドに歩み寄ろうとした時だった。

「・・・すまない」

エドアルドがこの部屋に初めて口を開いた。その言葉が謝罪の言葉だったのだ。

セシルは慌ててこう言った。

「エドアルド、貴方が謝ることなんて何もございません！貴方は私にコンラート

達を与えて下さった。ちゃんと守ろうとして下さいました。それにゲオルク殿

下からも守って下さった」

「それでも危険な目に合わせた」

セシルがそう言ってもエドアルドの態度は変わらなかった。

セシルはせつなかった。エドアルドの顔がちゃんと見たいと思った。

「エドアルド！」

名を呼び、駆け寄ろうとするセシルをエドアルドは片手を上げて制止した。

「今の俺はお前に触れる資格も、お前に触れてもらう資格も……無い」

「え？」

エドアルドは自分の手のひらを見つめながら苦しげに話し始める。

「俺は今、ゲオルクが憎くて堪らない。それこそ殺してやりたいくらい憎い。」

俺にちまちま嫌がらせをするだけならまだしも、お前を巻き込んだんだから

だ。」

見つめていた手のひらで顔を覆い、エドアルドが話しを続ける。

「こんな真っ黒な俺は真っ白なお前に触れる資格なんて無い」

そう言つとエドアルドは崩れ落ちるように床に膝をついた。

「エドアルド！」

セシルは叫ぶようにその名を呼びながら今度こそエドアルドに駆け寄った。

そして、自らも床に膝をつき、エドアルドの肩を掴み、叫んだ。

「貴方も、周りの皆も、私のことを真っ白だって言うけど本当はそんなこと

ないのよ！」

「・・・え？」

セシルの言葉にエドアルドが顔を覆っていた手を外し、その視線をセシルに向けた。

「確かに、私は誰かを殺したいほど憎んだことも、顔を見たくないほど嫌った

こともないわ。だけど・・・妬んだり、羨んだりしたことくらいあるのよ！」

セシルはエドアルドの肩から手を離し、その手を床についた。

これから話すことは今まで誰にも話したことはない。ニコラにだって話していない。

だが、エドアルドには話さなければいけない気がした。知ってもらわねばならない気がした。

セシルは意を決して話し始めた。

「私はお兄様がずっと羨ましくて、妬ましかったわ。だって、お母

様に一人だけ

愛されてたんだもん」

エドアルドは黙ってセシルの告白に耳を傾けた。全て聞き終わるまで口を挟むつもりは無かった。

「物心ついた頃からお母様に抱きしめてもらった記憶なんてないわ。お母様はいつも

私に、どうして自分からこんな地味な子が生まれたんだろうって言ってた」

母の話しをすることはセシルに痛みを与える。それでもセシルは話すこと続ける。

「でも、お兄様のことは流石、自分の息子だっていつも褒めてた。お前は自分の

宝物だって言ってよく抱きしめてた・・・」

それは見せつけるようにセシルの目の前で行われていた行為だった。

「どうして？どうして？っていつも思ってた。私だってお母様の娘なのになんて」

セシルの瞳から涙が溢れる。

「私はどんなに努力しても愛されなかったのに、無条件で愛されるお兄様が

羨ましかった・・・妬んでもいたわ。今でも、それは変わらないの・・・」

ついにセシルは両手で顔を覆い泣き始めた。エドアルドは堪らずその小さな体を抱きしめる。

「・・・私のこと幻滅した？嫌いになる？」

腕の中で怯えたように呟くセシルにエドアルドは抱きしめる腕に力を込める。

「そんなことあるわけないだろ。寧ろ、もっと好きになったよ」

そう告げながら、エドアルドは自分を恥じていた。セシルのことをまるで聖女の

ように崇めてしまっていた自分のことを・・・

セシルだって人間なのだから、人を羨んだり、妬んだりするに決まっているのに

勝手にそんなことはしないと決めつけてしまった。

真っ白だ、真っ直ぐだと褒め称えられる度、セシルは自分の心に蓋をし続けてきたのだろう。

そう思うとせつなさと同時に愛しさが湧きあがってくる。

いままで直隠ひたかくしにしてきた胸の内を自分に晒してくれたセシル。

それは自分に心を許してくれた証拠だ。

エドアルドにとってそれは喜ばしいことであって嫌う理由になるわけがない。

「・・・こんな私でも愛してくれる？」

セシルはエドアルドを見上げてそう問いかけた。その瞳をしっかりと見つめて

エドアルドは頷いた。

「当たり前だ。俺はどんなお前でも愛すると誓う。お前は？こんな俺でも愛してくれるか？」

セシルは答えるかわりにそつとエドアルドの唇に口付けをした。

その口付けを受けてエドアルドは胸の中に熱い想いに抗うことが出来なくなった。

「セシル！」

エドアルドはセシルの唇に噛みつくような激しい口付けを返す。そして、口付けをしたまま、セシルの腰を抱いて立ちあがらせると、そのまま抱き上げた。

エドアルドの足はベットへと向かっていた。セシルは与えられる激しい口付けに
翻弄されながらもエドアルドが何を求めているか悟った。

ベットの傍らまで来た時、エドアルドが唇を一度離れた。

「・・・いいか？」

何かと問わなくてもセシルには分かった。少し怖かったが、セシルもエドアルドと同じ気持ちだった。

「・・・はい」

セシルが小さな声で答えるとエドアルドはセシルをベットに横たえた。

第32話

「おはよう」

朝、目が覚めたセシルの視界に飛び込んで来たのは優しい顔で笑うエドアルドだった。

「・・・おはようございます」

セシルは起きたばかりですっきりしない頭のまま、そう挨拶を返したがすぐにハツとなつてシートにもぐりこんだ。その様子にエドアルドがクスクスと笑っている。

「そんなに恥ずかしがることはないと思うけどな」

エドアルドにそう言われてもセシルはシートから顔を出せずにいる。やはり、どうしても気恥かしいのだ。

昨夜、二人は初めて体を交えた。

初めての行為はセシルにとって苦痛を伴うものであったが、セシルを気遣い、終始ゆっくりと事を進めてくれたエドアルドの優しさとエドアルドと一つになることの幸福感でそれを耐えた。

「いつまでもそうしてないで、ちゃんと顔をみせてくれ」

言いながらエドアルドがシーツをクイツと引っ張るがセシルは顔を
出そう

としない。

「・・・仕方ないな。それじゃ、俺はもう行くからいつまでもそう
してろ」

「待って！」

呆れたようにそう言われてセシルは慌ててシーツから顔を出した。
そんな

セシルをエドアルドはサッと抱きしめ、セシルが再びシーツに潜り
込めな
いようにしてしまった。

「嘘だよ。お前の顔を見ずに誰が行くもんか」

エドアルドは楽しそうに呟いたが腕の中のセシルはどこか不満げだ。

「また意地悪なことして・・・」

「あんまりすると嫌いになるんだっけ？」

腕の中でセシルが呟くのを聞いたエドアルドはセシルの瞳を見つめて
聞いた。

「・・・なりません」

そつばを向きながらセシルがそう答えるとエドアルドがセシルの頬に
手を寄せ、そつと自分の方を向かせた。

「そついうのは目を見て言え。俺を嫌いになつたりしないんだな？」

「ならないって言つてるでしょ！もう、知らない！」

セシルはそついうとエドアルドを押しつけ、背を向けてしまった。

「お前は本当に拗ねやすいな。さて、姫君の機嫌はどうやったら直るの

かな？」

エドアルドが楽しげにそつ言いながらセシルにそつと寄り添った。

「あれか、やつぱり口付けか？」

「何度も同じ手が通用すると思つてるの？」

これまで何度か口付けで誤魔化された感のあるセシルは背を向けたまま

言い返す。

「なんだよ、させてくれないのか？だったら別の手考えないとなあ」

エドアルドがセシルから体を離しながらそつ言った。セシルはそれがなんだか

寂しくて、ついエドアルドの方を向いてしまった。

「何だ？やつぱり口付けされたいのか？」

エドアルドにニヤツと笑われて、セシルは少し、顔を顰めた。

「・・・そうじゃないもん」

「ふん。じゃあ、してやらない」

そう言っただけで今度はエドアルドがセシルに背を向けようとした。セシルは

ずっとその腕に触れてエドアルドを止めた。

「・・・」

「フツ、可愛いことするな、お前」

何も言えずにエドアルドの瞳を見つめるセシルにエドアルドはそっと口付けをした。

第33話

「セシル、近々母上に逢う機会を設けようと思うんだが」

あの後、暫く二人はベットでじゃれ合って過ごしていたのだが、そろそろ

エドアルドが王宮に戻る時間が迫っていた。今、二人はニコラ達に手伝っ

て貰いながら服装を整えているところである。

「母上つて王太后様？」

「他に誰が居るんだよ？まあ、母上は俺が決めた人に文句を言うような

方じゃないが一度、逢っておいた方がいいだろ」

エドアルドの言葉にセシルは嬉しさと同時に不安を覚えた。

『俺が決めた人』という言葉は嬉しかったがその言葉はつまりは『王妃となる人』

という意味合いも持つ。

昨日まで漠然とあつた王妃になる可能性が急に現実味を帯びたようにセシルは微かな不安を覚えたのだ。

「セシル？」

返事がないのを不審に思ったのかエドアルドが問いかける。

「・・・えっ？あ、はい。分かりました」

セシルは胸に芽生えた微かな不安を封じ込めてにつこり笑って見せた。

「・・・無理にとは言わないぞ？」

服を整え終わったエドアルドがセシルに近づき髪を撫でながらそう言った。

「え？」

言っていることの意味が分からず、セシルはただ、エドアルドを見上げた。

「まだ母上に逢うこと、というより王妃になる覚悟は出来て無いんじゃないかな

いか？」

セシルは思わず、エドアルドを凝視した。

「凶星か？」

エドアルドはそう言って困ったように笑った。その顔を見ながらセシルはどうして分かったんだろうと思った。

今までセシルの笑顔の裏側にある感情を見抜ける人間はニコラしかいなかった。

そのニコラも長い間一緒に居たからこそそれが分かるようになっただけで、最初は分からなかった。

出会って一年、共に過ごすようになって数日しか経っていないのに、どうして

エドアルドにはすぐに解ってしまったのだろう。

「覚悟が出来るまで待つと言ったのは嘘じゃない。お前がまだ早いと思うなら

無理にとは言わないさ」

エドアルドはさらにそう言っただけでセシルの気持ちを尊重しようとしてくれていた。

その様子にセシルはこの人は本当に優しい人だと思った。

本当ならすぐにでも自分を王妃候補として発表したいのかもしれない。

王妃候補は戴冠式を迎えていないことから候補と呼ばれるだけで、実質王妃と

変わらない扱いを受ける。王妃候補となれば王宮の一室に住まい、王妃教育を

受け、夜会や舞踏会、さらには来賓との謁見までエドアルドの隣に同席することになる。

それがセシルにとって大きな負担になることはエドアルドも分かっているのだ

ろう。だから、セシル自身がそれを受け入れる覚悟を求め、それが

出来るまで
待つと言ってくれているのだろう。

今まで、父やニコラのほかにそこまで自分のことを考えてくれる人が居ただろうかとセシルは思う。そう思った時、セシルの胸にある想いが芽生えた。

この人の優しさに、愛に応えたい

セシルはその想いに従うことにした。共に過ごすようになって日が浅く、時期尚早と思われるかもしれないがセシルはエドアルドとずっと一緒に居たいと思った。

「ん？どうした？」

セシルの表情が変わったことにエドアルドは気が付いた。セシルはもう一度にっこりと笑って見せた。

「大丈夫、私も王太后様にお会いしたいわ。」

その笑顔の裏にはもう、不安がないことにエドアルドは驚いた。そして、セシルに微笑みかける。

「そうか、じゃあ母上の都合を聞いてその内連絡するからな」

「ええ」

セシルはエドアルドの妻に王妃になる覚悟を決めた。そのことはエドアルドにも分かった。だが、二人ともそれを口に出そうとはしなかった。言葉に
しなくても分かりあえるそんな気がしていた。

「ではな、セシル。・・・また今夜な」

エドアルドはセシルから一歩離れてそう言った。

「はい、お待ちしております」

セシルはそう言って頭を下げた。

「・・・セシル」

エドアルドが少し不満そうに名を呼ぶ。セシルが顔を上げるとエドアルドは表情にも不満を滲ませている。

「どうしたの？」

訳が分からないというようにセシルが問いかけるとエドアルドはセシルに顔を
背けながら呟いた。

「昨日の約束は？」

昨日の約束と言う言葉にセシルは最初ピンとこなかったが、思い至るとクスッと笑った。

「ふふふ、いつてらっしゃい、エドアルド」

セシルから欲しかった言葉を聞いて、エドアルドは満足そうに頷くと部屋を後にした。

第34話

「お久し振りです。母上」

エドアルドは後宮を出たその足で王太后の元へ足を運んだ。

「あら、陛下。お久し振り」

クラリッサ王太后はエドアルドの突然の訪問を笑顔で受け入れた。

クラリッサはエドアルドが王に即位した折、離宮に移り住んだ。エドアルドは王宮に

留まるよう勧めたが、クラリッサはこれからは貴方の時代だからと譲らなかった。

今、クラリッサは離宮で数人の使用人と静かに暮らしている。

「どうしたの？急に来るなんて」

クラリッサはそう問いかけたがその顔は訳知り顔に見えた。

「なんてね、本当は分かっているの？お前の可愛い人のことでしょう？」

そう言っつてクスッと笑うクラリッサにエドアルドは目を丸くした。

「話には聞いているのよ？ついに国王陛下の寵愛を受ける者が現れたってね」

楽しそうにそう言いながらクスクスと笑うクラリッサを見ながらエドアルドは
噂というのは本当に早く遠くまで届くものだと思っていた。共に過
ごすように
なつて数日しか経っていないのに、もう母の耳にまで届いてしまっ
ている。

逆に言えば、それだけここ数日で騒ぎが起こったということであり、
エドアルド
の胸に小さな痛みと大きな憤りも生まれた。

「・・・ええ、まあ、そうです」

エドアルドが照れていると思ったのだろう。少し歯切れの悪いエド
アルドにクラリ
ッサは目を細める。

「ふふふ、逢わせてくれるのかしら？お前の可愛い人に」

「ええ、そのつもりで都合を伺いに参りました」

「私はいつでも大丈夫よ。早く逢ってみたいくらいだわ」

終始楽しそうなクラリッサにエドアルドの胸も安らぐ。父を亡くし
てからの母は
あまり、笑わなくなった。こんなに楽しそうなクラリッサの顔は久
しぶりに見た
ような気がしていた。

「お前が自分で選んだ女だから、何も心配してないわ」

クラリッサがそう言うてくれたのでエドアルドも笑顔でこう答えた。

「ええ、間違つても『傾国の美女』なんて呼ばれる類の女性じゃないですよ」

エドアルドの言葉にクラリッサは目を丸くして問いかける。

「まあ！不器量なの？！」

クラリッサのその反応にエドアルドは溜息をついた。しっかりしているように見えてどこか抜けている母は時々思いもよらぬほうへ話を解釈する癖があるのだ。

「なんでそっちに行くんですか？俺が否定したのは『傾国』の方ですよ」

呆れたようにエドアルドがそう言うつとクラリッサはホツとしたように胸に手を当てて息を吐いた。

「あー吃驚した。まあ、お前が選んだ人なら、母さん不器量でも構わないんだけど」

まだ言うかとエドアルドは思いながら口を開く。

「母上、セシルは不器量じゃないですよ。美女って感じでもないですよけどね」

「それじゃあ、どういう感じなの？」

クラリッサは興味津津といった目でエドアルドを見つめている。エドアルドはその目に一瞬、たじろいだが仕方なさそうに答えた。

「セシルはその、・・・美人っていうより、可愛いつて感じですよ」
言いながらエドアルドは何を言わせるんだと思っていた。セシルのことをそう思っているのは嘘ではないが、実際口に出して言うのは言いようのない恥ずかしさを伴うものとエドアルドは知った。

「ふふふ、照れちゃって可愛いわね」

エドアルドの様子をクラリッサがクスクス笑っている。

「・・・母上」

笑われて不満げなエドアルドの姿にクラリッサは笑うのをやめ、その顔に優しい笑顔を湛えた。

「エドのそんな顔見るのって久しぶりね。セシルさんだったかしら？その子に感謝しなきゃね」

クラリッサの言葉にエドアルドは懐かしい響きを感じた。エドという愛称で呼ばれるの

は久しぶりだったからだ。エドアルドが国王になってからは初めてそう呼ばれたかも知れない。

「お前は王になってから我武者羅がむしゃらに走り続けてきた。その間、宰相とテオバル

ト殿下以外を側に寄りつかせずに安らぐ存在も得ようとはしなかった」

クラリッサのから笑顔が消え、真面目な表情になっていた。エドアルドは黙って母の言葉に耳を傾けた。

「ずっと心配してたの。お前の支えになってくれる人が現れないだろうかっていつも願ってた。・・・やっと現れたと思っていいのよね？」

クラリッサの問いかけにエドアルドは力強く頷いてみせた。

「はい。長い間、心配を掛けてすみませんでした。もう、大丈夫です」

それを聞いてクラリッサが嬉しそうに微笑んだのでエドアルドの顔にも笑みが浮かぶ。

「そのうち、セシルを連れてきます」

「ええ、待ってるわ」

クラリッサが笑顔で請け負ってくれたのでエドアルドは執務に向か

うことにした。

「それじゃ、母上。また来ます」

「エド」

部屋を出ようとしたエドアルドをクラリッサが呼びとめる。その声に足を止め、エドアルドが振り返る。

「お前に何かあったら泣く人がいることを忘れてはだめよ」

クラリッサの思いもよらぬ言葉にエドアルドは目を見開いた。もしかしたらクラリッサは気付いているのかもしれない。エドアルドが何かしようとしていることを……。

「……分かってますよ。母上」

エドアルドはそう言い残して、クラリッサの元を後にした。

第35話

「あ、居た。兄さん」

王宮をエドアルドが歩いているとテオバルトが声を掛けて来た。

「テオ？何だ？」

エドアルドは立ち止り、そう問いかける。エドアルドの問いにテオバルトは肩を竦めた。

「やだな。今、僕が兄さんに声を掛けるってことは用事は一つじゃない」

テオバルトの言葉にエドアルドは身構えた。それはあの事を指しているのだと分かったからだ。

「・・・そうだな。で、首尾は？」

エドアルドの問いかけにテオバルトはニヤリと笑った。

「準備は出来たよ。仕上げはこれからだけだね。んでも、それもそんなに時間掛からないと思うよ？そうだな、明後日の夜には開演出来るんじゃない？」

「明後日？随分早いな」

「他の人に使うんならもつと時間が掛かる手だけど、あの二人なら二日で十分だよ。」

「簡単に釣れるよ」

「・・・テオ、場所を変えるぞ。詳しい話を聞かせろ」

楽しそうに話すテオバルトに少しだけ呆れながらエドアルドが歩き出す。

「いいよ。行こうか」

テオバルトもそれに続いた。その様子は今にも軽快にステップでも踏み出しそうなくらい楽しげだった。

「で、どうするつもりだ？」

エドアルドは場所を自身の執務室に移した。内密な話をするには此処が一番いいからだ。

「今、ゲオルク兄さんの周りにいるのはお金目当ての連中ばかりでしょ？」

テオバルトは作戦を話し始めた。エドアルドは黙ってそれに耳を傾ける。

「奴らはゲオルク兄さんのためじゃなくて、お金のために動くんだ。」

そこをまず突いたんだよ」

テオバルトはゲオルクの手駒たちにヘルガよりも高い報酬で雇うと持ちかけたのだという。金に目が無い連中はたった一晩でゲオルクを裏切り、テオバルトに付いたという。

「・・・あいつは人にも恵まれてないな」

話を聞いてエドアルドは少しだけゲオルクが憐れになった。

「そうだね。でも、お金でしか人を動かせなくなった時点で自業自得だよ」

テオバルトはそれが当然の結果だという顔で言った。エドアルドもそう思わない訳ではないが何だかやり切れない思いも膨らんでいた。

「僕の部下の先導で奴らがゲオルク兄さんを褒めて、煽てて、そそのか唆してくれることになってるんだ」

「・・・唆す？」

エドアルドが不思議そうに問いかけるとテオバルトはニヤリと笑った。

「ゲオルク殿下は王になるべき人だった。今こそ、エドアルド陛下を亡きものにつてね」

それを聞いてエドアルドは思わず頭を抱えた。

「・・・そんな簡単な手に引っ掛かる・・・だろうな、あいつは」

一度は否定しようとしたものの、最近の行動でゲオルクが如何に愚かか身に沁みて分かったエドアルドはそれをする事が出来なかった。そんなエドアルドの様子をテオバルトがニコニコと見つめている。

「・・・俺を襲いに来るように仕向けて、襲ってきたら現場を押さえる気なんだな？」

エドアルドがそう問いかけるとテオバルトの顔から笑みが消えた。そして、真剣な表情が浮かび上がる。

「そうだよ。現場を押さえるのが一番早い。ゲオルク兄さんを迎え撃つのは僕だ。僕と

陛下はよく似てる。陛下しか目に入っていないゲオルク兄さんはパツと見じゃ気付かないと思うよ。だから、明後日は陛下のベットを借りるよ？」

有無を言わせぬ口調でテオバルトはそう言った。エドアルドはその様子に深い溜息をついた。

「・・・本当にお前に危険は無いんだな？」

エドアルドの問いにテオバルトはしつかりと頷く。

「無いよ。ゲオルク兄さんが連れてくる連中は皆こつち側だもん。僕に危険が及ぶ前に

兄さんを取り押さえることになってる」

テオバルトが一度決めたことを曲げない性格であることはエドアルドはよく知っている。

たとえ、危険があつたとしても無いとしか答えないことも分かっている。

「・・・分かつた。任せたぞ」

だから、そう言うことしかエドアルドには出来なかつた。

「うん。任せといてよ」

テオバルトはそう言つてもう一度その顔に笑みを浮かべた。その笑みを見ながら

エドアルドはこの弟には本当に敵わないと思つた。

幼い頃からどんなに邪険にしても自分の側を離れなかつた弟。

他の妹や弟が自分を嫌う中、一人だけ自分を慕い続けてくれた弟。

気付かれたくないと思つていると、分かっているから何も言わないがエドアルド

はテオバルトの気持ちに気付いている。

こいつのことは無くしたくないな

エドアルドもテオバルトに対してそういう気持ちを持っている。それをテオバルト

に告げる気は無いのだけれど・・・。

「そんじゃね、兄さん。明後日はセシルさんとこ行けないからさ、今夜と

明日の夜は存分に二人の時間を楽しんでおいでよ」

「馬鹿！お前は どうしてそういうことを言うんだ！」

「あははは。だって、毎晩でも一緒に居たいでしょ？」

「黙れ！」

「あ、また『黙れ』って言った」

「だっ 五月蠅い！」

結局はこうなってしまう。お互いの胸の内を秘めたまま、他愛ないふざけ合いに終始してしまう。

それでもいいと二人とも思っていた。この時間がずっと続けばそれでいいと思っていた。

明後日の夜に開幕する舞台が無事に終わることをそれぞれの胸の奥
で二人は願って
いた。

第36話

「・・・不思議ね」

セシルは誰に言うでもなく、そう呟いた。

エドアルドを送りだした後、朝食を済ませたセシルは昨日の一件から外に出る気になれず、自室で過ごしていた。

セシルは窓の外を見つめながらここ数日で少しずつだが確実に変わってしまった自身と自分を取り巻く環境に思いを巡らせていた。

そうして呟いた。不思議だと。それは率直な感想だった。

セシルは自分が誰かから愛されることを想像したことが無かった。母や兄がセシルを地味でつまらないという度、セシル自身も自分をそういう人間だと潜在的に思い込んだ。

それが人見知りで引つ込み思案な性格を生み、セシルを異性から遠ざけた。

セシルは口にくそ出したことはないが、こんな自分を愛してくれるものなどいないとまで思っていた。

だが、現れたのだ。愛してくれる人が・・・。

エドアルドが自分をまるで聖女のように思っていることはセシルも感じていた。

だから怖かった。自分の心の奥の兄への嫉妬と羨望を知られることが・・・。

知ってしまえば自分を嫌いになるかもしれないと恐れた。それを感じた時、セシルは気付いた。

自分もエドアルドを愛しているのだと・・・。

意を決して、全てを打ち明けたセシルをエドアルドは受け止めてくれた。そのことはセシルにとって大きな喜びとなった。

だから、エドアルドに身を委ねた。恐れよりも彼と一つになりたいという気持ちが勝った。

誰かから愛され、自分もその人を愛するという、セシルが叶わないと思っていた事が今、現実のものになっている。

愛し愛されることとはこんなに幸せなことだったのかとセシルは思う。

求めて努力しても得られなかった愛がセシルにはある。それはセシルの心に傷を

つけ、今でも苛んでいる。

エドアルドに愛されることでその傷が少しずつ癒えていくような予感がセシルにはあった。

ふと、セシルは父のことを思った。

母と兄と自分の間でずっと心労を掛けていた父。その父に伝えたいと思った。

自分は今、幸せであると……。

「……ニコラ」

「はい？なんでもございましょう？」

ずっと何やら考え込んでいたセシルが不意に自分の名を呼んだのでニコラは
少しだけ不思議に思いながら返事をした。

「明日の夜、王宮で舞踏会があるでしょ？」

「え？ああ、確かそうでしたね」

ニコラは答えながらセシルが何を考えているのか何となくだが察した。

「私、それに出ようと思うの。お父様と面会したいわ。ニコラ、手続きを」

頼めるかしら？」

「分かりました。ですがセシル様、ドレスはどんなさるおつもりですか？」

ニコラの問いにセシルは顔を顰めた。確かに、舞踏会に着て行けるほどの

衣装は持ち合わせていない。

エドアルドがくれたドレスがあるにはあるが、前と同じドレスを着て行く

わけにはいかない場だ。

セシルはそうは思わないのだが、同じドレスばかりを着て行くことが恥

とされる慣習が貴族の間にはあるのだ。

「・・・ドレスは取りあえず手持ちの一番派手な物を着られますか？
私が化粧と髪型で誤魔化します」

ニコラは仕方なくそう進言した。こんなことなら少しでも早く仕立て屋を

呼んでドレスを仕立てればよかったとニコラは思った。

「・・・ええ。そうね」

そう答えてセシルは今まで自分がどれだけ着るものや華やかな世界に無関心だったかを思い知った。

第37話

「・・・またか」

アロイスは王宮から届いた招待状を見つめ呟いた。

ブルックナー家は爵位はあるが力はなく自力で王宮からの招待状は勝ち取れない。

そのブルックナー家に招待状が届くということはセシルが家族との面会申請を出したからだ

アロイスは悟った。

先日の面会の折、別れ際にまた呼んでくれと言ったのは自分だ。何か分かったら

連絡を寄こせとも言った。だからセシルが面会を望むということは何か意味があることだとアロイスは思った。

本当なら王宮の舞踏会など行ける身分でもなければ行きたいと思わない場所だ。

それでも愛する娘のためにアロイスは足を運ぶ決意を固めている。

エディタに知られぬようにせねば・・・

アロイスがそう思っていた時、不意に招待状が横から掠め取られた。驚いてアロ

イスが振り返るとそこにはエディタがアロイスから奪った招待状を

胸のあたりで
ひらひらと動かしながらニヤリと笑っていた。

「お前！」

アロイスがエディタを睨みつけるがエディタはそれを余裕の笑みで受け止める。

「これ、王宮からの舞踏会の招待状じゃない？」

「お前には関係ない！返せ」

アロイスが招待状を取り返そうとエディタに詰め寄るがエディタはひらりと身をかわして笑った。

「あははは。この間は出し抜かれたけど今回はそうはいかないわよ。私も絶対に

舞踏会に行くわ」

「私はセシルに逢いに舞踏会に行くんだ。お前に付いてこられては迷惑だ」

アロイスがそう言い放つとエディタはうんざりしたような顔をした。

「セシルになんか興味無いわよ。貴方が一人で逢えばいいじゃない。その間、私は舞踏会を楽しんでるから」

そうはいかないことがどうして分からないのだろつとアロイスは頭

を抱えた。

アロイスが妻を伴って舞踏会に赴けば、城の者は二人でセシルに逢いに来たと思うに決まっているではないか。二人一緒に面会のための別室に通されるのがオチだ。

だからアロイスは前回の夜会の折、一人で会場に赴いたのだ。夫婦同伴は決まりではなくても暗黙の了解であるあの場に妻帯者である自分が一人でいることの不自然さを承知でそうしたのだ。

エディタは昔から何故かセシルを毛嫌いし、寄りつかせなかった。そのことでセシルが泣く度にアロイスは胸が痛んだ。

そして、先日のセシルの言葉。あの二人から離れられてよかったという言葉にアロイスは打ちのめされていた。

その状況でセシルにエディタを逢わせる気になどなれるはずもなかった。

「俺も行きますよ」

睨みあっていた二人の均衡は突如その一言によって破られた。

「ディレク！」

エディタが嬉しそうにその名を呼ぶとディレクも微笑んで見せた。

「お前も？何のためにだ？」

アロイスの問いかけにディレクは嫌な物でも見るかのような視線をアロ

イスに送った。

「俺の代になったらこの家は常に王宮の夜会や舞踏会に呼ばれるように

なるんだ。下見だよ」

「流石だわ！ディレク」

大きなことを言ってみせるディレクとそれを手放して褒めるエディタ。

この家の中でずっと当たり前のように繰り返されてきた光景。

それを見るとアロイスはいつも虫唾が走る思いだった。

「絶対に私たちも舞踏会に行きますからね！ディレク、おいで。準備しましょ」

「気が早いな。明日の夜だよ？」

「時間が足りないくらいだわ！なんでもっと早く手を回さないのかしら？」

「本当にあの子は愚図だわ」

「愚図でも役に立ってるじゃない？王宮に行けるんだからさ」

「それはそうだけど・・・まあいいわ」

エディタとディレクが話しながら出て行くのをアロイスは拳を握りしめて

見つめていた。

いつもああだ。エディタはセシルを愚図だと言い、ディレクを流石だと褒める。

一人残された部屋でアロイスはどうしてこうなってしまったのだろうと

思っていた。

アロイスとエディタは政略結婚だ。二人の間に始めから愛などなかった。

それでもうまくいくように見えたのだ。

エディタは昔から派手好きではあったが今ほど傲慢ではなく、アロイス

はエディタを愛せると思った。エディタの方もそう思っている風に見えた。

だが、何かの歯車が狂ってしまった。

エディタがディレクを可愛がり、セシルを邪険に扱い、アロイスがセシルを可愛がり、ディレクを疎んじるという図式が生まれた。

家の中は真つ二つに割れ、使用人たちも主たちにどう接しているのか分らない有様だった。

何かの歯車が狂った、だが、何の歯車かは分からない・・・

アロイスは考えるのやめ、出かける準備を始めた。考えても答えないことが本当は分かっているからだ。

エディタのあの態度は恐らく、エディタ自身の問題なのだろうとは思う。

だとすれば、解決できるのはエディタ本人しか居ないではないか。

アロイスの考えはいつもそこで行き止まりだ。その先の答えはエディタが握っている。

出かける準備を済ませ、使用人に出かけることを告げて、アロイスはふらりと屋敷を出た。

セシルは知らないが、アロイスには何年も関係が続けている愛人がいる。

家で安らぎを得られなかったアロイスは外にそれを求めたのだ。

彼女の名はエルナ。素朴な女性でエディタとは正反対の女性だ。

本当なら貴族の愛人などにならずに普通の男性と結婚して平凡な家庭を築いた方が似合うような女性。

アロイスは何度もその手を離そうとした。だが、出来なかった。

エルナを愛しているのはもちろんだが、一緒にいることで得られるやすらぎを手放すことがどうしてもできなかったのだ。

「おかえりなさいませ。アロイス様」

エルナの家にアロイスが着くと彼女は笑顔でそう言ってアロイスを出迎えた。

その一言でアロイスの胸はいつも熱くなる。

エルナはいつもそう言ってくれるのだ。『お待ち居りました』でも『お会いし

たかったです』でも『寂しかったです』でもなく、ただ一言、『おかえりなさいませ』と……。

待たせているのに、寂しい想いをさせているのに恨みことも言わずに笑顔で出迎えてくれるのだ。

「ああ。ただいま、エルナ」

だから、アロイスもそう返す。

セシルの居なくなつたあの家よりもエルナの待つこの家の方がアロイスにとって

今や我が家同然だつた。

第38話

「陛下、明日の舞踏会のご側室方の出席申請です」

エルンストにそう言われて、エドアルドは数枚の書類を受け取る。
パラパラと書類

を捲っていた手がふと止まる。

「セシルも出るのか？ああ、そうか、家族との面会希望か」

セシルがそういう場が苦手なことはエドアルドには分かっている。
それでもセシル

は家族と面会するのに必要だから無理してあの場に足を運ぶ。その
健気な様はエド

アルドの胸を熱くする。

・・・早く、王妃として迎えてやりたい

今朝、セシルがそれを受け入れる決意をしたばかりだが、エドアル
ドはなるべく

早くセシルを王妃候補としてお披露目したいと思っていた。

側室は簡単には後宮の外へは出られないし、後宮に入れる男性はエ
ドアルドと

護衛兵だけだ。先日のエルンストの立ち入りは非常事態の特例だっ
た。だから

側室の段階では家族との面会に夜会や舞踏会の出席が前提になって
しまっ

るが王妃候補はそうではない。後宮ではなく、王宮に住まうようになることで

ある程度だが面会の制限が緩くなるのだ。

簡単にとまではいかないが、なるべく逢わせてやりたい

エドアルドはこれから増えるばかりのセシルへの負担を思い、せめてもの慰めになればとセシルが望めばいつでも家族に逢わせる気でいた。

それを実現させるためには少しでも早くセシルを後宮から出す必要があつた。

どうしたものかとエドアルドが考えていた時、エルンストがクラリツサからの書状を持ってきた。内容はセシルに自分が若い頃着ていたドレスをあげたいのであるべく早く逢いに来てほしいというものだった。

クラリツサがそれほどまでにセシルに逢いたがるとはエドアルドは思っていなかったのだが、それは好機なような気がした

明日の舞踏会に王太号から送られたドレスを身にまとい、エドアルド共に壇上に上があればそれは王妃候補の披露として申し分ない。

エドアルドはクラリツサに明日、逢いに行くと返事をし、エルンス

トに臣下たちを
集めるように指示を出した。

「・・・あいつは拗ねそうだな」

これからエドアルドはしようとしていることはセシルにはすべて事後報告になって

しまう。そのことでセシルが拗ねてしまうのは容易に想像できた。

だが、エドアルドはもう立ち止れない。

「すまない。王妃はお前以外考えられないんだ」

そう呟いてエドアルドは会議室へと向かった。

会議室には突然集められ、不審そうな顔をした臣下たちが揃っていた。その中で

テオバルトだけが訳知り顔でニコニコしていた。

「今日、集まってもらったのは他にもない。王妃についてだ」

エドアルドがそう切り出した途端、臣下たちは俄かにざわめき始めた。

「陛下、王妃についてと申しますと、どなたかにお決めになったのですか？」

臣下の一人がそう問いかけると他の臣下も一斉にエドアルドに視線を向けた。

「ああ、そうだ」

「・・・どなたですか？」

「・・・セシルだ。セシル・ブルックナーを王妃に迎える」

エドアルドがセシルの名を口に出した時、臣下からは驚きの声が上がった。

セシルは伯爵家の娘だが、家自体に力はなく、強固な後ろ盾もなかった。

セシルを王妃に迎えることで得るものなど何も無いに等しい。

「何故、その方なのですか？失礼ですが、あの方を王妃に迎えて何になります？」

臣下の一人がそう問いかける。他の者もうんうんと頷いている。

「損得で決めて無いよ。陛下は愛してるんだよ、彼女を」

テオバルトがうんざりしたようにそう言って他の臣下をずっと睨んだ。その視線に

臣下たちは一瞬怯んだ。

「テオの言うとおりだ。愛する者に側に居て貰いたい。だからセシルを王妃に迎える」

エドアルドは毅然とそう宣言して見せた。それでも臣下たちは引き下らない。

「しかし、一国の王妃となればそのようなことだけで・・・」

「黙れ。余は貴様らに意見を求めたのでは無い。決定事項を伝えただけだ」

有無を言わさぬエドアルドの態度に臣下たちは黙るしかなかった。

「それから、後宮は解散する」

エドアルドにとって今や後宮は無用の長物であった。セシル以外の女性など彼女たちには悪いがエドアルドにとって煩わしい物以外の何物でもなかった。

「お待ちください！それは時期尚早すぎます！」

臣下が叫ぶ。その言葉にエドアルドは眉を顰めた。

「陛下があの方をどうしても王妃に迎えたいならそれは致し方ありませんが、王妃に御

子ができるまでは後宮の存在意義はあるのです！」

臣下はそう言ったが理由はそれだけではない。後宮には他国の姫や臣下の娘たち、力ある貴族の娘など様々な政治的要因で後宮に入れられている者たちが多い。

その者たちに一斉に暇を出すのは容易なことでない。

エドアルドもそれは分かっているつもりだが、今後二度とセシル以外の者の元へ通うつ

もりが無い以上、いつまでも彼女たちを飼殺しの状態にしておくことが忍びなかった。

交換条件のようなもんだな、これは・・・

臣下たちははつきりとは言わないがセシルを王妃に迎えることを認める代わりに後宮の存続を訴えているのだとエドアルドは感じた。

王妃になれずとも、子を成せばまだ権力を得る可能性がある。

自らの保身のために娘たちを差し出した臣下たちの思惑にエドアルドは吐き気がした。

あの者たちも憐れだな・・・

エドアルドはそう思った。だが、同情はしても愛してはやれない。エドアルドはもう

大切な人を見つけてしまったのだから・・・

「・・・分かった。王妃に子が出来るまでは後宮を存続させる。それでいいな？」

エドアルドは交換条件を呑んだ。臣下たちに安堵の表情が浮かんだ。

「で？陛下、何時セシルさんをお披露目すんの？」

事の成り行きを見守っていたテオバルトが問いかける。

「明日の夜。 舞踏会の席でだ」

エドアルドがそう答えると臣下たちは顔を見合わせた。

「・・・早いすな」

思わずそっという言葉が出た。それにエドアルドはニヤリと笑って見せた。

「早い方がいいだろ？」

不敵に笑うエドアルドに臣下たちはもう何も言うことが出来なくなった。

これで準備は整った。すべてエドアルドが望んだ通りとまではいかなかったが

概ね満足な結果だった。

「・・・拗ねるといふより、怒りそうだな」

エドアルドは小さな声でそつつばやくと思わず溜息をもらしたのだ。

第39話

「セシル、明日、母上に逢いに行くぞ」

夜、セシルの元を訪れたエドアルドは開口一番そう言った。

「明日でございますか？」

驚いて声の出せないセシルの代わりにニコラが問いかける。

「ああ、急で悪いが準備を頼んだぞ」

エドアルドはそう答えてニコラ達に向かい下がれと手をあげて相図した。

「・・・はい。畏まりました」

あまりに急な申し出にニコラは腑に落ちない何かを感じつつもそう答えて侍女室に入った。

「・・・どうして急に？」

漸く衝撃から立ち直ったセシルが問いかける。

「母上に今日、お前を逢わせたいと言ったら、すぐにでも逢いたいと言われてな。だった

ら明日はどうだと聞いたら構わないと返事があつたんだ」

エドアルドは平然とそう言っただけ。クラリッサは少しでも早く

逢いたいと言った

ただですぐにでも会いたいとは言っていないが概ね嘘ではない。

「母上はお前に自分が若いころ着ていたドレスを贈りたいそうだ。良かったじゃないか？」

それを着て明日の舞踏会に出ればいい」

エドアルドの話はセシルにとって到底納得できるものではなかった。前以て相談して欲

しかったし、セシルの意味も尊重して欲しかった。

セシルは先日感じたばかりのエドアルドへの信頼感が微かに揺らぐのを感じていた。

押し黙るセシルを気にしながらもエドアルドは本題を語りだそうとしていた。このこと

はセシルの不信を買うかもしれない。その恐怖が無いわけではない。だが、何も告げず

に騙しうちのような真似をするほうが遥かにセシルを傷つけることになるだろう。

エドアルドは短く息を吸い込み、其れを吐きだした。そして、口を開いた。

「明日の舞踏会だが、お前は俺と共に壇上に上がってもらう。王妃候補としての披露目

だ」

エドアルドが何を言ったのか、セシルには一瞬、分からなかった。

それほどまでにその
言葉はセシルの衝撃を与えたのだ。

「・・・王妃候補としての・・・披露目？」

エドアルドの言葉を自らの言葉として反芻してもセシルはそれをは
つきりと理解出来
ないでいた。

「ああ、そうだ。臣下達の承認も得た。お前は正式に俺の王妃とな
ることが決まった

んだ」

そう言つてエドアルドはにっこりと笑つて見せたがセシルの顔に笑
顔が浮かぶことは
無かった。

戸惑つた顔で虚を見つめるセシルにエドアルドは思わず手を伸ばす。
だが、その手は
思い切り振りはられてしまった。

「・・・セシル」

「どうして？どうして全部一人で決めてしまったの？相談して欲し
かったし、私の
意見だつて聞いて欲しかったのに・・・」

セシルの瞳から大粒の涙が零れた。その涙にエドアルドは衝撃を受
けた。

エドアルドの予想とは大きく違ったセシルの反応。怒るだろうか、
拗ねるだろうか

エドアルドは悩んでいたがそのどちらでもなかった。

セシルは悲しんだのだ。エドアルドが一人で全て決めてしまったこと
を・・・。

セシルはこれから二人で共に生きて行くのだから、何でも相談し合
いながら決めて
いきたかったのだろうとエドアルドは今更気付いた。

セシルを自由にしたい。側に置きたいという気持ちだけで先走った
行動をとって
しまった自分をエドアルドは恥じた。

エドアルドは片膝をつき、セシルの手を取った。セシルはその手を
引っ込めよう
としたがエドアルドはそれを強く握りしめることで制した。

「セシル、勝手に事を進めて悪かった。俺はお前を少しでも早く此
処から後宮から

出してやりたかった。此処に居てはお前は自由に家族に逢えない
し、図書室以外

には出歩けもしない。だが、王妃として王宮に住まえば完全にと
まではないかない

が此処よりは自由に暮らせるようになる。俺はお前にそれを与え
たかったんだ」

セシルは何も言わずにただ、エドアルドを見つめていた。エドアル
ドは尚も言葉を

続ける。

「それがお前のためだとも思った。そう思ったら居ても立っても居られなくなつて

臣下を集めてお前を王妃にすると宣言してしまつた」

そう言つた後、エドアルドはセシルの手を握り締める力を緩めた。

「お前にきちんと相談すべきだつた。俺たちは夫婦になるんだもん
な？何でも話し

合つていかなきゃならなかつたのに・・・すまなかつた」

頭を垂れるエドアルドを見つめながら、セシルの胸から悲しみは消えていた。

いつも自分のことを考えてくれるエドアルド。今回の件は少々先走つてしまつた

ようだがその根底には自分への思いやりがあつた。明日というのは
早すぎる気が

したが、どのみちいつかはその日を迎えなくてはならなかつたのだ。

エドアルドは自分たちは夫婦になるのだと言つた。国王と王妃とい
う特殊な間柄で

ある以前に一組の夫婦であることをセシルは改めて認識した。

その認識がセシルに新たな決意を生んだ。

妻としてエドアルドを支えて行くという決意を・・・

セシルはエドアルドの手をそつと握り返した。エドアルドはハッと

して顔をあげる。

「・・・今回は許してあげます。でも、次からは何か決める時は相談してくださいね？」

夫婦になるんですから、当然ですよね？」

そう言ったセシルの顔には輝かしい笑顔が浮かんでいた。

「ああ。もう二度と一人で先走ったりしない。お前に何でも相談すると誓う」

エドアルドはそう言ってセシルの手に口付けた。

第40話

「では、行くぞ」

翌日、セシルはエドアルドに連れられて、クラリッサの住む離宮を目指していた。

「ねえ、ドレスを下さるって言ってたけど、私の体に合うのかしら？」

セシルがそう言うつとエドアルドは傍らのセシルをまじまじと見た。

「・・・お前と母上は背格好が似ているから大丈夫だと思うが、腰回りあたりに

手直しが必要なら仕立て屋も呼んであるから、応急的な手直しはできるぞ」

エドアルドは微笑んでそう言った。それを聞いたセシルは準備のいいことだと思っただと思っただ。

思えばいつだってエドアルドは何かと準備を進めていてくれる。夜会に出ると言えばドレスが届けられた。至れり尽くせりで何だか恐縮してしまう。

「着いたぞ。母上、セシルを連れてきました」

エドアルドは扉を開けながら中にそう呼びかけた。すると奥から満

面の笑みで
クラリッサが現れた。

「まあ！貴方がセシルね！陛下の言った通り、可愛らしい娘ねえ」
言うなりクラリッサはセシルをギュッと抱きしめた。その温かさ
柔らかさを
全身で味わいながらセシルは母親に抱きしめられるのはこんな感じ
なのだろう
かと思った。

ずっと、求めていた感覚。

セシルは思わず、クラリッサの背に手を回し、抱きついた。その縋
るような様子
にクラリッサは微かに眉を顰めた。

・・・ひよつとして、この娘・・・

クラリッサはちらりとエドアルドを見た。その視線を受けてエドア
ルドは小さく
頷いた。それですべてを察したクラリッサはセシルを抱きしめる腕
に力を込めた。

「さあ、セシル。向こうにドレスを用意してあるわ。行きましょ」
クラリッサは何も気付いていないかのように明るく振る舞った。き
つとセシルは

知られたくないだろうと思ったからだ。

誰だって知られたくは無いはずだ。己が母から抱きしめられたことも無いなどと。

クラリツサはセシルの手を引き、奥へと誘った。母からも手を引かれたことの無いセシルは戸惑ったが、誰かに手を引かれるというのは何だか嬉しいような気もした。

奥に用意されていたドレスは五着程だった。クラリツサは楽しそうにこう言った。

「これは全部、貴方にあげるわ。そうね、今夜の舞踏会にはコレなんかいいんじゃないかしら？陛下の隣に立つんだもの、これくらい着なきやね」

クラリツサはドレスの中から真っ白なドレスを手を取った。一見すると無地に見えるが生地は白の錦糸で全体的に刺繍の施しており、胸元にはさりげなくレースがあらわれていてセシルの好みにもぴったりだった。

「今の流行りは赤とか緑とか派手な色の物が多いみたいだけど、だからこそ返って

こついうドレスの方が目を引くのよ」

クラリツサは得意げにそう言った。そんな母の様子を見ながらエドアルドは苦笑い

を浮かべた。本当にクラリッサは耳が早いと思う。セシルを壇上に上げることはま

だ告げていないはずなのにもう知っているのだから・・・。

「・・・とっても素敵なドレスですね。有難うございます、王太后様。」

セシルがそう言って頭を下げるとクラリッサはにっこりと微笑んだ。

「・・・ねえ、セシル」

呼び掛けられてセシルが顔を上げるとクラリッサが真剣な表情で見つめていた。

「何でございましょう?」

「・・・私のお母様って呼んでくれないかしら?」

「えっ?!」

クラリッサのいきなりの提案にセシルは驚いた。確かにエドアルドの妻となれば

クラリッサは義母となる。お母様と呼ぶのは不自然では無いかもしれないが、相手

は王太后だ。気安くそう呼ぶことは憚れた。それ以前に自分はまだ、結婚式も戴冠式

もずませていないのだ。そう呼ぶ立場にまだなっていないとセシルは思った。

「・・・セシル、私の子供はエドアルド一人だけなの。だから、娘

という存在に憧れ

ていたの。エドアルドの奥さんになる人と親子のように接したい
思っていたわ。

もちろん、無理強いをする気は無いのよ？貴女さえよければの話」

クラリッサの言葉を黙って聞いていたエドアルドはそれは母の本心
であると思った。

クラリッサはエドアルドを産んだ後も何度か懐妊したのだがいずれ
も流産した。それを
繰り返す内、とうとう子供の産めない体になった。

クラリッサはエドアルドによく言ったものだ。お前だけでも産まれ
て来てくれて良かった。
たと。

幼いころ、姉や妹を見るクラリッサの瞳はどこか悲しげだったとエ
ドアルドは思い出す。

あれはこの世に生を受けさせてやれなかった子供達と産まれるかも
知れなかった娘に
対してのものだったのだろう。

「セシル、俺からも頼む。お前さえ良ければ、母上をお母様と呼ん
でやってくれ」

エドアルドはこれはセシルのためにもいいことの様な気がした。母
に愛されなかったと
嘆くセシルに母の愛情を知ってもらういい機会のような気がしたか
らだ。

実の母と同じようにはいかないかもしれない。だが、それに近い愛情をクラリツサは
セシルに注いでくれるはずだ。

お互いに渴望していたものが目の前にあるのだ。手を取り合って欲しかった。

「あの・・・私・・・」

セシルはエドアルドにまで乞われて益々戸惑った。先程、抱きしめられた時の温かさ、
手を引かれた時の嬉しさは今まで感じたことのない物だった。だからと言って簡単に
お母様と呼んでいいものなのだろうかと思っていた。

「・・・すぐでなくてもいいのよ？セシルが呼びたいと思った時で構わないわ」

クラリツサが優しくセシルの髪を撫でながらそう言った。母ならセシルがさっきのよう
に言い淀めば愚図だと罵っただろう。その優しさに触れ、セシルは胸が熱くなった。

・・・母という存在は本当はこんな感じなのかしら

セシルは自分の母親が世間一般的な母親像から大きく外れていることは自覚していた。
本来の母というものがどんなものかは良く分からないが、少なくとも

も我が子を愚図だ

地味だと毛嫌いすることは無いのではないかと思っていた。

・・・王太后様はそれを私に教えてくれるかしら

セシルは何時か自分は母親になった時のことを考えた。愛された覚えのない自分が
きちんと子供を愛せるだろうか。そうして、母というものを知りたいと思った。

悪い面はすべてエディタが教えてくれた。ならば良い面をクラリッサから学べばいい。

セシルはにっこりと微笑んで見せた。その微笑みにクラリッサとエドアルドは目を
瞠る。

「御気遣いありがとうございます。・・・お母様」

恥ずかしさからか、小声になってしまっただけだったが、確かにセシルはお母様と口にした。その一言にクラリッサは嬉しそうに笑ってセシルを抱きしめた。

「こちらこそ有難う。私のわがママを聞いてくれて」

セシルはクラリッサの腕の中で小さく首を横に振った。

「さあ、このドレスを着てみましょう？合わなかったら急いで手直しをしないと」

クラリッサは抱擁を解くとセシルを手を引いて奥の部屋へと歩き出した。

「エドは来ちゃダメよ！今夜の舞踏会まで見ちゃダメ！」

そう言って奥へ消えて行く二人をエドアルドは満面の笑みで見送ったのだ。

第41話

「どうだった？」

奥の部屋から戻ってきたセシルとクラリッサにエドアルドが声を掛ける。

「ぴったりだったのよ！あれなら手直しなんかいらないわ。すぐに着られるわよ。」

母さん、安心しちゃった」

につこりと微笑みながらクラリッサが答える。それを聞いてエドアルドは小さく頷いた。

「セシル、ドレスは舞踏会に間に合うように届けさせるから安心してね」

「はい、有難うございます。お母様」

セシルがそう礼を言くとクラリッサはぎゅっとセシルを抱きしめた。

「うふふふ。やっぱり娘っていいわねえ」

ご満悦のクラリッサに正式にセシルを娶った後、クラリッサがセシルを一人占めし

てしまうのではないかとエドアルドは一抹の不安を覚えた。だが、それもいいかも

知れないとすぐに思い直した。

共に出来る公務もあれば、それぞれが単独で行わなくてはならない公務もある。王妃であるセシルより国王であるエドアルドのほうが単独公務は多い。

忙しさで寂しい想いをさせる可能性は十分にあった。それをクラリッサが癒してくれるのなら有難いとエドアルドは思ったのだ。

「・・・そうだ。ねえ、陛下」

クラリッサが何かを思い出したようにセシルから体を離しながらエドアルドに呼びかける。

「何ですか？」

「セシルのそのうち、王妃教育が始まるでしょ？」

「ええ、正式に王妃候補として国内外に発表した後になるでしょうけど」

「私を教育係の一人に加えてもらえないかしら？」

「え？母上をですか？」

クラリッサの提案にエドアルドは驚いた。王太后が教育係の一人になることは前例がなかったからだ。そんなエドアルドにクラリッサは穏やかだが決意の見える口調で語りかける。

「私は王妃だったのよ？王妃のことは経験者の私が一番よく知っているの。適任でしょ？」

クラリッサは産まれた時から王妃に内定し、王妃になるべく育てられた。そんな

自分でも苦勞したのだ。いきなり王妃候補となったセシルが苦勞しない訳がないと
考えていた。

セシルには強力な後ろ盾がないこともわかっている。だったら自分が後ろ盾になれ
ばいいとクラリッサは考えた。自分が後ろ盾になることで国として
得るものは何も
ないが、セシルを守る盾としては十分だ。

愛する息子がやっと見つけた大切な人だ。クラリッサはセシルを守り、支えたかった。

「・・・分かりました。その時が来たらよろしくお願いします」

エドアルドはクラリッサの提案を呑んだ。クラリッサの真意を見抜いたわけではな
かったが、エドアルドもクラリッサと似たような考えを抱いた。

王太后が自ら教育を申し出るほどセシルを気に入っているという事実は未だ完全には
セシルを王妃にすることを納得していない臣下達を黙らせる材料になる。

今、セシルの味方は自分とエルンストとテオバルト。そして、セシルの側にいる騎士たちと侍女たちしかない。厳しいようだが現実はそのようだ。

セシルの人柄に触れれば、味方は増えて行くだろうが、それには長い時間がかかるだろう。

王太后が後ろ盾になってくれれば、その長い時間もセシルにとってそう辛い物ではなくなるはずだ。エドアルドはそう考えて、クラリッサの提案を呑んだのだ。

「任せなさい。セシル、お母様は勉強となると厳しいわよ？ 覚悟なさいね？」

クラリッサがわざと厳しい顔をしてそう言うとセシルは思わず笑みをこぼした。

「ふふふ。はい、お母様。よろしくお願いします」

セシルはそう返事をして頭を下げた。そんなセシルをクラリッサはニコニコと見つめている。

「母上、そろそろ俺たちは戻ります」

エドアルドはそういうとクラリッサは残念そうな顔をした。

「あら？ そう・・・」

あからさまに落ち込むクラリッサにエドアルドは苦笑いを浮かべた。

「また、連れてきますから」

エドアルドがそう言うのとクラリッサに笑みが戻った。

「ええ、待ってるわ」

コロコロと変わるクラリッサの表情にエドアルドは本当にこの母はいつまでも

乙女の様だと思った。

「お母様、今日は本当に有難うございました。ドレス、大切に致します」

セシルがそう言うともう一度、頭を下げるとクラリッサは益々笑顔になった。

「いいのよ。サイズもぴったりだったことだし、ドレスは私には必要無いものだから」

クラリッサは完全に表舞台から身を引いていた。この先、行われるであろうセシルとエドアルドの結婚式とセシルの戴冠式には出席するつもりだが、それ以外の公の場に足を運ぶつもりはもう無かった。

「それじゃ。母上、また来ます」

「お母様、またお会い出来る日を楽しみにしております」

「ええ、私も楽しみにしているわ」

エドアルドとセシルはクラリッサの住まいを後にした。去りゆく二人の背中を

見つめながらクラリッサは愛する我が子達の幸せを願わずにはいられなかった。

第42話

「あ、そうだ」

後宮の戻る道中、セシルが思い出したように呟いた。それを耳にしたエドアルドが立ち止って、セシルを見つめる。

「どうした？」

セシルも立ち止ってエドアルドを見上げた。その瞳は困惑している様に見えてエドアルドは不思議に思った。

「私、今夜の舞踏会でお父様と面会するつもりだったんだわ。．．．どうしよう」

エドアルドと共に壇上へあがるのだから、中座することは出来ないだろうとセシルは思った。父はセシル程ではないがあまり華やかな席を好まない。そんな父に自分の我が儘で舞踏会に足を運んでもらうのに逢うことが出来ないかもしれない。セシルの中に父に対して申し訳ない気持ち湧きあがっていた。

「そう言えば、そうだったな。．．．そうだな、俺と一曲踊ったら中座して構わないぞ」

エドアルドは少し考えた後そう言った。エドアルドの提案にセシルは小首を傾げた。

「いいの？私、王妃候補として壇上にあがるのだから、中座はしては駄目だと思った

んだけど・・・」

「今夜の披露目は正式なもんじゃないからな。対象は他の側室と一部の上位貴族だけだ。

正式な披露目の席では中座させてやれないが、今夜は大丈夫だ」

エドアルドは笑顔でそう言った。急に決めたことなので招待客の変更までは間に合わな

かったのは事実だ。本来なら貴族は上位から下位まですべて招待しなければならぬし

隣国や同盟国からも招待しなければならない。そう言った大規模な

披露目の席は改めて

用意するつもりだ。

今夜は取り敢えず臣下たちや他の側室たちに王妃候補が決まったことを知らしめるのが目的なのだ。

「それなら、いいんだけど・・・」

セシルはどこか納得していないような顔でそう言った。エドアルドはそんなセシルの髪をそつと撫でる。

「急に決めたことだから、準備が間に合わなくてな。正式なもんじ

やないと言つてもお

前が王妃になることは間違いないからそのことは信じてくれ」

セシルが正式なものではないという言葉に掛けていたことは口に出さずともエド

アルドにはわかったらしい。セシルは本当にこの人は自分を分かってくれているのだなと思った。

おそらくだが、エドアルドは自分が華やかな席が苦手であるにも関わらず、家族との面会のために夜会や舞踏会に足を運ぶのを不憫に思ったのではないだろうかとセシルは思

う。そのことが今回の急な披露目に繋がったのではないかと……。エドアルドの気遣いは嬉しい。だが、だからこそセシルはこのままではいけないと思う。

王妃になれば華やかな席が苦手などと泣きことは言っては居られない。人見知りであまり人に逢いたくないなど以ての外だ。

舞踏会や夜会の席で壇上から微笑んでいることも来賓を出迎える席でエドアルドの隣に居ることもまるで何もしていないかのようなが、立派な公務だ。公務とは仕事だ。仕事を放棄していい道理は無い。

・・・もつと強くないと・・・

セシルはそう思って、エドアルドを見つめた。その瞳を見つめ返したエドアルドの顔に
苦笑いが浮かぶ。

「・・・肩に力を入れるな」

「え？」

思いがけない言葉を掛けられてセシルは驚いた。

「お前の性格は分かっているつもりだ。無理に強くなる必要は無い。お前に負担が掛か

らないように少しずつ公務に慣れてもらうつもりでいる。だから、お前は変わらなく

ていい。寧ろ、そのままでもいいと思う」

それは嘘偽りないエドアルドの本心だった。セシルにはこのままでいてほしいのだ。

王妃になるからと言って変わってほしくはない。

「・・・有難う。でも、私は貴方の隣にいたためなら、どんなことも辛くないわ。」

エドアルドの言葉は嬉しかったが、やはりこのままでいいわけはないとセシルは思っ

た。これほどまでに自分を気遣い愛してくれているエドアルドに迷惑を掛けたくなかった。

「・・・セシル」

先程の自分の言葉がどれだけエドアルドに喜びを与えたかセシル本人は分からないだろう。

エドアルドの隣にいるためなら、どんなことも辛くないという言葉は愛していると
いう言葉と同等、いや、それ以上の意味を持つのではないだろうか。

「・・・有難う。そう言って貰えると嬉しい」

エドアルドはそう言いながらセシルを抱きしめた。此処は王宮の廊下。場所が場所

だけにセシルは始めは抵抗したが、後には素直にそれを受け入れた。

第43話

「ではな、セシル。お前があのドレスに身を包んだ姿を楽しみにしている」

セシルを後宮の入口まで送ったエドアルドはそう声を掛けた。

「はい。私もあのドレスを着た姿を見てもらえるのが楽しみです」

セシルは笑顔でそう答えた。その様子に見えどエドアルドが軽く頷く。

「では、戻りますね。また後ほど」

セシルはそう言って一礼し、後宮の中へ戻っていった。後の残されたエドアルド

はしばらくその場に立って去りゆく背中を見つめていたが、気を取り直して己の

執務室へと足を向けた。

「おかえりなさいませ。セシル様」

後宮の自室に戻ったセシルをニコラは笑顔で迎え入れた。ニコラの笑みにつられる

様にセシルの顔にも笑みが浮かぶ。

「ただいま、ニコラ」

イーナとモニカもセシルを出迎えた。セシルは二人にも挨拶を済ま

すとソファに座って一息ついた。

「王太后様とのご対面はいかがでしたか？」

そんなセシルに紅茶の入ったティーカップを差し出しながらニコラが尋ねる。イーナとモニカも興味があるらしく、セシルの言葉を待っているように見えた。

「とても楽しかったわ。そうだ、ドレスを数着戴いたの。今夜の舞踏会にはそれを着て出るわ」

セシルの言葉に皆、一様に安堵した。楽しかったということは王太后にセシルが悪い印象を与えなかったことの証明であり、尚且つセシルが王太后から気に入られたということだろうと思えたからだ。

一般社会においても嫁、姑の関係は難しいものだ。それが王太后と王妃であれば尚のことだろう。皆、それを心配していたのだが、どうやらそれは杞憂に終わりそうだ。

「……いよいよでございますね」

ニコラが感慨深げにそう呟いた。イーナとモニカも静かに頷いた。

「そうね、いよいよね」

セシルもそう答えて表情を引き締めた。その凜とした姿にニコラは見惚れた。

・・・セシル様は強くなられた

ニコラはそう思った。セシルが幼い頃から側にいるニコラはセシルの全てを見て来たつもりだ。

人見知りで引っ込み思案な性格。いつも自分に自信が持てないでいるように見えた。

誰かに愛されることすら期待していないのではないかと思ったこともあった。

そんなセシルが愛し愛される喜びを知り、その愛に応えるため王妃になる

決意を固めた。セシルの性格から考えて王妃として生きるのは茨の道と

なるだろう。それはセシル本人も分かっているはずだ。

それでもセシルは自らそれに飛び込もうとしている。それは愛する人の側に

居たい。愛する人を支えたいという想いからだろう。

愛とは人を強くするものなのね・・・

ニコラはそう考えてセシルを愛してくれたエドアルドに改めて感謝の念を抱いた。

「ねえ、ニコラ」

セシルがそつと呼び掛ける。その様子はどこか照れているように見える。

ニコラは黙ってセシルの言葉を待った。

「王太后様がね、自分のことを『お母様』って呼んで欲しいって仰ってきた

さったの」

セシルの言葉にニコラは目を見開いた。気に入られたのだらうと思っ
つてはいた
がどうやらそれ以上らしい。

「王太后様は優しくて温かくてとても良い方だったわ。私、
「お母様」と呼ん

で欲しいって言われた時、戸惑ったけどすごく嬉しかったの」

それはそうだろうとニコラは思った。母に愛された覚えがないであ
ろうセシル

にその言葉はあまりに甘美な響きであつたはずだ。

「それは、ようございましたね」

ニコラは笑顔でそう答えた。幸せになってほしいと願い続けて来た幼い主の

周りに愛が溢れ始めている。ニコラは素直にそれが嬉しかった。

「ええ、実の娘のように接してくださるなんて光栄なことだわ。私、陛下だけじゃ

なく、王太后様の・・・お母様の想いにも応えていきたいの」

セシルは笑顔でそう言った。その眩しい笑顔にニコラだけではなく、イーナとモニカも思わず見惚れた。

「ニコラ、もつと大変になるだろうけど、これからもよろしくね」

セシルがそう言ってぺこつと頭を下げた。

「もちろんです。どこまではセシル様に付いてまいります」

ニコラもそう答えて頭を下げた。それを笑顔で受け止め、セシルはイーナとモニカの方を振り返る。

「イーナ、モニカ。貴女たちもこれからよろしくね」

セシルは二人にもそう言うつぺこつと頭を下げた。

「はい、これからもセシル様のお側でお役立てるよう頑張ります」

「はい。セシル様のためならどんな苦労も苦ではありません」

モニカとイーナは其々そう答えて頭を下げた。

「後で、コンラート達とも話をしなきゃね」

そう言うセシルを見つめながら、強くなってもこういう部分は変わらないのだな

とニコラは思った。そして、このまま変わらないで欲しいと願った。

第44話

「どう？素敵でしょ？」

今夜の舞踏会用のドレスに身を包んだエディタが満足そうに問いかけた。

「・・・そうだな」

アロイスは口では同意しながら内心溜息をついた。派手すぎてどこか歪に見えるそのドレスは確かにエディタにしか着ることは出来ないだろう。

エディタは皆が言う『流石、ブルックナー伯爵夫人。そういうドレスは貴女しか着ることができません』という言葉を賛辞と受け取っているが
実際は皮肉だ。そんな変なドレスをよく恥ずかしげも無く着れるものだ
と言われているのだ。

アロイスが社交界にあまり顔を出したくない理由の一つはエディタのドレスにある。陰で、否、面と向かっての場合もあるが笑われるのだ。ブルックナー伯爵夫人はセンスが悪いと・・・。

王宮の舞踏会にまでそんな歪なドレスで出席するつもりなのかとアロイス

は頭が痛くなる思いだった。

「母さん、俺も準備出来たよ」

エディタに声を掛けながら部屋に入ってきたディレクも男性が着るには
些か派手な礼服に身を包んでいた。ディレクの服は全てエディタが見立て
ているので当然と言えば当然かもしれない。

「まあ、ディレク、とっても素敵よ。本当にお前は何でも似合うわね。

セシルとは大違いだわ」

「あんな地味なのと比べないでよ」

いつものように始まった会話にアロイスは顔を顰めた。

「・・・貴方はいつもそんな顔をするのね。ディレクが可愛くないの？」

エディタがうんざりしたようにアロイスに問いかける。その問いを受けて

アロイスはこう切り返した。

「お前こそ、いつもディレクばかり褒めてるじゃないか。セシルが可愛く

ないのか？」

アロイスの問いかけにエディタは口をへ字に曲げてそっぽを向い

た。

応える気は無いらしい。

こういった問いの応酬はもう、何度も続けて来た。その度にアロイスと

エディタはお互いの問いに応えずに問いを返してきた。

アロイスはディレクが可愛くないかと聞かれても、応とも否とも言えない

自分に気が付いている。息子でありながら、アロイスはディレクをどう扱っ

ていいのか良く分らないのだ。

エディタがべったりとディレクを構っていたせいでディレクが幼いころから

さほど交流を持つことが出来なかったことも理由の一つにあるだろう。エディ

タがほとんどセシルを構ってやらないことを不憫に思っ
てセシルの方ばかり気

に掛けていたという現状もそれに拍車をかけた。

気が付けば、ディレクとの間に埋めようのない溝が出来てしまったような気がする。

自分を毛嫌いする息子……。それをどう扱えばいいのかアロイスはいつも
苦悩していた。

「……父さん。貴方も準備した方がいいんじゃないですか？」

ディレクが渋々といった感じで声を掛ける。その言葉にアロイスはまだ自分が礼服に着替えていないことを思い出した。

「そうだな。私も準備しよう」

アロイスはそう答えて部屋を後にした。ブルックナー家の屋敷は王宮から少し距離が離れている。まだ、午後になったばかりだが早めに準備をして屋敷を出る必要があった。

「・・・セシルが愚図なのは父さんに似たからじゃない？」

アロイスが部屋を出た後にディレクが心底嫌そうに呟いた。

「そうかもしれないわね。・・・お前はあの人に似ていないわ」

エディタはディレクの言葉に同意し、そっとディレクの頬を撫でた。

その瞳がどこか悲しげであることにディレクは気付いていなかった。

第45話

「陛下、ご依頼の件ですが調べが終わりました」

執務室に着いたエドアルドにエルンストが声を掛けた。

「・・・そうか、で？どうなんだ？」

「それが・・・少々厄介なことが分かりました」

エルンストに言葉にエドアルドの顔が曇る。実はエドアルドはエルンストに

ブルックナー家のことを調べさせていた。セシルを愛しているし、信頼もし

ているが、王妃となるからには実家のことも無視できない。実家の状況によ

ってはセシルを王妃にすることが難しくなる可能性もあった。セシルを王妃

にすることを完全には納得していない家臣達に足元をすくわれる前にブルッ

クナー家のことを調べ、何か災いの種があるならそれを排除しておく必要があ

った。

「厄介なこととは？」

問いかけるエドアルドにエルンストは報告書を手渡した。それに目を通した

エドアルドは驚きに目を見開いた。

「これは真実なのか？」

「恐らくは、真実と思われます。容姿や性格、時期から考えても符号する点

が多すぎるのです」

エドアルドの言葉にエルンストは目をそらさず応えた。

「・・・伯爵は気付いていないのか？」

「・・・疑念は抱いているようですが、確証を持てずいるようですね」

エドアルドは頭を抱えた。思ってもみなかった問題がブルックナー家には隠されていた。それは致命傷になりかねない。

「・・・これが家庭不和の原因だろうな」

エドアルドは報告書を見つめながら呟いた。セシルは此処に書かれているこ

とは何一つ知らないだろう。何も知らないまま、訳もわからぬまま、母や兄

に虐げられてきたのだろう。それを思うとエドアルドは胸を締め付けれる想

いだった。だが、此処に書かれていることをセシルに知らせるのもまた酷な気がした。

世の中には知らないほうが幸せなこともある。この報告書の内容はセシルに

とって正しくそれであるとエドアルドは思った。

「・・・あの二人をブルツクナー家から排除する必要があるな」

エドアルドが苦しそうな顔でそう言った。

「・・・しかし、方法はどんなさるのです？この件を公表すれば容易く排除

出来るでしょうが、この件はブルツクナー家の名誉に関わる」

エルンストの言葉は尤もだ。事はそう簡単では無い。

「・・・秘密裏にあの二人を排除する方法を考えねばな。エルンスト、例の

輩、所在は掴んでいるか？」

「え？・・・はい。掴んでおりますが」

エルンストの応えにエドアルドはニヤリと笑った。

「捕らえておけ。使えるかもしれん」

「・・・分かりました」

エルンストはそう応えながら、やっと幸せを掴みかけたエドアルドとセシル

に急に立ちこめた暗雲に胸を痛めた。

第46話

「どう？素敵でしょ？」

クラリッサの元から届いたドレスを披露しながらセシルは皆に問いかけた。

「ええ。とっても素敵なドレスですわ」

ニコラはそう答える。イーナとモニカも頷いている。

「この白いドレスを着ようと思ってるんだけど、どうかしら？」

セシルは数着あるドレスの中からクラリッサが勧めてくれたドレスを体に当てて見せながら皆を見つめる。

「よろしいんじゃないでしょうか？セシル様にとてもよくお似合いです」

イーナがうつとりしながらそう答えた。漆黒の黒髪を持つセシルに白いド

レスは良く似合う。

「やっぱりこれがいいわよね？実は王太后様もこのドレスを勧めてらっ

しゃったの」

セシルは嬉しそうに微笑みながらそう言った。その様子ニコラは

目を

細める。そしてセシルが自分以外に母のような存在を得たことを素直に嬉しいと思った。

父親とニコラ以外から愛された記憶がないであろうセシル。それが今、エド

アルドに愛され、王太后に愛され、従者達にも愛されている。

苦勞は報われるものなのね・・・

ニコラはそう思ってセシルのこれからの人生は今までの分も幸せな物になると確信していた。

「ではセシル様。そろそろ準備を始めましょうか？」

ニコラがそう問いかけるとセシルは笑顔で頷いた。

「綺麗・・・」

白いドレスに身を包んだセシルの姿を見てモニカが思わず呟いた。その声が耳に

届いたセシルは照れてほんのり頬を赤く染めた。

「本当に良くお似合いです」

イーナもそう言ってセシルを眩しそうな瞳で見つめた。

「有難う、二人とも」

セシルは礼を言いながら姿見に映った自分の姿をまじまじと見つめた。ほんの少し

だが、以前より自分に自信が持てるようになったからだろうか。先日、エドアルド

に贈られた桃色のドレスに初めて袖を通した時のように似合っていないような、

服に着られているというような感じは抱かなかった。ピンと背筋を伸ばし、凜とした

表情を見せるセシルの変化にニコラは笑みを浮かべた。

「さて、少し早いですが参りましょうか？打ち合わせもありでしょうし」

ニコラはそう言いながらセシルを扉まで誘った。今回も付きそうなのはニコラの役目だ。

「ええ。それじゃ行ってくるわね。イーナ、モニカ」

セシルはニコラに続いて扉に向かいながら二人に声を掛けた。二人はそれを一礼して見送った。

「セシル様、もう参られるのですか？」

扉の前で警護していたアルトウルが声を掛けた。

「ええ、少し早いんだけど」

セシルがそう答えるとアルトウルは詰め所に向かって声を掛けた。

「コンラート、エアハルト。セシル様がお出かけになる」

その声に二人が詰め所から出てくる。それを見たセシルは徐に声を掛けた。

「コンラート、エアハルト、アルトウル」

突然名を呼ばれて三人は神妙な顔つきでセシルを見つめた。

「・・・大変なことも多いかもしれないけどこれからよろしくね」

セシルはそう言うと三人に向かって頭を下げた。その様子には三人は顔を見合

わせ力強く頷きあった。

「もちろんです。我々は天地神明に誓って、セシル様を御守りして参ります」

コンラートが代表してそう答え、頭を下げた。他の二人もそれに続いた。

「・・・有難う」

そう言ったセシルの顔には満面の笑みが浮かんでいた。

「それでは参りましょうか？どなたか護衛に付いてくださるのですか？」

ニコラがそう問いかけるとコンラートとアルトゥルが一步前に出た。

「護衛は我々が付きます。エアハルト、部屋の警護を頼む」

コンラートにそう言われてエアハルトは小さく頷き、扉の前に立った。

「それじゃ、行ってくるわね」

セシルはエアハルトに声を掛け、廊下を歩きだした。

「いつてらっしゃいませ」

去りゆく背中にそう声を掛けながらエアハルトは今夜の舞踏会が何事も無く

終わることを祈った。

第47話

「セシル様？」

セシルは舞踏会会場の近くまで来た時、不意に声を掛けられた。振り返ると

そこにはエルンストが居た。

「エルンスト」

エルンストは少々戸惑ったような表情でセシルに近づいて来た。

「・・・お早いですね」

まだ、開始時間には余裕があった。それに今回セシルはエドアルドと共に壇上に上がることになっているので開始して暫くしてから会場に入ることになる。会場に来るのはもう少し後でも問題はなかったのだ。

「ごめんなさいね。・・・なんだか、落ち着かなくて」

エルンストの言葉にセシルははにかんだ様な顔をしてそう答えた。そんな

セシルの姿にエルンストは思わず笑みをこぼした。

「それはそれでございましょうね。セシル様、どうぞこちらへ」

エルンストはセシルを壇上の後ろにある控室のような部屋に案内し

た。

控室と言っても王族専用であるためその部屋は控室と呼ぶには少々広く

豪華だった。その部屋に入ったセシルは奥の扉を見つめて表情を少し引き

締めた。その扉は壇上への入口。セシルの王妃としての第一歩への扉だった。

「セシル様、まだ時間がございますのでどうぞ、ごゆっくりなさってください」

「・・・ええ、そうするわ」

エルンストにそう促されてセシルは扉を見つめるのをやめ、ソファに座った。

「セシル様、会場には開始して少々時間が経ってから入っていただきます。」

初めに陛下が入られ、続いてセシル様にご入場いただきます」

エルンストは段取りの説明を始めた。セシルはそれを神妙な面持ちで聞いていた。

「侍女殿と騎士殿達にはセシル様の後ろに着いてもらいたいのだが・」

「畏まりました」

「心得ました」

「仰せのままに」

エルンストの言葉にニコラ達はすぐさま頭を下げて応じた。エルンストが小さく頷く。

「それではセシル様、暫しこちらでお待ちください」

エルンストはそう言うで一礼して部屋を後にした。

エルンストが部屋を去った後、セシルは小さく溜息をついた。

「どうされました？」

その様子を気にしてニコラが声を掛ける。それに対してセシルは少し困ったように笑って見せた。

「・・・お父様、驚くだろうなあと思ってね」

父に面会したいと申し出た時はこんな大事のなるとは全く考えていなかった。こういうことは前以て知らせておいたほうが本当は良かったのでは無いかとセシルは思っていた。

自分ほどではないが華やかな世界が苦手な父。その父の前になんの

前触れも無く

自分が壇上から国王陛下に伴われて現れるのは大きな驚きを与えることは容易に

想像できた。セシルはそれが何だか心苦しかった。

「・・・それはそうでございましょうね・・・」

セシルの言葉にニコラの顔も曇る。長年、ブルックナー家に仕えているニコラも

一族の性格は熟知しているつもりだった。エディタやディレクならセシルの王妃

内定を手を叩いて喜びそうだがアロイスは大いに戸惑いそうだ。だが、最早後戻

りは出来ない。ニコラはギュツと己の拳に力を込め、表情を引き締めた。

「セシル様、旦那様を驚かすことになってしまったことは後で旦那様にお詫び申

し上げればよろしいじゃございませんか。今は舞踏会を無事に終えることだけ

考えて下さいませ」

優しいが有無を言わせぬ雰囲気を纏ったニコラの口調。セシルが迷ったり、躊躇

ったりした時、ニコラはいつもこの口調で話しかけセシルの背中を押してきた。

セシルもそれを分かっている。ニコラがまた自分の背中を押してくれている。

そう思った時、セシルの顔から迷いが消えた。

「・・・そうね、今夜の舞踏会は大切な場所だものね」

自分の新たな人生の第一歩となる大事な夜に失敗など出来ない。

セシルは改めてその想いを強くしたのだ。

第48話

「招待状を拝見いたします」

馬車の外から聞こえて来た声にアロイスはついに目的地に着いたことを悟った。

なんだか気が重く、外の景色を一切見ないようにしていたアロイスはその声を耳にするまでそれに気付いていなかったたのである。

「へえ、近くでみるとやっぱり大きくて立派ねえ」

エディタが馬車の外を見てそう言った。エディタの言葉にディレクも馬車の外を見ようと乗り出した。

「きよろきよろするな。見つとも無い」

その様子にアロイスが釘をさすと二人は不服そうにアロイスを睨みつけた。

「貴方は前に来たことがあるから珍しくもないんでしょうけど、私たちは初めてなのよ？ちょっと見るくらいいいじゃない」

「・・・威張らないでくれる？折角の気分が台無しだよ」

口々にそう言い、アロイスから目を逸らし、外の景色を眺めることを止めようと

しない二人にアロイスは溜息をついた。

この分だと王宮に入ってからと同じように物珍しげな目であちこち視線を走らせ

るのであることが明白だった。アロイスはそれがとても恥ずかしいことに思えた。

そして、それに気付かぬ二人はやはりどこかずれているような気がして自分たちは

家族でありながらやはり、相容れぬ存在なのだろうかと悲しい気持ちになった。

「旦那様、到着しました。どうぞ、お降りください」

御者が馬車の扉を開きながら一家にそう促した。エディタとディレクはその声に

応じてすぐさま馬車を出たがアロイスは少し躊躇った。

「何してるのよ？早く行きましょうよ」

焦れたエディタの呼び掛けにアロイスは漸く重い腰を上げた。

「・・・やっぱり貴方とセシルは良く似てますね」

ゆっくりと馬車を降りてくるアロイスにディレクはうんざりしたように呟いた。

いつもと同じ言葉。同じ口調だが今日のアロイスは何故かそれが気に障った。

いつもなら何も言い返さないのだが、今日は一言言ってやりたくな

「・・・そうだな。お前は不思議なほど私には似ていないがな」

言葉はディレクに向けられたものだが、視線はエディタに向けられていた。

アロイスは長年胸に抱えて来た疑念をついに遠まわしにだがエディタにぶつ

けたのである。それに対するエディタの反応は無表情にそれを受け
た止めた

だけであつたが・・・。

「似て無いと言われるのは嬉しいですよ」

ディレクはそう言つてアロイスを見ようともしなくなった。険悪な
雰囲気

まま、ブルックナー一家は従者の案内の元、舞踏会会場へと足を運
んだ。

会場に着くとまだ人影はまばらだった。それを見たエディタはがっ
かりした
ように呟いた。

「・・・こんなものなの？」

その呟きにアロイスは今日何度目になるか分からない溜息をついて
応えた。

「少し、早く着いたからな。もう少しすれば大勢やってくるだろう」

アロイスの言葉にエディタは嬉々とした表情を浮かべた。ディレク
はアロイス

の予想通り、きよろきよと辺りを見回している。

・・・これが私の家族、これが私の現実なのだな・・・

アロイスは何の安らぎも得られない、何の幸せも感じない己の現実を噛み締めて

いた。唯一の安らぎであったセシルは既に手の届かない場所に行ってしまった。

そのセシルに逢えるのは嬉しいが今日は望まぬ同行者がいる。

二人がセシルに対して優しい言葉を掛けるわけがない。自分が盾になろうと決め

てはいるがどうなるか分からない。

アロイスにとって長く辛い夜となるであろう今夜はまだ始まったばかりだ。

第49話

「陛下、そろそろ会場の方へ」

執務室で執務に励んでいたエドアルドはエルンストの呼び掛けに軽く頷くと

椅子から立った。

「セシル様は既にお待ちです」

執務室を出ようとしていたエドアルドはエルンストの言葉に思わず歩を止めた。

「・・・早いな」

驚いたような表情でそう言うエドアルドにエルンストは少しだけ笑って見せた。

「落ち着かれなかったようですよ」

エルンストがそう答えるとエドアルドは苦笑いを浮かべた。

「そうか・・・そうだろうな」

様々なことが起き、密度の濃い日々を過ごしたせいで忘れがちだが、セシルと

エドアルドは共に過ごすようになってから数日しか経ってはいないのだ。数日

前のセシルは自分がエドアルドに愛され、王妃に望まれる日が来る

など夢にも
思っていなかったはずだ。

ここ数日でセシルを取り巻く環境は急速に変わった。戸惑わない方がおかしい
だろう。

エドアルドはセシルと出会ってからすぐにあの桃色のドレスを仕立てさせた。

純粹にセシルに何かを贈りたかったのはもちろんだが、着飾った姿を見てみた

と思った。だが、ドレスが仕立て上がるころになってセシルが華やかな席を

苦手にしてしまうと知った。後宮の女官長にそれとなく側室たちの様子を聞いた

時、女官長はセシルのことをこう言ったのだ。

「先日入らした御方はどうも華やかな席が苦手なようです」

その言葉を聞いたエドアルドはセシルにドレスを贈ることを躊躇した。ドレス

を贈られれば夜会に出席しなければならないとセシルなら考えるだろうと思っ

たからだ。

苦手な席に無理やり引っぱりだすのは本意ではない。エドアルドはセシルが

自らの意思で夜会に出席するのを待つ決意をした。

・・・まさか一年もかかるとは正直思っていなかったのだが・・・。

本当はもう少しゆっくりと時間を掛けて事を運ぶつもりだったが、待ち焦がれた存在を手に入れた喜びがどうしてもエドアルドを急かしてしまう。立て続けに起きた事件もそれに拍車をかけた。

ただの寵室では無く、王妃候補というより安定した立ち位置にセシルを置いてやりたいとの想いを抑えることが出来なかった。

「・・・一年も待ったというのに、いざ手に入れたら入れたで情けないもんだな」

エドアルドは小さな声で呟いた。

「え？何かおっしゃいましたか？」

それが微かに耳に届いたエルンストが問いかける。エドアルドはそれに対して苦笑いを浮かべて小さく首を横に振った。

「何でも無い。急ごう、姫君がお待ちかねだ」

エドアルドはそう言ってエルンストを伴って執務室を後にした。

第50話

「陛下の御着きです」

廊下から聞こえた声にセシルはサッと立ちあがり、扉を見つめた。そして、開かれた扉から見えたエドアルドの笑顔に自分も微笑み返して見せた。

「待たせたな、セシル」

エドアルドは優しく声を掛ける。それに対してセシルは小さく首を振った。

「私が早く来てしまったんだもの。気にしないで」

セシルの言葉にエドアルドは軽く頷きながら、クラリッサから贈られたドレスを着たセシルをまじまじと見た。

「へえ、良く似合ってるじゃないか」

「そう？良かった」

似合うと言われてセシルはそう言うてはにかんだ表情を浮かべた。自分でもそう悪くないと思っているし、皆も口々に似合うと言ってくれているがエドアルドからそう言われるのはまた特別な響きを持ってセシルの心に届いたような気がした。

「・・・しかし、本当にセシルは母上に気に入られたんだな」

エドアルドがしみじみとそう言った。意味がよく分からず、セシルは小首を傾げる。

「母上はそのドレス、結構気に入ってたと思うぞ。確かそれを着た姿の肖像画があったはずだからな」

エドアルドの口から飛び出した思いもよらない言葉にセシルは驚いた。

「そんな大切なドレス、本当に戴いても良かったのかしら・・・」

表情の曇ったセシルにエドアルドは諭すようにこう言った。

「母上がご自分で決めたことだ。それほどお前に・・・俺が選んだ人に謝意を示したかったんだろう」

「謝意？」

「息子を愛してくれて有難うって意味だよ」

セシルの問いかけにエドアルドは少し照れたような顔をしてそう答えた。その答えにセシルも思わず赤面する。

「・・・お話中、申し訳ありませんが」

エドアルドと共に部屋に入ってきたというのに今の今まで存在を忘れ去られていた
エルンストが徐に声を掛ける。その声にセシルはハツとし、エドアルドは不機嫌そう
に溜息をついた。

「・・・何だ？」

不機嫌なことを隠す気も無いような声でエドアルドが問う。その態度にエルンストは
クイツと片眉を上げたが咎めまではしなかった。

「そろそろ刻限です」

「え？」

エルンストの告げた言葉にセシルが思わず会場に繋がる扉に目をやるとその向こうか
ら楽団の奏でる音色が響いた。それが耳に届いた時、セシルはキュツと拳を握りしめ
扉を凝視した。そんなセシルの様子に気付いたエドアルドがそつとその手を取った。

ハツとしてエドアルドを見上げるセシルの瞳には不安が見て取れた。エドアルドは
それを受け止め、優しく微笑んだ。

「何も気負う必要は無いぞ。お前はお前らしくしていればいい」

「私、らしく？」

戸惑った表情のままそう言うセシルの耳元にエドアルドはそつと顔を寄せて呟く。

「俺の愛したお前らしくな」

「陛下！」

耳元で告げられた言葉と耳に掛かったエドアルドの吐息にセシルは気恥かしくて
つい語気を強めた。そんなセシルにエドアルドは悪戯が成功した子供のような
表情を浮かべて笑っているだけだった。その表情を見ているとセシルの中の
不安や緊張が消えて行くようだった。

「・・・陛下、有難うございます」

セシルがにつこりと微笑んでそう言った。エドアルドの表情もいつもの笑顔に戻った。

「礼を言われるようなことは言っていないがな」

「いいえ。緊張のあまり、大切なことを見失いかけていました」

セシルは小さく深呼吸をした。エドアルドはそれをただ見守っていた。

「私は私らしくいます。これからずっと」

エドアルドの瞳を見つめ、セシルはそう宣言した。それを受けてエドアルドが力強く頷く。

「そうだ、それでいい」

今度はセシルが力強く頷く。二人は舞踏会会場へ続く扉を見つめて自分たちの未来に思いを馳せていた。

第51話

「始まったみたいね」

楽団が奏で始めた華やかな音楽と一気に増えた会場の人波にエディタが眩く。

「ああ、そうだな」

それに対してアロイスはそれだけ応えた。セシルに逢うことが目的である

アロイスにとって華やかな舞踏会はおまけのようなものだ。楽しむ気はさらさら無かった。

「・・・あなた、踊りましょうよ」

エディタがそつと切り出す。アロイスは驚いたような表情でエディタを見つめた。

「どつという風の吹き回しだ？」

エディタがアロイスに対して踊ろつなどと誘ったことは新婚当初以来のこと

だった。段々とそれが無くなり、アロイスが誘っても乗ってこなくなつた。

そして、アロイスもエディタを誘うことをやめた。

二人でこういう場に来てそれぞれが好きのように過ごしてきたのである。

「・・・王宮に来てまで、他の人と踊るわけにはいかないでしょ」

エディタが仕方が無さそうに言った。

「・・・そうだな、踊るか」

アロイスもそれはそうだろうと思った。いつもの場ならブルックナー夫妻が

夫婦仲がうまくいっていないのは周知の事実だが、この場では違う。

後宮で暮らすセシルにとっても家庭がうまくいっていないことはマインナスになるだろう。アロイスはセシルを想ってエディタの提案を受け入れることにした。

一方、ディレクはというと、誰かと踊る気にもなれずに壁際で佇んでいた。

自分に絶対の自信を持ち、プライドも高いディレクは女性の理想も高い。

他の若者の様に誰かれ構わず声を掛けるといふ真似がどうしても出来ないのだ。

ふと、両親が踊っている姿が目に入った。普段はいがみ合っている二人だが

ああしている姿を見ると案外似合いの二人に見えた。父のことは好きにはなれないが、こうして客観的な視点で見ればいい男にも見えた。

ディレクは時間が経つにつれ、先程のアロイスの言葉は気になり始めていた。

『お前は不思議なほど私に似ていないがな』

確かに似ていないと思う。そして、それを喜ばしいと思ったことがあるの
も事実だ。それでもと思う。

妹は基本的に父に似ているが母の面影が全くないわけではない。では、自分は
どうだろうか？とディレクは考える。

母に似ていない訳ではないが自分の顔には誰か別の人間の面影が見え隠れして
いる気がする時がある。そして、それは父ではないような気がするのだ。

「・・・そんなわけではないか」

そこまで考えて、ディレクはあり得ないというように呟いた。いく
ら両親が
不仲とはいえそこまではしていないだろうとディレクは思った。

やはり自分はある父の子供なのだろう。分かりあえなくても自分たちは親子

なのだろうとディレクは溜息をついた。

楽団の演奏が終わり、ファンファーレが鳴り響いた。

「国王陛下のお出ましか」

ディレクはそう言うともう少し近くでその姿を拝見しようと思いきや、壁際から離れた。

第52話

「セシル、行くぞ」

国王陛下の登場を告げるファンファーレが鳴り響いた瞬間、エドアルドが
そう声を掛けた。セシルは短く深呼吸をして頷いた。セシルに付いていく
ことになっているニコラ、コンラート、アルトゥルも表情を引き締めた。

扉が開かれた。セシルはエドアルドに手を引かれてその中へ誘われる。

ここは会場の中で一際高い場所。国王と王妃の席のある場所。

セシルは恐る恐る眼下に視線を走らせる。そこには様々な表情があった。

いつもは一人で登場する国王は女性を伴って現れた。それが意味すること

を会場の面々は瞬時に理解した。

王妃が決まったのだと・・・。

驚く者、悔しさを滲ませる者、面白がっている者、面白くなさそうにして
居る者・・・。

そのすべての視線がセシルの向けられていた。セシルは思わず俯きそうになる。その時、握られた手に力が込められた。ハツとしてセシルがエドアルドを見上げるといつもの優しい笑みがあつた。

「セシル、下を向くな、笑え。大丈夫だ、俺が守る」

小声でセシルにだけ聞こえるように囁かれた言葉にセシルの顔に自然と

笑みが戻る。

「・・・はい」

セシルは正面を向き直し、観衆に向かって微笑みかけた。そして、エド

アルドが席に着くのを待つて自分も席に着いた。

アロイスとエディタは茫然と壇上を見上げていた。国王陛下が入つて来た時

誰かを伴っているのは何となく察した。その誰かが鮮明になった時、二人は

普段では考えられないくらい息の合った反応を見せた。その誰かとは他ならぬ

自分達の娘であつたのだから当然と言えば当然なのかもしれない。

「・・・どうということなの？」

エディタが信じられない物を見たかの様に呟く。

「・・・セシルは陛下に気に入られていたんだ。だが、ここまでとは・・・」

それが耳に届いたアロイスが壇上を見上げたまま応えた。

「気に入られていた？あなた、何も言っていなかったじゃない！」

エディタがアロイスに食ってかかる。その態度にアロイスは心底うんざり

したようにこう言った。

「セシルのことを気に掛けても居なかったくせに何を言ってるんだ」

アロイスの反論にエディタは何も言い返せずに苛立った様子でそっぽを向いた。

そんな両親の様子を横目に見ながらディレクは壇上を見上げニヤリと笑っていた。

「・・・あのセシルがね・・・」

愚図だと思っていたがどうやら役にたつたらしい。ディレクはそう思っていた。

会場のざわめきが少し治まった頃、エルンストの合図で楽団の演奏が再開される。

「そう言えば、セシルはダンスの心得はあるのか？」

エドアルドが不意に問いかける。今更な質問にセシルは苦笑いを浮かべた。

「教養として稽古は受けたわ。男性と踊ったことはないんだけど・・」

セシルが恥ずかしそうにそう告げる。

「稽古を受けているなら十分だ。それにお前の初めてのダンスの相手を務める

のが俺だということが嬉しい」

照れもせずそう言うエドアルドにセシルの方がなんだか照れてしまう。

「さあ、行こうか」

エドアルドが席を立ち、セシルに手を差し伸べる。

「はい」

セシルはその手を取って席を立った。

エドアルドに手を引かれ、壇上を降りる。エドアルドが歩を進める度に

人々がさつと道を開ける。両脇に人の壁が出来る中、セシルは会場の中心へと辿り着く。

「基本がわかってるなら大丈夫だ。俺に合わせればいい」

手を取り合い、向かい合って微笑み合う。

「はい。陛下にお任せします」

セシルの返事を得て、エドアルドが動き出す。

優雅に踊る二人を会場の人々は様々な想いで見つめているのだった。

第53話

「ブルックナー伯爵」

国王陛下と踊る娘を茫然と見つめていたアロイスは不意に声を掛けられた。

振り返ると王宮の従者が立っていた。

「セシル様はこの後、皆さまとの面会に入られます。先に別室にお越し

下さい」

従者の言葉にアロイスは驚いてこう聞いた。

「面会は可能なのか？」

セシルの今の立場からすれば自分との面会より舞踏会を優先されるのでは無いかとアロイスは内心寂しさに駆られていたのだ。

「はい。セシル様は元々そのために舞踏会に出席なさったのですから、

それを妨げることは出来ないと、陛下からセシル様へのご配慮です」

従者の言葉にアロイスは改めてセシルは国王陛下から愛され、大切にされて
いるのだと思い知る。

「・・・分かった。行こう」

アロイスがそう言って歩きだした時、徐に従者が口を開く。

「奥さまとご子息もどうぞ、こちらへ」

従者の言葉にエディタは慌てた。セシルに逢う気など無いのだ。

「い、いいえ。私たちはこちらで・・・」

その様子を気にも留めずに従者はにつこりとほほ笑んだ。

「御冗談を。さ、こちらへ」

その笑みには有無を言わせぬ何かがあった。エディタとディレクは仕方なく

アロイスと共に会場を後にしたのだ。

楽曲の演奏が終わり、エドアルドとセシルがダンスを止めると周りからパラ

パラと拍手が起こった。元々大歓声など期待していなかった二人は気にする

様子もなくそれを受けながら壇上へと戻った。

「セシル、次の楽曲が終わったら下がっていいぞ」

席に着くとエドアルドがそう言った。

「はい。分かりました」

セシルはそう答えると小さくため息をついた。

先程の登場もエドアルドとのダンスもきつと父は見えていたはずだ。
余裕が無く

父の姿を探すことは出来なかったが、あの時点ではまだ会場に居たはずだ。

きつとすごく驚いたでしょうね・・・

セシルは父を想うとやはり居た堪れない気持ちに囚われる。驚かす
気など

無かったが結果的にそうなってしまったことが、どうしても申し訳
ないと思ってしまうのだ。

「セシル様、そろそろ・・・」

コンサートに声を掛けられ、セシルはハツとする。物思いに耽って
いる間
に楽曲が終わったようだった。

「分かったわ。陛下、それでは行って参ります」

セシルは気持ちを切り替えてエドアルドのそう告げた。

「ああ。こちらの事は気にしないでいいから、ゆっくり過ぐせ」

エドアルドはそう言ってセシルを送り出す。

「はい。有難うございます」

エドアルドに一礼し、壇上から出ようとしたセシル一行にエルンストが

声を掛ける。

「コンラート殿、面会は先日と同じ部屋です。頼みますよ」

「はい。セシル様、参りましょう」

王宮に不慣れなセシルにとって王宮に詳しいコンラートやアルトゥルの存在
は有難いものだった。

「ええ、よろしく」

セシルはそう言ってコンラートの後に続いて歩き出した。

第54話

「こちらです」

コンラートの案内で着いた王宮の中の一室。この中に父が居る。セシルは
はやる気持ちを抑えて、その扉を叩いた。

「はい」

中から聞こえて来た父の声にセシルはうつすら笑みを浮かべて扉を開く。

だが、次の瞬間、その顔から笑みが消えた。

そこには居るとは思っていなかった人たちが居たのだ。

思いも寄らなかった人物の出現にセシルは扉を開いた状態で固まる。その

様子を訝しげに見ていたニコラの耳に聞き覚えのある声が届いた。

「何してるの！早く入ってらっしゃい！」

・・・奥さま？！

怒鳴られて肩をビクツと震わせたセシルはおずおずと中に入ってしまった。

セシルが中に入る際、ニコラはちらりと中を窺った。部屋の中には

アロイス

のほかにエディタとディレクの姿が見えた。

そんな・・・お二人までいらっしやってるだなんて・・・

今回はアロイス一人でここに来ていた。だから、今回もそうだろうとセシル

もニコラも思っていた。それなのに何故二人も来てしまったのだろうか。

ニコラは胸騒ぎを感じずには居られなかった。

「さつさとこちらに来て座れ。本当に愚図だな。お前は」

ディレクが吐き捨てるように言う。その態度にセシルは久々に胸が痛く

なるのを感じた。

「よさないか！ディレク！」

アロイスがディレクを咎めるがディレク本人はそれを気にする様子も無い。

険悪な雰囲気の中、セシルは皆に歩み寄り、ソファに座った。

「それにしてもうまくやったもんだな、セシル」

ディレクがそう言いながらニヤリと笑った。

「何の取り柄も無いと思っていたが、そちらの才能はあったらしい

な」

ディレクが何を言いたいのか分からずにセシルは黙って兄を見つめていた。

「国王陛下を体で誑し込んだんだろう？よほど具合がいいんだろうな」

ディレクが言わんとしていることを漸く察したセシルはボツと赤面した。

「何て事を言うんだ！お前は！」

はしたない、下世話な邪推にアロイスが声を荒げる。そんな態度もディレクにはどこ吹く風で尚も言葉を続ける。

「だって父さん、他に何があるっていです？」

然も面白そうに言うディレクを見ているうちにセシルは憤りを感じていた。

皆、どうしてもそこに話を繋げるのだろうか？他にも大切なことがあ
るではないか。エドアルドの寵愛を受けるようになってこのような邪推を受けることが多くなった。

その度を感じていた憤りがセシルの中で爆発した。

「どうしてそういう風にしか物事をみようとしなの？確かに、私と陛下

の間に何も無いとは言わないわ。だけど、そうなる前から陛下は私を愛

してくださっていたし、私も陛下を愛していたわ。男女の間で大切なこ

とは体の交わりだけでは無いわ。心と心が繋がることこそ大事なのよ。

心と心が繋がっていないのに体を繋いだって虚しいだけだわ」

思いかげずセシルに反論されたことでディレクは怒りに我を忘れた。そして・・・

「よせ！ディレク！」

気付いたアロイスが止めようとしたが一步間に合わなかった。

パアアン！

乾いた音が部屋中に響き渡った。

第55話

「口答えするな！生意気な！」

怒りに肩を震わせながらディレクが叫ぶ。セシルは一瞬、何が起ったか分からなかった。耳の届いたパアアンという乾いた音、頬を走る痛み、そして、口の中に広がる鉄の味に自分が兄から叩かれたのだと思い至る。

「何事ですか！・・・セシル様！」

物音を聞きつけてニコラが部屋に掛け込む。ニコラが目にしたのは口から血を流し、頬を押さえて涙ぐむセシルの姿だった。

「コンラート殿、セシル様をお部屋へ！アルトゥル殿は御医者様を」

ニコラの呼びかけに二人は迅速に動いた。

「セシル様、こちらへ！・・・ニコラ殿は？」

セシルを連れて部屋を出ようとしていたコンラートが問いかける。

「・・・私は旦那様方に御話がございます」

苦しげにそう言うニコラにコンラートは心配になりながらもその場を後にした。

「とんでもないことをして下さいましたね。ディレク様」

ニコラがディレクを睨みつけながらそう言った。その態度にディレクは

腹を立てた。

「黙れ！侍女風情が偉そうに！」

「黙るのはお前だ！ニコラの言っていることは正しい！」

アロイスの怒鳴り声にディレクは訳が分からないという顔をした。

「兄が妹を叩いたくらいでどうしてそんなに慌てるんだよ？」

ディレクの言葉にアロイスは信じられないという風に言った。

「本気でそんなことを言ってるのか？セシルは今やただのお前の妹では

無い！」

「え？」

「・・・セシルは王妃になるの・・・」

エディタが小さな声で呟いた。

「・・・王妃？」

いまだ、事態を把握できていない様子のディレクにアロイスは心底

呆れた。

「あの状況でそれが分からんとはな！お前は自分を完璧だと思っているよう

だが、私からすればお前の方が愚図だ！」

「何だと！？」

愚図と言われてディレクはアロイスに掴みかかるうした。だが、それをかわされ逆にアロイスに後ろ手に捻り上げられた。

「甘やかされて育ったお前は鍛錬を怠っていたからな。この老いぼれ一人殴れ

まい」

「あなた！よして！」

堪らずエディタが叫ぶがアロイスは手を離さない。

「この件はお前にも責任がある。ディレクをこんな風に育てたのはお前だからな」

アロイスの辛辣な言葉にエディタは唇を噛み締めた。

「分からないなら分かるように教えてやる。セシルが今宵、壇上に陛下に伴われて

現れたのはセシルが王妃に内定したことの証だ。単に寵室というだけではあの席

に着くことは出来ない」

アロイスの紡ぐ言葉にディレクは顔色を無くしていく。

「如何に兄といえど王妃に手をあげることなど赦されない。お前は不敬罪に問われるだろうな」

不敬罪という言葉にディレクは全身に震えが走るのを感じた。

「でも！俺が不敬罪に問われるなら家だつてただじゃすまないんじゃない……」

「セシル様が王妃になるためには爵位は必要不可欠。ブルックナー家そのものに

爵位や領地の剥奪が行われるとは思えません」

ディレクが絶るように発した言葉を言い終わる前にニコラが否定した。

「刑罰が下るのはディレク様お一人でしょうね。御覚悟なさいませ」

ニコラはそう言い放った。ディレクは力なく項垂れた。

「……奥様、ディレク様」

ニコラの呼びかけにエディタが怪訝な顔をする。

「陛下はお二人のセシル様へのなさりようを全てご存知です。そして、大変お心を

痛めておいでのご様子でした。」

発せられた言葉の内容にエディタは血の気が引いて行くのを感じていた。

「今回の件、穩便に済むなど努^{ゆめゆめ}努^{ゆめゆめ}お思いになられませんかように」

ニコラはそう言い残して部屋を出て行った。後に残された三人はこれからのことに

戦々恐々としながら逃げるように王宮を後にしたのだ。

第56話

「何だと?!」

舞踏会を終えたエドアルドの元にセシルがディレクに暴力を振るわれた

との一報が入った。エドアルドはそれを聞いて大変驚いた。

「セシルの具合は？」

報告を持ってきたエルンストに早口に問いかける。

「頬が少し腫れておいで、口の中を少し切られたようです。平手で叩かれたようで、骨には異常は無いだろうとのことですよ」

エルンストの言葉にエドアルドは今すぐセシルの元に駆け出したい
衝動

に駆られた。だが、それを堪えてその場に留まった。

エルンストと話し合わなければならぬと思ったからだ。

「・・・母親と兄が来ているなんて報告は受けていないぞ？」

知っていれば面会になど行かせなかった。エドアルドは自らの行動を悔いた。

「恐れながら、あの件は極秘事項です。知っている者は一部しかおりません。ですから・・・」

「ブルックナー家が一家総出で来ていても誰も不審に思わない、か」

エルンストの言葉をエドアルドが引き継いで呟く。セシルの立場を守るために極秘に事を進めていたことが裏目に出た。エドアルドはギリッと齒軋りして窓の外を睨みつける。

「どうなさるおつもりですか？」

エルンストの問いかけにエドアルドは窓の外から視線を外さずに応える。

「どうするも何も、表立って処罰すればこの件が公になる。

芋づる式にあの件も公になりかねん。そうなっては大臣

連中が黙っていまい」

エルンストの顔が曇る。エドアルドの言うことは尤もだ。これはセシルの立場を危うくするに足る大事件なのだ。

「この件はすでに戒口令を出しました。後は対処の問題だけです」

その対処が一番難しいことをエドアルドもエルンストも分かっている。

下手をすればセシルの立場はもちろんだが、ブルックナー家の存亡にも関わる。

ふっとエドアルドが溜息をついた。そして、窓の外から視線を外してエルンストの方へ向き直る。

「当初の計画通りに事を進めるしかあるまいな・・・」

「しかし、それでは・・・」

「本来なら極刑にせねばならぬ事案だがな」

それが出来ぬ状況であることが腹立たしい。しかし、怒りですべてを台無しにするわけにはいかない。セシルを手放すことなどエドアルドには出来はしないのだから。

エドアルドは湧きあがる怒りをグツと堪えて冷静に物事を考えることに努めた。

最善策などありはしないのかもしれない。だが、諦めるわけにはいかない。

「エルンスト、準備を進めておけ。あの件が片付いたらこの件へ移るぞ」

あの件とはゲオルクの件だ。決行が目前に迫っているためそちらを優先するしかない。

「畏まりました」

エルンストはそう答えてエドアルドの執務室を後にした。

「何でも次々と・・・」

エドアルドは苦々しい気持ちでそう呟いた。そして、セシルの元へ行くために自らも執務室を後にした。

第57話

「セシル様、陛下が御越しです」

廊下から聞こえた声にセシルはベットに横たえていた体を起こし、頬にあてていた

冷水に浸した布を外した。そして、ニコラに向かい小さく頷いた。それを受けてニ

コラがエドアルドを招き入れる。

「陛下、お待ちしております」

ニコラの出迎えに軽く頷きながらエドアルドは部屋の中に視線を走らせる。そして

ベットに座っているセシルを見つけ、足早に近づいた。

「下がれ」

サツと手をかざし、ニコラ達にエドアルドはそう告げた。ニコラ達はそれに従い、一礼して侍女室に下がった。

エドアルドの瞳がセシルの掌に握られている布を捕らえた。

「頬を冷やしていたんだろ？構わないから続ける」

エドアルドにそう言われても目の前でそうすることを何だか遠慮してしまい、セシル

はそれをするのが中々出来なかった。渋るセシルに焦れてエドア

ルドがその掌から
布を奪い、そつとセシルの頬に宛がった。

ひんやりとした感触が痛みと熱に心地よく、セシルは思わずホッと息をついた。

「・・・すまなかったな。何も知らなかったんだ。知っていればお前を面会に行かせなかつたんだが・・・」

エドアルドがそう告げるとセシルは小さく首を振った。

「私だつてお母様とお兄様が来るなんて思っていなかったもの。仕方ないわ」

そう言つてセシルは微笑もうとしたが頬が腫れているためうまくいかなかった。その
様子がさらにエドアルドの胸を締め付ける。

「・・・エドアルド、お願いがあるの」

セシルが徐に口を開く。

「何だ？」

優しい声音でエドアルドが応えるとセシルは言いにくそうに俯いた。
そして、そのまま
姿勢でこつ言つた。

「・・・お兄様に罰を与えないで」

「え？」

エドアルドは一瞬驚いたがすぐにセシルらしいと思い直した。こんな目に合つてまで

セシルは家族を思いやる気持ちを忘れないのだろう。

「私が口答えなんかしたからお兄様が怒ってしまったの。あんなことしなければ良かったわ。そうすれば・・・こんなことには・・・」

セシルが兄に口答えするなど今までのセシルでは考えられないことだっただろう。

セシルは強くなった。それは誰もが感じていることだ。だが、強くなったことで

今回の事態が引き起こされてしまったということは何とも皮肉なことでとエドアルドは思った。

「・・・お前の気持ちは分かるが・・・」

「無理なお願いをしているのは分かっているわ。でも・・・」

エドアルドはセシルの願いを全面的に叶えることは出来ないと思った。戒口令を布いた

とはいえこの件を知っている者はゼロではない。ディレクに何の処罰も与えないことは

その者達に示しがない。

「・・・何の処罰も与えないということは約束できない」

エドアルドが苦しげな声でそう告げる。セシルはその言葉に落胆の表情を浮かべた。

「・・・だが、命までは奪わない。それは約束しよう」

エドアルドの言葉にセシルがパツと顔をあげる。そこには真剣な眼差しがあつた。

命までは奪わない。それがエドアルドの精一杯の譲歩であることはその眼差しと声でセシルにも分かつた。だから、セシルはそれを受け入れるしかなかった。

「ありがとう。エドアルド」

礼を言われてエドアルドは何だか後ろめたい気持ちに囚われた。自分分はセシルの母親と兄を排除しようとしている。しかも、その理由をセシルに伏せたまま事を運ぼうとしている。

・・・俺は卑怯なのかもしれんな・・・

だが、そうまでしてセシルが傍らにいる未来を望んでしまう自分がいることを

エドアルドには分かっている。

初めて愛した人だからこそエドアルドは止まることが出来ない。

「セシル、もう休もう。」

エドアルドはそう言ってセシルをベッドに横たえた。そして、その横に自分も寝転んだ。

「・・・お休みなさい、エドアルド」

セシルはエドアルドの提案に素直に従ってそう言った。

「ああ、お休み」

エドアルドはそう答えてセシルを後ろから抱きしめた。セシルの顔が何だか見ることが出来なかった。

第58話

「セシル、こんなときに悪いが今夜は此処へは来られない」

共に過ごした翌朝、エドアルドは申し訳なさそうにそう呟いた。

「どうしても片づけなければならぬことが山積しているんだ。すまないな」

エドアルドの言葉にセシルは一抹の寂しさを感じながらも笑顔を浮かべて
頷いた。

「お仕事は大事ですもの。仕方ないわ」

セシルの言葉を受けて、エドアルドはセシルの髪を一撫でして頷いた。

「なるべく早く片づけるつもりだが、もしかしたら・・・長引くかもしれない」

「ええ。分かったわ」

長引くかも知れないということは今夜だけではなく、暫くこちらへは来られない

のかもしれないとセシルは思った。エドアルドは国王であり、公務や執務に忙しい

のは重々承知しているつもりだ。セシルは毎晩でも逢っていたいと思わないわけで

は無いが我が儘を言うつもりは毛頭なかった。

「ではな、セシル。行ってくる」

「はい。いつてらっしゃい」

セシルの笑顔に見送られ、エドアルドはセシルの部屋を後にした。

自らの執務室に入ったエドアルドはエルンストにこう告げた。

「明日の朝、ブルックナー伯爵を呼び出せ」

「明日ですか？」

「本当は今日にでも済ませてしまいたいかな。今日はこちらの都合が悪い」

エドアルドの言葉にエルンストがずっと表情を引き締めた。

「・・・陛下、テオバルト殿下が最終の打ち合わせをなさりたいと」

「・・・分かった。呼べ」

その言葉を受け、エルンストは一礼して退室した。一人残されたエドアルドは

大きな溜息をついた。

「ついに、今夜か・・・」

ゲオルクを排斥すべきだという声は今までも何度も上がっていた。その度にもう少しだけ様子を見ようと周りを諫めて来たのは他ならぬエドアルド自身だった。だが、それを知らぬゲオルクはあろうことかセシルに手を出し、その命すら危険に晒した。もはや許すことが出来なかった。

いつかゲオルク自身が変わる時が来る、解る時が来るだろうとずっと待っていたがとうとうそれは訪れはしなかった。

ゲオルクに何が欠けているのか、それを教えてやるのは容易い。だが、自分自身で気が付かなければそれを真の意味で習得することは出来ない。上辺だけ取り繕って分かったふりをしているだけでは駄目なのだ。ゲオルクに欠けている何かとはそういうものだった。

本来なら、母親や乳母が幼少の頃からそれを教えてやらなければならぬのだがゲオルクはその機会にも恵まれなかったようだった。間違った教育を受けたという点では少なからず同情も抱く。

コンコン

扉を叩く音が部屋に響き、エドアルドは考えるのを止めた。

「入れ」

扉を開いてテオバルトとエルンストが中へ入ってくる。

「兄さん、いよいよだね」

楽しみにテオバルトが言う。それに小さく頷いて、エドアルドは胸の片隅に

あるゲオルクを不憫に思う気持ちを固く封じ込めた。

もはや、後戻りはできない。

第59話

「ゲオルク兄さんを盛り上げるのに成功したよ」

テオバルトがそう言った。それは決行が今夜で間違いないということの意味した。

エドアルドは小さく溜息をついた。何かが少しでも違っていたら、こんなことに

はならなかったのではないかという先程封じ込めたはずの想いが頭をもたげる。

エドアルドの様子にテオバルトが眉を顰める。

「まさか、今更止めたいなんて言わないだろうね？」

テオバルトの問いかけにエドアルドはフツと笑った。

「今更後には引けないことくらいわかっているさ。ただ・・・」

「ただ？」

「あいつがあんな風でなければ、こんな苦勞はしなかったのと思うだけだ」

エドアルドの言葉にテオバルトは大きな溜息をついた。

「もしもの話したって意味無いよ。あの人は愚かな道化師。それが事実さ」

「・・・そうだな」

冷たい態度でゲオルクのことを語るテオバルト。ゲオルクを愚か者と思う人間は

テオバルトだけではない。皆、口にこそ出さないがそう思っているだろう。ゲオ

ルクを今でも持て囃しているのは母親のヘルガだけだ。

ゲオルクの栄華はエドアルドが産まれた瞬間に終わりを迎えた。それを良しとす

ることがヘルガには出来なかったのだろう。当然と言えば当然なのかもしれない。

だが、それがこの事態を引き起こしたことも紛れも無い事実と云っていいだろう。

「今夜、ゲオルク兄さんは兄さんを襲撃する。正確には兄さんを入れ替わった

僕をだけどね」

テオバルトが確認作業に移った。エドアルドは気を引き締めそれに耳を傾けた。

「兄さんの部屋に踏み込んだ瞬間、僕の部下の合図でゲオルク兄さんの引き連れ

てる連中が兄さんを取り押さえる。そこで兄さんの登場だよ」

「分かった」

「登場した後は兄さんに任すよ。ゲオルク兄さんに現実を教えてあげて」

現実を教えるという言葉にエドアルドは少し考えるような仕草をした。

「どうしたの？」

それを訝しんでテオバルトが問いかける。

「現実って何をどこまで話せばいいんだろうな」

ゲオルクが知らないこと、知ろうとしなかったこと、解っていないことも

解ろうとしなかったこともたくさんあるのだ。語るべき事が多すぎて少々

困惑してしまうほどにゲオルクは全てに目を背けていた。正確にはヘルガに

よって目隠しされていた言ったほうが正しいのかもしれない。

息子を溺愛するあまり、ゲオルクが傷つくようなことを遮断し、自らも一切

口にはしなかったのだろう。でなければ、ゲオルクがここまで何も知らぬまま

成長するはずがなかった。

「全部だよ。全部話さなきゃ意味ないよ」

テオバルトが呆れたようにそう言った。その言葉にエドアルドは溜息をついた。

「全部か・・・長い夜になりそうだな」

そう呟いて、エドアルドは席を立ち、窓辺に立ち、外を見つめた。

「・・・やはり、あの母親も同罪だな」

エドアルドの囁きはテオバルトの耳にも届いた。

「・・・ヘルガさんの方はね」

テオバルトが徐に口を開く。エドアルドは窓の外から視線を外さずに次の言葉を待った。

「兄さんの暗殺が目的だと解った上で、ゲオルク兄さんが連れてる連中を雇ったこ

とと、ゲオルク兄さんをずっと煽り続けていた事で今回のことが起こったって

ことで罪に問おうと思ってるんだけど、いいかな？」

エドアルドがスツとテオバルトの方を向き直った。

「ヘルガはこの件を知ってるのか？」

「それは抜かりないよ。ゲオルク兄さんの取り巻きの一人にヘルガさんに泣きつか

せたんだ。『ゲオルク殿下がエドアルド陛下の暗殺まで計画してる。自分たちは

そこまで大それたことには協力出来ない』って。それであの人が、何て言っただと

思っ？」

テオバルトが饒舌に楽しげに語るのをエドアルドは無表情で見つめていた。

「ゲオルクが国王になれば、お前たちの将来も安泰よ。しっかり励んでね」

テオバルトはヘルガの言葉をそっくりそのまま伝えた。エドアルドの顔に

表情が戻る。その顔には怒りが浮かんでいた。

「止めるところか奨励しちゃったんだ。十分、同罪で引つ張れるね」

「・・・そうだな」

自分の子供が罪を犯すことを止めぬ母親。もしかしたら、罪だと思ってもいないのかもしれない。

ゲオルクが王になるのは当然。そのために邪魔なエドアルドを殺すことも当然。

今まで何度か命を狙われてきたエドアルドはその思考回路を理解しているつもりだった。だが、所詮はつもりであって理解しているわけでは無かったのかもしれない。

今回は今までとは違う。間接的ではなく、直接ゲオルク本人が手を下そうとしている。それすら当然なのかとエドアルドはヘルガに対し怒りが込み

上げてくるのを
感じていた。

「王など、そこまで固執するものでも無いのにな」

怒りを抑え、震える声でエドアルドが呟いた。その様子にテオバルトの顔も曇る。

「あの人たちの中で王というものは絶対権力の象徴でしかないんだよ。だから

固執するんだと思う」

「そんな考えだからあいつは！・・・ゲオルクに直接話すべきことだな・・・」

エドアルドは喉元まで出かった言葉を呑みこんだ。言わなくてもテオバルトは解っているだろう。解っていないのはゲオルク本人だけだ。

「・・・長い夜になりそうだね」

テオバルトがうんざりしたように呟いた。

「ああ」

エドアルドはそう答えると再び窓の外に目を向け、強く拳を握りしめた。

第60話

「・・・きたか・・・」

王宮からの使いだと執事に告げられたアロイスはそう呟くことしか出来なかった。

先日のディレクの暴挙。それがこのまま何の咎めも無しに終わるなど甘い考え

をアロイスだつて持っていたわけではない。最悪、ディレクは命を奪われかねない。

それだけのことをしてしまったことは十分承知していた。

真横に居たのに、ディレクの体が怒りに震えたことにも気が付いていたのに、子供

たちの間に入り、ディレクの暴挙を止めることが出来なかった自分の不甲斐なさに

腹が立つ。咄嗟のことに反応しきれなかったことに自らの老いを思い知らされたような気がした。

自分はもう、若くは無い。そう遠くない未来、当主の座を降りなければならぬ。

それなのに、ブルックナー家は跡取りを失おうとしている。アロイスは重い腰を

上げて、王宮からの使者の元へ向かった。

王宮からの使者が来たことはエディタとディレクにも伝えられた。ディレクはそれ

を聞いて顔色を無くし、おろおろと室内を歩きまわった。

「……落ち着きなさい」

それをエディタが静かな声で窺める。あの一件以来、母の態度が少し変わったこと

に自分の身を案じることで精一杯なディレクは気付いていなかった。

「これが落ち着いていられるかよ！王宮からの使者だよ！」

ディレクが大声で怒鳴る。それを受けてもエディタの態度に変化は無かった。

「もう、なるようにしかならないわ。どうにもできないのよ」

どこか突き放したようなものの言いにディレクの苛立ちはさらに大きくなる。

「俺が死んでもいいっていうの？！そうだ！セシル！あいつが陛下にうまく

取り成してくれるかもしれない！」

陛下の寵愛を受け、王妃になろうとしている妹。お人好しのセシルのことだ。

自分を殴ったことを許し、陛下に兄を助けてくれと懇願してくれるかもしれない。

ディレクはそう考え、ぱあっと表情を明るくした。

「……たとえば、あの子が陛下に何か懇願しても、お前が処分されることは変わ

らないと思うわよ」

エディタがそれを否定する。その言葉にディレクは衝撃を受け、立ち尽くす。

エディタがディレクの言うことを否定したことなど今まで無かった。いつも賛同

したり、絶賛したりしてディレクを誉めてばかりだった。

母の態度が変わったことにディレクは漸く気付いた。

「・・・どうしたんだよ？母さんが俺の言うことを否定するなんて・・・」

ディレクが茫然として問いかけた時、部屋の扉が開かれ、アロイスが入ってきた。

それを横目で見つめ、エディタが問いかける。

「・・・王宮からは何て？」

「・・・咎めについては何も・・・。ただ、明日の朝、王宮に来るようにと」

「・・・そう」

然して興味の無さそうなエディタの態度が気になりつつも、アロイスはディレクを見つめた。

「・・・今日一日は命が長らえたようだな」

アロイスがそう声を掛けるとディレクの体は恐怖に震え始めた。

「父さん！俺は！俺はどうなるんだよ？！」

アロイスに縋りつき、そう叫ぶディレクをアロイスは乱暴に振り払う。

「明日にならなければ何もわからん！」

アロイスはそう答えると部屋を出て行った。

「母さん！母さん！俺はどうなるんだ？！死にたくない！死にたくない！」

今度はエディタに縋りつき、ディレクはそう言いながら泣いた。その頭を優しく撫でながらエディタは口を開く。

「・・・必死になって守ってきたのに、可愛がってきたのにお前は全部台

無しにしまったわね・・・」

口調は優しい、だが、声音は冷たかった。ディレクが驚いて顔をあげる。

そして、ハッと息を呑んだ。口元は笑っているが目が笑っていない。エディタの口がゆっくりと動く。

「・・・やはり、お前を産むべきじゃなかったのね」

「えっ？」

告げられた言葉の衝撃にエディタに縋りついていたディレクの手が緩む。

それを合図にしたかのようにエディタも部屋を出て行く。

後に残されたディレクは死への恐怖など忘れていた。ただ、最愛の母が放った

言葉に打ちのめされ、茫然とその場に座り込むだけだった。

第61話

「あんなこと言うべきではなかったわ・・・」

セシルはそう呟いて窓の外を見つめた。後悔しているのは昨夜自分がエドアルドに言った言葉だ。

『お兄様に罰を与えないで』

あの時は気が動転していてあんなことを言ってしまったが、気が落ち着いてくると

国を背負うものとして、あんなことは言うべきではなかったとセシルは激しく後悔していた。

実の兄とはいえ、王妃に内定した妹を殴ればそれは大きな罪になることをセシルは分かっている。分かっていたからこそ、昨夜ああ言ってしまったのだが、それは妹としては正しい行為でも、王妃候補としては正しくない行為であったこと漸く自覚した。

国を背負う覚悟がまだまだ足りていなかったようだ。セシルは自分が恥ずかしくなった。

「・・・ニコラ、手紙を書く準備をして」

窓の外を見つめ、何事かを考えていたらしい主人に突然の申し出にもニコラは表情一つ変えずにそれに従った。

「どうぞ、セシル様」

ニコラに紙とペンを差し出されたセシルがニコラの方を向くとパタパタと動き回るイーナとモニカの姿が見えた。

昨夜に一件について二人とも何も聞いては来ないがきつと気になっていることだろう。

それは騎士達も同じかもしれない。セシルは手紙を書き終えたら、皆に話をしようと決めた。あまり口外したい話でも無いが、皆、よくしてくれているし、信頼できる者たちだ。知ってほしいとセシルは思った。

手紙には昨夜の自分の願いは忘れて欲しいこと。国を背負う覚悟が足りなかったとを詫びる言葉。そして、兄の処遇はエドアルドに任すことを認めた。

「ニコラ、これを女官長の所へ。陛下への文だと伝えて」

手紙を差し出しながらセシルがそう言った。

「畏まりました」

ニコラは手紙を受け取り、部屋を出て行こうとした。

「ニコラ、戻ったら皆を集めて。・・・話をしたいの」

セシルの言葉に振り返ったニコラはその瞳に宿る強い決意を感じとった。

「・・・分かりました」

そう答えてニコラは女官長の元へ向かった。

女官長の元へ向かったニコラは手紙を差し出し、セシルから陛下への文だと

伝えた。女官長はすぐに届けさせると言った。それに一礼してニコラは女官長の元を後にした。

女官長の元から戻ってからニコラはコンラート達の詰め所に立ち寄り、セシル

から話があるので部屋に来るように伝えた。セシルの部屋の前で警護に当たって

いたアルトゥルにも部屋に入るよう促した。部屋で仕事をしていたイーナとモニ

カにも手を休めるよう言った。

何事かと訝しがる面々をセシルの前に集め、ニコラはセシルにこう言った。

「皆、揃いました」

それに頷いて、セシルはゆっくりと話し出す。

「皆、仕事中にごめんなさいね。どうしても皆に話したいことがあるの」

皆の顔が一様に引き締まる。ニコラはセシルを黙って見つめている。

「・・・昨夜の一件。面会のために用意された部屋に通されたら、そこには私の

家族が全員いたわ。普通なら驚くようなことじゃないんだけど、私は凄く驚いた

の。・・・私とお兄様とお母様はうまくいってはいなかったから。お兄様とお母

様が私に会いに来るなんて思っても居なかったのよ」

セシルから齎される情報は聞いていて悲しくなることだったが、皆はそれを表情に出さぬよう努めた。

「いつも通りの会話。お兄様が私を馬鹿にしたような態度を取るのもいつも通り

だったのに、昨夜の私はそれが我慢ならなかったの。遠まわしに陛下のことま

で侮辱されたような気がしたの。私だけなら構わないのだけど、陛下のことま

でとなると我慢出来なかったわ」

これは冷静になって改めて気付いたことだった。

「口答えしたらどうなるのかなんて、考える余裕が無かったわ。気がついたら

反論していた。そして、・・・激昂したお兄様に頬を叩かれたの」

セシルを叩いたのが彼女の家族の誰かだろうと薄々感づいてはいたが、事実と

して突き付けられるとそれは衝撃となった。

「・・・冷静になって、自分の仕出かしたことがどんな事態を招くのか思い知っ

わ。お兄様は命を奪われるかもしれないし、家もどうなるかわからない。私は

王妃候補から外れるかもしれない」

セシルが紡ぎ出す言葉は皆の胸に大きな衝撃を与え続けている。それはセシルも

感じているはいるが、言葉を止めることはしなかった。まだ、伝えたいことがセシルにはあった。

「そうなったら、きっとニコラ以外の者は私付きから外されると思うの。その時

何も分からずにいきなり他の所に行かされたら皆は戸惑うと思う。だから、皆

には話しておきたかったの」

皆はセシルが何故いつも他の側室の厭味や嫌がらせにじっと耐えていたのか漸く

理解した。虐げられてきた者はその対処を知っている。言いたいだけ言わせれば

満足して去っていくことを身を持って知っていたからあの反応をすんなりやって

のけたのだ。同時にそうすることが出来るはずのセシルが兄に対し口答えをした
ことの意味も理解した。セシルは強くなった。それは誰もが感じていることだ。

だが、強くなったが故にじっと耐えることを良しとしなくなったのだらう。それがこの事態を引き起こしたことが皆は何とも皮肉に思えた。

「・・・たえ」

じつとセシルの言葉に耳を傾けていたコンラートが静かに口を開く。

「たとえば、セシル様が王妃候補から外れ、私の配置換えが行われたとしても」

コンラートが言わんとしていることを他の者も感じ取っていた。皆、表情を引き締めてセシルを見つめる。

「我が忠誠は心の主は生涯、セシル様です」

コンラートがはっきりとそう言った一礼した。他の者も静かに頷き、それに続く。

「・・・皆」

セシルは胸が熱くなった。まだまだ未熟で王族になる覚悟すら足りない自分を皆は許してくれるというのか。セシルは先のことは分からないがもっともっと頑張ろう

と思った。王妃候補から外れるかもしれないという不安は拭い切れないがそれでも覚悟をもつと高めようと誓った。皆の思いに応えるため、エドアルドの愛に応えるため、そして、自分のために……。

「……さあ、仕事に戻りましょうか」

ニコラがそう言った。皆はそれぞれの仕事に戻って行った。先のことが不安なのは皆同じだが、それを嘆くばかりでは駄目だと皆分かっていた。どうなるか分からないからこそ一日一日を大切に過ごすことが大事だと皆が思っていた。

第62話

「陛下、後宮よりセシル様からの文が」

執務に追われていたエドアルドの元にエルンストがそう言いながら書簡を手にとってきたエドアルドはそれを受けとって文面に視線を走らせる。そうして全て読み終えた後大きな溜息をついた。

「陛下、セシル様は何と？」

エルンストが問いかける。エドアルドは片手で目元を多い俯いた。

「王族になる覚悟が足りなかったと詫びて来た。それから昨夜、自分が言ったことは忘れて欲しいとな。・・・あの小さな肩に大きな物を背負わせてしまったな・・・」

自分が王という立場でなかったらこんな苦しみを与えることはなかった。

それはセシルと思いを通わせ、セシルに危険が及ぶようになってからエ

ドアルドがずっと考えていることだ。もちろん、考えても仕方が無いこ

とは分かっている。ゲオルクの件でテオバルトが口にしたようにもしも

の話をしても意味は無い。だが、考えずにはいられないような事態がこ

このところ多すぎる。

「・・・セシル様は昨夜、何と仰ったのですか？」

エルンストは敢えてそう問いかけた。本来なら聞かない方がいいとは思
うが今のエドアルドはそれを聞いてほしいように見えた。

「・・・兄に罰を与えないで欲しいと」

エドアルドが告げたセシルの言葉にエルンストはあの方らしいと思
った。

だが、それは王族となるには未熟な考えであると云わざるをえない
言葉

だとも思った。一晚経って、セシル本人もそう思ったのだろう。そ
れ故

にエドアルドに文で詫びてきたのだろうとエルンストは思った。

「・・・そうですか。して、陛下はそれに何と答えたのですか？」

今のエルンストは宰相というより兄のような気持ちでエドアルドに
接して

いた。エドアルドもそれを望んでいるように感じた。

「・・・命までは奪わないと。エルンスト、俺は嘘つきだな」

自嘲的な笑みを浮かべてエドアルドはそう言った。

「世の中には必要な嘘もございます。それに、陛下は表向き何もな
さらない

のですから表面上は約束を違えたことになりません」

きつぱりと言い切るエルンストにエドアルドはフツと鼻で笑った。

「裏で手を引いているのが俺だとバレなければ良いと言っのか？ 我ながら

危ない橋を渡っているな。この件も、あの件も・・・」

何時になく弱気なエドアルドにエルンストは内心腹が立ってきた。

「陛下、すべての事柄において既に後戻りできない段階まで進行しており

ます。やるとお決めたのは貴方です。お決めになったのなら、やり遂げ

る御覚悟をお持ちください」

エルンストは強い口調で言い放つ、その言葉を受けてエドアルドは顔を上げ

鋭い視線をエルンストに向けた。

「セシル様が王族になる覚悟が足りなかったと詫びて来たと仰いましてが

覚悟が足りないのは陛下も同じです。この期に及んでまだ迷っている

しゃる。ゲオルク殿下の件もブルックナー家のことも」

エルンストの厳しい指摘にエドアルドは思わずエルンストから目を逸らす。

「真実が露見すれば確かにその代償は大きいでしょう。それを恐れる気持ち

も分からなくはございません。ですが、もうやるしかないのです。あの者

「私たちは性格に難はありますが腕は確かです。真実が露見することはないで

しょう。あの者たちを信じて前に進むしかないのです」

エルンストの言うあの者達とは今回の事案で暗躍している秘密部隊のことだ。

エドアルドだって秘密部隊の力量を信用していない訳ではない。ただ、今回

の事案は慎重になりすぎてしまっただけだ。それを覚悟足りないと断じられ

ばそうかもしれないとエドアルドは思った。

「・・・覚悟が足りないのは俺も同じか。そうだな、少し弱気になっ

ていた
ようだ」

どうして、こうもエルンストの言葉は素直に受け入れることが出来るの

だろうとエドアルドは思っていた。両親やテオバルトの言葉とはまた違った響きとい

うか力を持っているように感じる時がある。そして、それを感じる度に思うのだ。

「・・・お前が俺の本当の兄ならよかったのにな」

エドアルドがしみじみとそう言った。それを聞いたエルンストが顔を顰める。

「また、もしもの話をなさって」

不満そうにそう言うエルンストにエドアルドは苦笑いを浮かべた。

「もしもの話というより、率直な感想なんだがな。・・・もしもの話はもう

しない。前に進む。自分で決めたんだからな。良く考えてみれば、これは

最初の一山にすぎない。セシルを王妃に迎え、傍らに居てくれる人生を望

むなら、これからだって何かしら乗り越えなくてならないだろうからな」

最初の一山が一番の難所であるような気もするが、エドアルドはそれに挑む

と決めたのだ。弱気になっている暇も立ち止っている暇もないことを改めて再認識した。

「すまなかつたな。もう、弱音は吐かん」

エドアルドが表情を引き締めてそう言った。エルンストはそれを受けて少し

だけ微笑んだ。

「それでこそ、陛下です。私も微力ながらお手伝い致します」

エルンストの言葉受けて、エドアルドも少しだけ微笑んだ。

第63話

「綺麗に磨いとかないかね」

亜麻色の巻き毛を肩辺りまで伸ばした髪型のぱっちりとした碧い瞳をもった

まだあどけなさを残す顔立ちをしている小柄な少年がその体軀に似合わぬ大

鎌を樂しげに磨いている。

「おい、ハンネス。浮かれるなよ」

ハンネスと呼ばれた少年は呼び掛けた人物をムツとした表情で見上げた。

「別に浮かれてないよ。ただ、この鎌を振るう機会がやっと来たから嬉しい

だけだよ」

それを浮かれているというのではないか？と呼び掛けた人物は溜息をついた。

「まあまあ、グイード。ハンネスだってちゃんとわかってますよ」

グイードと呼ばれた茶髪の長身の男はそう言って来た長い黒髪を低い位置で

まとめた眼鏡を掛けた細身の長身の男を振り返る。

「甘やかすなよ、イヴァン」

イヴァンと呼ばれた男は苦笑いを浮かべた。

「甘やかしてるつもりはありませんよ。貴方の小言でハンネスがへそを曲げて

仕事をしないと言い出したら私の負担が増えます」

「結局そこかよ・・・」

さも当たり前のことのように言うイヴァンの態度にグイードは心底呆れた。

「ちょっとイヴァン、僕はそこまで子供じゃないよ！」

ハンネスはイヴァンに馬鹿にされたような気がして声を荒げた。

「おや？そうでしたか？それは失礼。子供の相手はやはり難しいですね」

溜息混じりにそう言うイヴァンをハンネスが頬を膨らませて睨む。それを

涼しげに受け止めてイヴァンはニヤリと笑った。

「その態度が子供だと言うんですがね？」

ずばりと言われてハンネスが地団太を踏んで悔しがる。二人のやり取りを

傍観していたグイードはやれやれといった感じで口を開いた。

「もうよせ、イヴァン。お前の方がハンネスの機嫌を損ねそうだぞ。

ハン

ネスも一々真に受けるな。イヴァンがそういう性格だっていい加減理解しろ」

グイードの言葉を受けてイヴァンは大げさに肩を竦めてその場を離れた。ハ
ンネスの方は深呼吸をして落ち着こうとしているようだ。

「全く、お前たちはいつも下らんことで言い争って、クルトを見習って少しは黙ってたらどうだ」

うんざりしたようにグイードがそう言っているとイヴァンはたと思い立ったように室内を見渡す。

「そう言えば静かですね。……って何をしてるんです？クルト」
クルトと呼ばれた黒髪の短髪に浅黒い肌をした大柄な男は手に持ったリンゴを見つめたままで呟いた。

「……話しかけるな。これ以上力を込めたらリンゴが碎ける」
クルトは人並み外れた怪力の持ち主で、己が両手だけ戦場を駆け抜ける戦士だ。だが、その人並み外れた怪力をうまく制御できず、日常生活に少なからず支障が出ている。今、彼は掌のリンゴを碎かずにその皮を剥こう

と必死なのである。ピーンと張り詰めた緊張感の中、クルトが集中しすぎてプルプルと震える手でリンゴにナイフを宛がう。周りの者はそれを固唾を飲んで見守っていたが堪え切れなと言わんばかりにハンネスがクルトの元に走り寄った。

「ああもう！危なつかしくて見てらんないよ。貸して！」

そう叫びながらクルトからリンゴとナイフを取りあげたハンネスはくるくると器用にあつという間にリンゴを剥き終え、クルトに差し出した。

「はい！」

「・・・あ、有難う」

差し出されたリンゴをクルトが受け取ろうとした瞬間、リンゴが見事に碎け

ちった。リンゴを差し出していたハンネスは新鮮なリンゴジュースを思いきり浴びてしまった。

「・・・クルルト」

「すまない。いきなり差し出されて制御がうまくできなかった」

本当にすまなそうなクルトの顔を見ているとハンネスはこれ以上怒

る気にな

れず「着替えてくる」と言い残して部屋を出て行った。

「クルト、お前の怪力は確かに戦力の要だが、制御は出来るようになってく

れ。お前、昨日も椅子を3脚壊しただろ？」

グイードがそう言うところクルトは益々すまなそうに項垂れた。

「そうだ。椅子でも何でも、敵以外のモノは女性に触れるように優しく触れ

て見たらどうです？」

イヴァンが然も良いことを思いついたかのように進言する。それを聞いたグ

イードは眉を顰め、クルトはハッと何かに気付いたような顔をした。

「・・・お前、もっと何か違うモノに例えたらどうよ？」

グイードがそう言うところイヴァンは心外だという顔をした。

「これ以上分かりやすい例えは無いでしょう？グイード、クルトが壊さずに

触れられるモノって何か他に思い当たりますか？」

そう言われてしまうと何も思いつかなかった。グイードはイヴァンの言うところ

とにすっかり感心してしまった。一方のクルトは己の掌を見つめ、じっと考

え込んでいた。

「・・・なるほど、女性に触れる様にか・・・やってみよう」

「クルト、大仕事が控えてるからそつちを優先してくれ。制御に気を取られ

仕事は疎かになっちゃ困る」

強い決意を滲ませそう言うクルトにグイードが一応くぎを刺す。

「・・・分かっている」

そう言いながらもクルトの目は掌のリングにくぎ付けだ。グイードは本当に

大丈夫だろうかと頭を抱えた。

「・・・陽が暮れますね」

ふと、イヴァンが呟いた。グイードも視線を窓の外に走らせる。

「ああ、俺たちの時間が始まる」

彼らはアルコーン王国秘密特殊部隊「シュバルツ」。その任務は主に暗殺や

諜報活動などでいわば、王国の闇である。その存在は国王と宰相、そして彼ら

の直属の上司であるテオバルトにしか知られてはいない。「シュバルツ」は

テオバルト自らが人選を行い、教育も施したまさに暗殺と諜報のエキスパート

なのである。今回の彼らの任務はゲオルクの件とブルックナー家の件の二つ。

どちらも表沙汰に出来ぬ事案故、彼らの担当となった。

「今夜の件だな。まずは俺とお前で行くぞ。仕上げは全員でやるがな」

グイードがイヴァンに向けてそう言つとイヴァンはとても嫌そうな顔をした。

「・・・面倒ですが仕方ありませんね」

本気で面相そうにそう言うイヴァンを睨みつけつつ、グイードは気を引き締めた。

もうすぐ、夜の帳が下りてくる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8806t/>

野に咲く花のように

2011年12月30日19時25分発行